

鬼舞辻無惨レ○プ！鬼  
狩りと化した先輩&淫  
夢ファミリー

ジョニー一等陸佐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

迫真空手部の稽古を終え、いつもものようにくつろいでいた野獣たち。そこへ不幸にも黒塗りの高級車と白いワゴン車が突っ込んできた。気付くと野獣は一人、見知らぬ雪山の中に立っていた。途方に暮れる先輩は幸運にも炭売りの少年竈門炭治郎と出会う。心優しい少年とその家族は野獣を快く迎え入れ、日常を共にすることになる。しかしその日常は突如一変。炭治郎と野獣が炭売りから帰ったその日、家族は鬼に皆殺しにされ唯一生き残った炭治郎の妹、禰豆子も鬼に変貌してしまっていた。

殺された家族の敵を討つため、そして妹を人間に戻すため、野獣と炭治郎は旅立つ。二人に降り注ぐ数々の試練、仲間との出会い、再開、別れ。そして迫りくる鬼たち。加

熱した鬼との戦いは、遂に危険な領域へと突入する。

これは日本一慈悲しい、そして少し汚い鬼退治の物語

※注意事項くお前初めてかこの小説は？読む前にこれをあまさず読んでよ

・この小説は鬼滅の刃と真夏の夜の淫夢のクロスオーバーです。こんなクツソ汚いクロスオーバー小説書いてしまつてごめんなさい（懺悔）。鬼滅の刃で淫夢を汚すなという兄貴はブラウザバック、オナシヤス！

・真夏の夜の淫夢を知らない人は窓際行つて・・・ググれ。でもあまり深入りはしないほうが幸せです。興味のある人、良い子の皆はニコニコ動画やYouTubeのMAD動画や淫夢動画やBB先輩劇場で我慢してください。間違つてもポーンハブやFC2動画で本編に手を出すのは・・・やめようね！ちなみに作者はほんへコンプしたゾ。だからお前らも、ホラ、見ろよ見ろよ、ホラ（注意しながら淫夢を勧める作者の屑）。

・淫夢が題材ですが、ノンケ展開が多いです。もしかするとラブコメもあるかもしれない。ホモの兄ちゃん許してえ。

・作者はリアルな生活に加えてほかの小説の連載もあるので投稿が少し遅くなりま

す。ホモの兄貴の皆さん許してナス！

・感想や指摘は作者が作品を描き続けるためのガソリンの一つです。ちよつとした感

想でも書いてくれたら・・・ありがとナス！

・活動報告『大正イキスギイ！イクイクイク・・・アツ・・・ンアツー！』（≧≡≡≡）話』を挙げました。作品に関して意見やアイデアがあったらここに投稿して、どうぞ。

・鬼滅の刃ファンの兄ちゃん、淫夢民の皆さんとにかくすいません許してください！何でもしますから！（なんでもするとは言ってない）

それでは読んで、どうぞ。

# 目次

登場人物・設定（随時更新）	1	第10話	最初の任務	169	
第1話	野獣先輩、タイムスリップする	12	第11話	野獣の眼光と耳飾り	193
第2話	野獣と竈門家	23	第12話	医師と店長	212
第3話	野獣先輩、鬼狩りと出会う	53	第13話	鬼と平野の血鬼術	232
第4話	AKYSとの再会	75	第14話	鬼舞辻の呪い	252
第5話	野獣先輩、覚悟の裏技	90	第15話	木村と善逸との再会	266
第6話	鍛錬の裏技	108	第16話	鼓の鬼	280
第7話	空手部再会の裏技	124	第17話	恐怖と向き合って、己を鼓舞、しよう！（提案）	294
第8話	空手部連携の裏技	140	第18話	空手部、再開再び	308
第9話	うんこの擬刀化	155	第19話	空手部の休息	322
			第20話	那田蜘蛛山	332
			第21話	山中での戦い	346



# 登場人物・設定（随時更新）

登場人物

主人公

・野獣先輩／田所浩二

みんなご存じ野獣先輩。本作の主人公。聖バビロン学院大学に通う学生。大学では迫真空手部に所属しているが、水泳部も掛け持ちしている。時折人間の屑の如き言動も見せるが、根は普通に善人で仲間や友人のために行動する人間の鑑。

ある時いつものように迫真空手部の稽古を終え、仲間とくつろいでいたところに黒塗りの高級車が追突、大正時代にタイムスリップしてしまう。その後竈門一家に拾われ居候することになるが、炭治郎とともに炭売りから帰ったある日、家族が鬼に皆殺しにされて、生き残った妹・禰豆子も鬼にされてしまう。家族の敵討ちと妹を人間に戻すため、そしてより強くなり人々を守るため、鬼狩りになることを決意。鍛錬を積み、鬼殺隊の一員として活動することになる。

呼吸は迫真空手の呼吸や技を応用した野獣の呼吸を使う。また、彼の使う日輪刀はどいういうわけかクツソ汚い茶色である。

ちなみに炭治郎と善逸によると「いい人だけど、何故かほんの微かにクツソ汚い、臭い匂いがする」「時折泣きたくなるぐらいクツソ汚い音がする」とのこと。

・竈門炭治郎

みんなご存じ鬼滅の刃の主人公。竈門家の長男であり、炭売りとして働き一家を支えていた。貧しいながらも、家族との日常を幸せに感じ、常に家族思いで行動していた心の優しい、人間の鑑。なお本作では野獣たちの影響を受け若干人間の屑・ホモガキと化す模様。親切で他人を放っておけない性分であり、タイムスリップし途方に暮れていた野獣を拾い、竈門家に迎え入れた。

その後も変わらぬ日常を送っていたが、ある日突然、家族を鬼に皆殺しにされ、唯一生き残った妹の禰豆子も鬼にされてしまう。家族の仇を討つこと、そして妹を人間に戻すことを誓い、鍛錬の末鬼殺隊に入隊、鬼狩りとして野獣と共に戦うことになる。

使う呼吸は水の呼吸。

ちなみに彼は常人より遥かに嗅覚が優れており、その鋭さは感情さえも嗅ぎ分けるほどである。

仲間たち

・三浦智将



野獸の先輩。迫真空手部に所属し、日夜野獸たちと切磋琢磨していた。ある日黒塗りの呼吸者に追突され大正時代の山の中にタイムスリップ。そこで伊之助と出会い、格闘を繰り広げるが勝負はつかず、紆余曲折の末仲間となる。その後、伊之助と共に鬼殺隊士の村田とサイコロステーキ先輩を襲い（意味深）、鬼殺隊の存在を知り伊之助と共に入隊。鬼狩りとして戦うことになる。

普段は天然で抜けた性格であり、ひどいときには池沼扱いされることもあるが時折その名の通り智将のように鋭い、的を得た言動を見せることもある。また、先輩として仲間をまとめ守ろうとする人間の鑑である。

またきっかけがあると、別人のように覚醒し普段より見た目も実力も大きく変貌する。野獸たちはこの状態の三浦を『智将MUR』『MUR閣下』と呼んでおり、この状態の三浦には秋吉以外誰も勝つたことがない。

使う呼吸は迫真空手を基に独自に編み出した便乗の呼吸で、ほかの鬼殺隊士とは違い日輪刀ではなく手甲を使って戦う。

・木村ナオキ

野獸の後輩。迫真空手部に所属する若手の部員。野獸たちと同様、ある日突然黒塗りの高級車に追突され大正時代にタイムスリップ。途方に暮れ彷徨っていたところを善逸と出会い、そのまま育手の老人に拾われる。その後、彼のもとで鍛錬を積み善逸と共に

に鬼殺隊士として活動することになる。

空手部の中では冷静・常識人な性格で、野獸たちにツツコミを行う。機転が回り、計算高いところがある一方で、仲間思いの後輩の鑑。なおキレると別人のように怖くなる。

使う呼吸は雷の呼吸に迫真空手の技術を応用した痴呆の呼吸。ただし、今のところ善逸と同じように一つの型しか使えない（存在しない）。また、三浦と同様、ほかの隊士と異なり槍で戦う。

・嘴平伊之助

原作の主要登場人物の一人。イノシシの被り物をした屈強な少年。乳児期に何らかの理由で母親に捨てられ山の中で一人育った。その性格・人となりは野生児を超えまさに『獣』、猪突猛進の戦鬪狂。ほかの生き物との力比べを生きがいとしてきたため非常に闘争心が強く、負けず嫌いである。

タイムスリップした三浦に勝負を挑むが勝敗がなかなかつかず、生活を共にすることになり紆余曲折の末『兄弟』『仲間』になる。ある時、三浦と共に鬼殺隊士の村田とサイコロステーキ先輩を襲い（意味深）、鬼殺隊の存在を知り三浦と共に入隊、以後鬼狩りとして活動することになる。

山育ちのため一般常識に欠け字の読み書きもできない。三浦に一応一般常識や字の

読み書きを教わったが、教える側も教える側だったため結局あまり変わっていないかったりする。

使う呼吸は我流で身に着けた獣の呼吸。

・我妻善逸

原作の主要登場人物の一人。タンポポのような金髪の髪型が特徴の少年。女性に騙されて背負わされた借金を肩代わりしてもらう形で育手の老人に拾われる。この時、タイムスリップした木村とも出会い、共に彼のもとに鍛錬に励むことになる。その後、最終選別を経て鬼殺隊の一員として活動する。

性格は臆病者のヘタレで、女好き。人食い鬼にあつたら逃げ出し、誰かに守ってもらおうとする等、鬼狩りの屑の如き言動を見せる。しかし心根は優しく善良なお人好しであり、仲間を守ったり信じようとする人間の鑑である。

また普段はヘタレな言動を見せる彼だが、鬼と対峙し極度の緊張と恐怖の末気絶するように眠った時、その様子は一変。本来の高い戦闘能力を発揮するようになる。

使う呼吸は雷の呼吸だが、彼が習得し使えるのは壱ノ型『霹靂一閃』のみである。

・竈門禰豆子

原作のヒロイン。炭治郎の妹。家族思いの優しい少女であり、竈門家の長女としては母と共に兄弟たちの面倒を見る役割を担っていた。町での評判の美人とのこと。

しかしある日鬼によって家族を殺され、自身も鬼にされてしまう。その後、野獣と炭治郎が秋吉と鱗滝のもとで修行する二年間の間眠りにつき、再び覚醒。野獣と炭治郎と鬼との闘いの日々を共にすることになる。鬼としての人肉を食べようとする食欲や飢餓を抑え込み、逆に鬼としての力を家族や人間を守るためにふるい、鬼としては異端の存在として振舞う。

普段は弱点である日光を逃れるため炭治郎が背負う箱の中に入って眠り、また人を食べない保険として口に竹の口枷を啜えている。

#### 鬼殺隊関係者

##### ・秋吉／AKYS

「迫真空手部の師範であり、野獣たちの師匠。厳しくも生徒思いの人物であり、野獣たちに過酷で熱心な指導を行う一方、普段の様子を気にかけることもある。普段の厳しい態度も野獣たち、教え子を心から思うが故である。ある日狭霧山で稽古を行っていたところ、突然大正時代にタイムスリップ。鬼と遭遇し戦っていたところを鱗滝と出会う。その後紆余曲折の末鬼殺隊に入隊、活動するもしばらくして「教えるほうが性に合っている」として現場を離れ、現在は育手として鱗滝と共に活動している。

彼の使う迫真空手・呼吸は至高の領域といっても差し支えない強さ。その実力は一線

を退いた今でも衰えておらず柱に並ぶものがあり、鬼殺隊及び淫夢ファミリーの最高戦力の一人である。

・鱗滝左近次

天狗面をつけた、育手の一人。富岡義勇の紹介により、秋吉と共に野獣と炭治郎に鍛錬を施す。

鬼

・鬼舞辻無惨

鬼の始祖にして、炭治郎の家族を殺害し禰豆子を鬼にした張本人。原作のラスボス。鬼の中で唯一人間を鬼にする能力を持ち、その能力や恐怖で配下の鬼たちを絶対的な支配下に置く。野獣先輩の眼光や炭治郎の耳飾りに何かトラウマを感じたようだが・・・

・ひで

ひでしね

協力者

・珠世

鬼でありながら人を喰わず、医者として活動する女性。かつて無惨の支配下にあった

が、そこから逃れ現在は仲間と共に無惨の抹殺のために動いている。

・愈史郎

珠世と行動を共にする青年の鬼。かつては人間だったが珠世の手によって鬼になった。珠世に対して崇拜レベルの好意を抱き、彼女と共に過ごす時間を邪魔されることを嫌う。態度は悪いが多分根は人間の鑑。

・葛城蓮／虐待おじさん

みんなご存じ虐待おじさん。剣術の流派の一つ、葛城流の師範であり、令和の時代では道場を経営、道場主・師範代として活動していた。秋吉とは友人関係であり、その縁や活動を通じて野獣先輩をはじめとした迫真空手部への指導を行うなど、野獣たちとも深い関係にある。友人の平野と飲みに行った帰り、大正時代にタイムスリップし、鬼と遭遇・交戦。何とか撃退するも平野が重症を負ったところを珠世に助けられ以来行動を共にする。剣術の腕前は達人レベルであり、彼の扱う葛城流は迫真空手と同様、過酷な鍛練と人間離れた強力な攻撃や技を特徴とする。なお、先祖は高名な武家・剣術の達人だったらしいが資料が乏しく噂程度で本人も周囲もあまり信じていない。

・平野

みんなご存じ平野店長。葛城とは友人関係にあり、飲みに行った帰り、大正時代にタイムスリップし、鬼に襲われる。瀕死の重症を負ったところを珠世に助けられ、鬼とな

る。以降、鬼舞辻の抹殺と人間に戻る方法を探るため、珠世たちと行動を共にする。病院や料亭などの多角経営を通じてスパイ活動や資金調達を行う。使用する血鬼術は「緊縛」。自身の血液で相手を拘束・緊縛し操りもしくは行動を制限したり、結界を張ることが出来る。

## 設定

### ・迫真空手

野獣たちが習う空手の流派。数ある空手の流派の中でも最強の流派であり、文字通り真に迫るものがある。その強さは常人離れた動きや技、力を使い手に発揮させるほど。通常の空手と異なり、その鍛錬は過酷なまでに厳しく、また独自の呼吸や動きを用いるなど独特である。

その強さや過酷さに反して知名度は低く、クラブ・部活動等も下北沢の聖バビロン学院大学にしか存在しない。またその歴史も殆ど不明であり、いつどのようにして発祥し受け継がれてきたのかあまりよく分かっていない。

### ・野獣の呼吸

秋吉が迫真空手の呼吸法や技などを基に編み出し、野獣が受け継いだ呼吸の型。貪欲

に獲物を狙い確実に仕留める野獣を彷彿とさせる、隙の無く容赦ない、確実に狙った敵を仕留めることに主眼をおいた強力な呼吸の型。迫真空手を剣技に応用して生み出された呼吸の型だが秋吉曰く「作るとき、どういいうわけか応用しやすかった」とのこと。

今のところ判明している呼吸の型は次の通り。

一ノ型 淫夢ノ一太刀・・・鯉口を切つて構えた状態から鬼の首めがけて横に一閃する、基本の型。

式ノ型 金睡冷伏（昏睡レ〇プ）・・・上から真下に振り下ろす斬撃。シンプルだが威力は凄まじく、その威力・衝撃は時と場合によつては切つた対象を粉碎することもある、一撃必殺の技。なお、応用として切る形ではなく刺す形で振り下ろすこともある。

参の型 愛栖鄭（アイステイー）・・・水の呼吸の「干天の慈雨」同様、非常に珍しい鬼に情けをかける唯一の技。対象は痛みを感じず眠るように意識を失うという。

肆ノ型 法螺法螺法螺法螺・・・一瞬の短時間の内にひたすらに、無数に斬撃を繰り出し相手に隙を与えない剣技。防御に使われることもある。

#### ・便乗の呼吸

三浦が迫真空手を基に独自に編み出した呼吸の型。ほかの呼吸とは違い、剣技ではなく徒手格闘の型である。便乗するかのように相手の動きや力を捉えて受け流し、時には



利用し、強力な打撃を与える。その威力は鬼の体を吹き飛ばし、その首をへし折りちぎるほど。

今のところ判明している呼吸の型は次の通り。

式ノ型 双打『陽』・・・拳による突きを繰り返す技。便乗するかのように相手の動きに応じて拳を突き出し、時には攻撃を跳ね返す。

参の型 双打『夜』・・・上記の、蹴りバージョン。

肆ノ型 砲茶魔・・・強力な一撃必殺の飛び蹴りで、全身の骨を粉碎するほどの威力。

#### ・痴呆の呼吸

木村が雷の呼吸に迫真空手を応用して編み出した呼吸の型。正確には雷の呼吸の型である霹靂一閃を応用したもので、技は一つしかなく、また今のところ木村はこれしか使えない。

壺ノ型 夜瞳照昏世（やめてくれよ）・・・相手の急所を狙う、槍による一撃必殺の突きの技。その速さは闇を照らす、光の如くである。

## 第1話 野獣先輩、タイムスリップする

「ビィ……ハハ……?」

「木村?三浦先輩?」

「ぬわあああああん寒いよもおおおおおおん」

静かな雪山に男の大きな声が響き渡る。

あたりには枝の一つ一つに雪が積もった木々が立ち並び、地面にはこれでもかと思ふ雪が降り積もっている。雪も深々と静かに降っている。

その中に一人の男——声の主——が立っていた。

だが男の姿は周囲の景色に似つかわしくなく、寒さに体を震わせていた。

それは当然だ。まず服装からしてこの場所に適していない。「ISLANDERS」とプリントされた白いTシャツに黒い半ズボン。生地も薄くとても雪山に適した格好ではない。肌は日焼けし、筋肉質な男の容姿はこんな雪山よりむしろ真夏の都会や、でなきやホモビに出てきそうな感じである。

いったいなぜ男はこんな場所にいるのか。

結論から言えば彼は自分に意思でここにいるのではなく、気付いたらここにいたので

ある。

時間を少し巻き戻すことにしよう。

く81・0分前く

東京下北沢に聖パビロン学院大学という大学がある。

国立の男子大学であるこの学校には迫真空手部というサークルが存在し、日夜非常にハードな活動や練習を繰り返していた。今日も厳しい練習を終えた三人の部員が風呂から上がり、部室でくつろいでいた。

バン！バン！バン！（迫真）

風呂場のドアが勢いよく開けられ続々と三人の部員が出てくる。

「ふおくくあつっー」

「ビール！ビール！あつっー→！」

「あくはやくビール飲もうぜく。おい、冷えてるか？」

「んあ、大丈夫つすよ、バツチエ冷えてますよ」

各々風呂で汗を流し温まった体をタオルで拭き、着替えながら部室へと入っていく。

畳の上に座りながらある者は雑誌を読んだり、ある者はぼーつとしたりと皆思い思いにくつろいでいた。

「三浦さん、夜中腹減らないですか？」

その声を上げたのは迫真空手部員の一人、田所浩二。中堅の部員であり、引き締まった筋肉質の体（ステロイド服用の疑惑あり）にうんこ色に日焼けした肌、時折見せる野獣のような鋭い目つきから野獣、野獣先輩と呼ばれることもある。

「この辺にい、美味いラーメン屋の屋台、来てるらしいっすよ」

「あつ・・・そつかあ・・・」

野獣の言葉に少し間の抜けた言葉で答えたのはこの部の一番の先輩格、年長である三浦智将。野獣同様鍛え上げられた肉体の持ち主で一番の先輩、のはずなのだが普段はこのように間の抜けた天然の態度であるためあまり威厳はない。

「じゃけん夜行きましようね」

「おつそうだな・・・あつ、そうだ（唐突）おい、木村ア！」

「あつ、はい」

唐突に三浦は雑誌を読んでいた部員に声をかける。

木村と呼ばれた男が反応し雑誌で隠れていた端正な顔立ちが露わになる。木村ナオキ。それが男の本名だ。同じく迫真空手部員であり、三人の中では一番若く、二人の後輩である。

「お前ももちろん一緒に来るよな？」

「えつ、何にですか」

「ラーメン屋に決まつてるダルルオ？」

「いつも練習終わったら皆で行つてるじゃねえかゝ頼むよゝ」

「当たり前だよなあ？ラーメン食つてビール飲んで、疲れを癒そうぜ」

「厳しい練習の後の屋台のラーメンを食べビールを飲んで疲れを癒す——それがこの空手部三人組の恒例行事あるいは習慣だった。

「あゝいいいっすねゝゝ後で皆で行つて日頃の疲れを癒しましょう……疲れ、か……」  
いつもの誘いに対し木村は笑顔で答えたが直後、わずかにそれが曇った。

「……ここ最近の練習、言うほど疲れなくなつたし、キツくなくなりましたよね……  
あの日から」

「ですよねえ……」

「ポツチャマ……」

不意に部屋の空気が少し暗くなった。

彼らの習う迫真空手は習得が非常に難しく、その鍛錬は非常に厳しく時として過酷なものであり、熟練の経験者でも「疲れた」「やめたくなる」と漏らすほどだ。だが木村の言うとおり、ここ最近の練習はそれほどきついものではなく、悪く言えばぬるい、張りや緊張のないものになっていた。

きつかけは一か月前の出来事であった。

「・・・秋吉師匠まだ見つからないんですかね・・・」

「失踪してからもう一か月も経ってるんだゾ・・・」

木村は今も行方知れずになってしまっている人物の名を口にしました。

AKYSこと秋吉。迫真空手部の顧問であり、三人の師匠、迫真空手の修得者であり、迫真空手部の稽古が厳しいものである要因の一つであった。空手の元々の難しさに加え、秋吉の指導は非常に厳しいものであった。1919回の筋トレ、グラウンド810週、114514回にも及ぶ正拳突き・・・これだけ聞けばいかに稽古が過酷なものか分かるだろう。ある時は彼に反抗し三人で一斉に不意打ちをかけたこともあったが、秋吉は相当な実力者であり「カスが効かねえんだよ（無敵）」という言葉とともに三人とも一瞬で組み伏せられあるいは投げ飛ばされ一転攻勢されてしまった。

とは言え、秋吉自身の指導そのものは一人一人と向き合う真摯で真剣なもので、稽古は常に真剣さと緊張感があった。だからこそ三人は迫真空手部で長いことやつてこられたのかもしれない。

だが、一か月前。

時折どこかの山や森へ修業しに行くことのある秋吉はいつものように「ちよつと狭霧山に修行しに行くから、お前らしっかり自主練しとけ」とだけ言い残して出かけて。そ

のまま失踪、行方不明になってしまった。

警察に届け出がされ捜索が行われたが、足取りが全くつかめず、証拠もなく、現在に至るまで全くの消息不明、事件なのか事故なのか、無事なのかどうか、生死さえも分からない状況だ。さながら神隠しにあったかのようであった。

それ以来、空手部の稽古はどこかぬるいものになっており、三人は彼の安否を気にかけ無事を祈る日々が続いていた・・・

暗い空気になる部屋。

このままではいけないと思ったのか、野獣が別の話題を振る。

「あつお前さKMRさ、さつきヌツ・・・さつきから雑誌熱心に読んでたけど何読んでたんだ？」

「え？いや、熱心ってわけじゃないですけど・・・よくある都市伝説の話題ですよ」

突然の振りに若干困惑しながらも木村は雑誌を見せる。開かれたページには都市伝説の特集が組まれていた。

「木村がそういうのに興味あるなんて初耳なんだゾ」

「いや、たまたま今回そういう特集が組まれていただけですよ」

「何が書いてあるんだ？」

野獣に問われ木村は記事の内容を簡単に述べる。

「えーつとですね．．．日本各地の『鬼』に関する話題ですね」

「鬼？」

「はい。まあ、よくある都市伝説、伝承っていうやつですよ。各地に伝わる鬼に関する伝承や伝説について書かれていてですね．．．でも、この雑誌によれば鬼はつい最近．．．大正時代まで実在していて、それに関連して鬼殺隊っていう組織がいたらしいです」

「きこつたい？」

「鬼を殺すと書いて鬼殺隊ですよ。文字通り、鬼を殺すための組織です。つい最近までそういうのが実在していたってこの記事には書いてます」

「へえ、鬼っていうとだいたい昔のイメージがあるけど、そんな最近までいたのか．．．初耳なんだゾ」

「何やら感心したようにうなづく三浦。天然の彼らしい反応に、木村と野獣は笑いながら答える。」

「ははは。だからあくまで都市伝説、伝承ですって」

「木村の言うとおりですよ。多分、何かの見間違いとか、疫病や災害を鬼に見立てていたのが、巡り巡ってそういう話になったんでしょ（適当）」

「ポッチャマ．．．」

「空気が少し元に戻る。」



いつもの談笑、いつもの光景が広がる中。

不意に部室の外から大きな音がした。

バアン！

＼ヤベエヨヤベエヨ／

＼オイゴルア！／

続いて響き渡る男たちの怒号。

いったい何があったのかと確認のための行動を起こそうとした瞬間。

バアン！（大破）

「フアツ!?」

「ポツチャマ」

「やめてくれよ……（絶望）」

部室の障子を破って何かが猛スピードで部室に突っ込んできた。

黒塗りの高級車とその少し後ろ、白いワゴン車。

二つの巨大な車両が猛スピードで飛び込んできた。

三人全員が生命の危機を感じたが、いきなりの出来事で、猛スピードで突っ込んできた車両に三人はどうすることもできない。

牽かれる！ぶつかる！

そう覚悟しあるいは悲嘆にくれた瞬間。

三人の視界が白い光に包まれ意識が遠のいていった・・・

そして気付けば。

野獣は一人、見知らぬ雪山の中に佇んでいた。

そして冒頭に至る。

怪我はしておらず、どうやら命は助かったらしい。でもここはいつたいどこなのだろう。

「どい・・・んん・・・？皆は・・・？」

突如として突っ込んできた車にぶつかると思っていたら、突然視界がホワイトアウトし気付いたらこんな雪山に突っ立っていた。それでもかと降り積もった雪、立ち並ぶ木々には枝一つ一つに多く雪が積もり、空から静かに雪が降ってくる。先ほどまで居た見慣れた部室とは違う光景が広がっていた。もちろん野獣には見知らぬ場所だ。既知感もかけらも感じない。周囲を見渡すが、三浦と木村の姿は見当たらない。

いつたいここはどこだ、二人はどうなった？そもそもなぜ自分はこの場所に、こんなところにいる？いつたい何が起こった？

何とか状況把握しようとする野獣だったが先ほどまでと状況が大きく異なり何も分らない。

さらに問題がもう一つ。

「……ぶえつくし！というかそもそも寒スギイ！」

そう、とにかく寒い。あたりは雪が降り積もっているというのに野獣の現在の服装は半そで半ズボン。明らかにこの状況に適した服装ではない。そうこうしている間にも体はどんどん冷えていき体力が消耗していく。

「このままじゃ凍死しちゃう、やばいやばい……」

まずはどうにかして自身の身の安全を確保しなければ。そもそもここはどこなのか。人はいないのか。何処かに誰か人はいないのか……

そう野獣が凍えていると。

「あの……すみません」

背後から、声があった。

振り返ったその先には、一人の少年の姿があった。

黒と緑の市松模様の羽織にマフラー。耳には変わった首飾りがあり、火傷でもしたのか額の左にはあざがあった。背中には大きな籠を背負っている。年は十代前半か。しっかりといていそうな少年は、しかし野獣には一昔前の感覚を感じた。だがとにかく人

には会えた。遭難は避けられそうだ。

不思議そうな様子で少年は続けた。

「こんなところでどうしたんですか？寒くないんですか？」

これが野獣先輩こと田所浩二と竈門炭治郎の出会いだった。

## 第2話 野獣と竈門家

竈門炭治郎は炭売りの少年で、竈門家の長男だ。炭を売って金を稼ぎ、家計を支えている。つい最近には父親が亡くなり、炭治郎は長男として、一家を支える大黒柱として彼の背負う役割と責任はますます大きくなっている。

生活は決して楽ではない。むしろ貧しい。それでも彼は自分は幸せだと断言することができた。優しい母親に元気で可愛い妹や弟達。大勢の家族に囲まれ、支え合う。家族の絆と愛にあふれた、貧しくとも幸せな家族の姿、ささやかで幸せな日常が確かにそこにはあった。

そんな炭治郎がいつものように街で炭を売り、帰りの山道を歩いていると一人の妙な男の姿を見た。

あたりは雪が降り積もっているというのに、その男は半そで半ズボンという明らかにこの季節、この情景に似つかわしくない格好をしていた。一体こんなところで一人何をしているのだろうか。寒くないのだろうか。というか明らかに体を震わせ寒がっている。何かを叫んだりして途方に暮れた様子だった。

もとより、心根が優しくお人好しな性格の炭治郎である。放ってはおけなかった。

男に近づき後ろから声をかける。

「あの……すみません。こんなところでどうしたんですか？寒くないんですか？」  
男が振り返った。近づいたことで改めて男の詳細な容姿が明らかになる。

黒い半ズボンに白いシャツ。シャツには見慣れない異国の言葉が記されている。

身長は炭治郎よりも高く、5尺6寸（約170センチ）ぐらいはあるだろうか。服が薄く腕や足が露出していることもあり、その肉体、筋肉が常人に比べしつかりと鍛え上げられたものであることが容易に分かった。肌の方も茶色にしつかりと焼けている。顔の方は美男子というわけではないが、特別不細工というわけでもなく見る人によつてはむしろ爽やかな好青年といった感じがした。

こんなところでおかしな格好をしている人だ、何をしているんだろうか、とは思ったが少なくとも悪い人間ではないと炭治郎は判断した。……ほんのわずかに、少しだけ、臭いにおいがしたような気がしたが。

男は田所浩二と名乗った。野獣先輩とも呼ばれてるからぜひそう呼んでくれ、とも言われたが初対面の炭治郎には彼に対して野獣という感じがあまりしなかつたし、初対面の人をそう呼ぶのもためらわれたので結局炭治郎は彼を浩二さんと呼ぶことにした。

そのまま野獣が何者なのか、雪山にそんな薄着で一体何をしていたのか、どうしてこ

んなところにいるのか等聞いたのだが……すぐに会話が噛み合わない、何かがおかしいということに二人ともが気が付いた。炭治郎が住んでいるところは東京府の奥多摩郡というところなのだが、野獸は自分はさつきまで大学の部室にいた、東京『都』の下北沢というところにいたのに気づいたらこんな雪山にいた、と言った。この時点でいろいろと突っ込みたいことがあった。さつきまで大学、下北沢にいたとか、気づいたらこんなところにいた、とか。それに東京『都』と言ったのも気になった。だから東京『都』じゃなくて東京『府』ですよと言うと野獸はいや、東京『都』だと言った。それから今がいつなのかという時間の話題にもなったが炭治郎が今は大正2年の12月だと言うと、今度は野獸は嘘つけ今は令和だ20XX年だぞ、と言った。炭治郎の認識する年代・元号と野獸の言うそれが違う。その後もいろいろと会話を繰り返したが、何を話しても場所、年代、その他諸々が食い違っていた。食い違う会話を繰り返し、しばらく二人が沈黙していると、やがて野獸はゆっくりと口を開いた。もしかすると自分は昔の時代にやってきたのかもしれないと（彼は「たいむすりつぶ」と表現していた）。自分は未来の人間だ、未来からやってきたのかもしれない、と言った。

にわかには信じられない話。

だが。炭治郎には彼が嘘をついているようにも思えなかつた。

話はそれるが一見普通の少年に見える竈門炭治郎には一つ特技、あるいは特徴があ

る。それは「鼻が利く」ということだ。炭治郎の嗅覚は鋭かった。それも異常なほど、人はもちろん犬ささえも凌ぐほどに。人の感情、言葉の虚実までもが分かるほどに。信じられないかもしれないが、事実そうだった。

そして野獣や彼の言葉からは嘘のにおいは全くしなかった。逆に言えば彼の言葉は事実だということになる。

結局炭治郎は野獣の言葉を信じ。そのまま放っておくのもあれなので、彼を家まで連れていくことにした。

「あ、お兄ちゃんおかえり！」

「おかえりお兄ちゃん・・・とその人は誰？」

野獣が炭治郎と名乗った少年とと共にしばらく歩いてみると一軒の古い家屋が見えてきた。そのそばには二人の小さな男女がいた。おそらく炭治郎の妹と弟だろう。この雪の降る真冬に薄着姿の見慣れない男に首をかしげている。

「ああ、この人は田所浩二さんっていうんだ。山の中で迷っていたみたいで放っておくわけにもいかないから連れてきたんだ」



「はじめまして、オツスお願ひしまーす。田所つて名前だけどもみんなからは野獸つて呼ばれているからそう呼んでくれてもかまわないぜ。ていうかそう呼んでくれよなく頼むよ〜」

「・・・こんにちわ!」

少し言動がおかしいが少なくとも悪い人ではないと子供ながらに判断した二人は野獸に挨拶する。

「おかえりなさい、炭治郎。その人は?」

野獸や家族の声を聴いて家の中から一人の女性が出てきた。もんぺ姿に白い頭巾をした一昔前の古い映像に出てきそうな、しかし一目で母親と分かる姿だ。それにしても若く美人であつた。

野獸は彼女に挨拶する。

「あつ、俺田所浩二つていいいます。オツスお願ひしまーす」

「迷つていたみたいだからとりあえず連れてきたんだ」

「はあ・・・私は炭治郎の母の寵門葵枝と申します。この雪の中寒いでしよう、とりあえず上がってください」

「いいつすかあ?ありがとナス!」

葵枝が角に向かって口を開く。

「竹雄、お客様よ。ご挨拶なさい」

角からひよっこりと現れたのはまき割り用らしき斧を持った少年だった。顔が炭治郎と似ている、彼の弟だろう。

「えつと・・・？あ、初めまして、竈門竹雄です」

「俺は田所。田所浩二。ちよつと道に迷っちゃてさあ、この家にならせてもらうことになったんだ。そういうえばこの二人の名前はなんていうんだ？」

田所が先ほどの小さい子供二人に対し首をかしげる。炭治郎が答える。

「あつ、こつちが花子で、こつちが茂っていうんです。みんな俺の弟と妹ですよ」

「よろしくね、田所おじさん！」

「ええ・・・(困惑)。俺おじさんに見えるのかよ・・・一応大学生なんだけどな・・・」  
無邪気に花子と茂がお辞儀をして野獣に近寄る。対する田所は子供におじさんと呼ばれ少し落ち込んだ。

「彌豆子と六太は？」

「彌豆子なら六太を寝かせに・・・あ、あそこにいるわよ」

葵枝の指差した先には小さい男の子を背負った桃色の着物姿の少女がいた。白い肌を整った顔立ち、結構な美少女である。

「おーい彌豆子！」

「あ、お兄ちゃんお帰り！．．．えっと、その人は」

「ええとこの人は」

「おつす、田所浩二つて言います。学生です。．．．実はいろいろあつて道に迷つちやてさあ、そしたらこの子が家に連れてきてくれたんだ。ちよつとお邪魔させていただきまず、オツスお願いしまーす」

「はあ．．．こんにちは」

禰豆子は多少困惑しながらも挨拶を返した。

炭治郎の妹、竈門家の長女とのことだった。野獣がきれいな妹だなあ、というとき炭治郎が自慢したように禰豆子は村で一番の美人なんだと言い、当の禰豆子は恥ずかしそうにしていた。

一通り自己紹介も終え、野獣は炭治郎や葵枝に勧められるまま家の中へと入つていった。

「F〇〇→うまいゾ〜これ」

野獣は竈門家と共に囲炉裏を囲みながら夕食にありついていていた。熱い米を一気にかきこみ熱い味噌汁で流し込む。ご飯に味噌汁、少しのおかずといった質素な内容であつ

たが、冷えた体に温かい食事が身に沁み、この時の野獣には非常に新鮮で、非常に美味しいものであった。

「家にながらせてくれた上に、夕食までご馳走してもらえるなんて、本当に……ありがとナス！」

「いいんですよ浩二さん、困ったときはお互い様ですし、それにあのまま山の中にいたら間違いなく凍死していたか碌な目にあつていませんでしたから」

「命の恩人だつてはつきり分かんだね。本当に……（感謝しか）ないです。涙がで、出ますよ」

「よほどお腹がすいていらしたんですね……のどに詰まらせると大変ですからゆっくり食べてください、まだ少しありますから」

竈門家と共に夕食を共にする一方で、野獣は未来から来たことなど己の事情を話していた。

「それじゃあ、田所さんは未来からこの時代に迷い込んできたと？それであんな薄いい好をしていらしたんですね……」

「信じられないかもしれないけどそうとしか考えられないんだよな……むしろ俺の方でも今が大正時代だなんて信じられないんだよな……とりあえず信じてくれよな〜頼むよ〜」

「俺は嘘だと思いませんよ。浩二さんからは嘘をついてる匂いがしませんし」

野獣は自分を取り巻く今の状況や、自分の話を信じてもらえるか不安だったが、炭治郎は野獣をそれほど疑うこともなくむしろ信用しているようだった。というのも前述したように炭治郎は生まれつき人の感情や虚実まで分かるほどに嗅覚が鋭く、野獣の言動から嘘の匂いがしなかったからだ。

「炭治郎は鼻が鋭いんだな・・・嗅覚で嘘まで分かるなんてこれももう分かんねえな」  
「生まれつきなんです」

「でも、俺はまだそんなには信じられないなあ、未来から来たなんて」  
竹雄はまだ野獣の未来から来たという言葉が信じられないようだった。

「まあ、匂いだけで信じてくれっていうのも無理な話だよな・・・待てよ確か・・・」  
不意に野獣は何かを思い出したようにポケットに手を入れた。

「おっ、あったあった。なんで持ってたことに気づかなかったんだろ」  
野獣からポケットから取り出したのは白い板状の何かだった。

「？それは何ですか」

「まあ、見とけよ見とけよこれ見れば俺が未来から来たことが信用できるはずだぜ」

野獣がその白い板に何か操作をしたと思ったたら突然片面が光りだした。それから野

獣がさらに操作を加えて音楽を鳴らしたり、またいったいどういう原理なのか布のように柔らかくなり、折り畳んだり丸めたりして見せた。あまりにも不思議な道具に炭治郎たちが目を丸くする。

「すごい……. どういう仕組みなんだ……?」

「スマホって言うてさ。こんな風に音楽鳴らしたり、調べ物をしたりいろんなことに使えるんだよな。こんな風にハンカチみたいに柔らかくなるから俺は『やわらかスマホ』って呼んでるんだけどな。この時代なこんなないだろ? とりあえずこれを証拠として信じてくれよな。頼むよ。』」

「すごい! おじさん私にも触らせて!」

「よく分からないけど……. 未来の技術つてすごいんだな。こんな不思議なもの見せられたらますます信じるしかないな…….」

「あつ、そうだ(唐突)、このやわらかスマホで写真を撮ることもできるんだよな。折角だからこれでみんなの写真撮りませんか? 撮りましょうよ(提案)」

「えっ写真も撮れるんですか!?!」

炭治郎が思わず声を上げる。この時代、カメラは一般人にはまだまだ高価で貴重なもの。一枚撮るのにも手間暇がかかる。それを、目の前の小さな白い柔らかい布は音楽を聴いたり調べ物ができるだけでなく簡単に写真や映像をとることができるといふ。信

じられない話だった。

「撮れます撮れます。助けてくれたお礼というか記念というか……ま、一期一会つて言うしね？一緒に家族の写真を撮りたい……撮りたくない？」

「撮りましょう！」

「こんな機会滅多にありませんからね。お願いします」

「よし！じゃあ（カメラに皆の姿を）ぶち込んでやるぜ！みんな俺の近くに集まって、この丸い部分を見とけよ見とけよ」

野獣の周りに竈門一家が集まり、野獣は腕を伸ばして何とかカメラに全員の姿を収める。いわゆる自撮りの形だ。パシヤツ！という聞き慣れない音が部屋に響く。

「よし（適当）。撮れた」

「え？もう撮れたんですか？見せてください」

炭治郎たちがスマホの画面を覗く。そこには竈門一家と野獣の顔が一人残らず映っていた。しかも彼らの知る写真とは違い、カラーで、その上非常に綺麗なもので一同は驚いたり興奮したりした。

「すごい……皆中にいるみたいだ……」

「あはは、おじさん変な顔ー！」

「だから俺はおじさんじゃないんですが、それは……」

初めて見る珍しいものに竈門一家や野獣は興奮と団欒に包まれる。

・・・この時、炭治郎をはじめ、野獣も皆も知らなかった。知る由もなかった。

・・・このスマホの写真が、炭治郎や皆にとって最初で・・・そして最後の家族写真になることになるとは。

「そういえば田所さんはこれからどうするつもりですか？」

夕食と話を一通り終えて後片付けをしていると葵枝がそう言った。

「んん特には考えてないですけど・・・」

野獣はあごに手を当てながら考える。

とりあえず家に上がらせてもらい暖をとり食事まで分けてもらったが、問題はこれからどうするかだった。

まだ野獣には大きな実感がなく完全には信じられなかったが今は大正時代であり野獣の暮らす令和の時代ではない。仮に実は令和の時代で、下北沢とは別の場所だったとしても、周りは凍える雪山。下手に行動はできない。

どうにかして元の時代、元の場所に帰りたいがどうすればいいのか分からない。何か



行動をしなければいけないが、どうすればいいか分からない。それが野獣の現状だった。

「みんな心配してるだろうし、正直、今すぐにでも帰りたんですけど……気づいたらここにいたし、そもそも元の時代に帰れる方法も分からないしな……どうすればいいかなー俺もなー」

不意に野獣は空手部の仲間たちのことを思い出した。先ほどまでの切羽詰まった状況や竈門家との話で思い浮かばなかったが、三浦や木村の顔が野獣の脳裏に浮かぶ。思い返せば野獣がタイムスリップする直前、黒塗りの高級車が部屋に突っ込んできてそこで白い光に包まれ、気づいたら自分一人になっていたのだ。三浦や木村はどうなったのだろうか。考えたくないが事故に巻き込まれてしまったのだろうか。それともまさか野獣と同じようにどこかにタイムスリップしたのだろうか。

そもそも帰れる方法はあるのだろうか？もし帰れないのだとすればこれから自分はこの時代でどうやって生きていけばいいのだろうか？いつまでもここにいさせてもらえないという保証はないし、そこまで野獣は凶々しくくない。

「やべえよ……やべえよ……」

状況を改めて確認し一気に不安が野獣を襲った。

そんな野獣の様子を察したのか葵枝がさらに口を開く。

「ところで田所さんはこれからどうするとか、あてはありますか?」

「(そういつたものは) ないです。帰ろうにも帰り方分からねえし、そもそも帰れるのかすらも……」

「……でしたらしばらくここにいたらどうですか? 行く当てもなさそうですし家事とか仕事を手伝ってくれるなら、歓迎しますよ」

「……いいつすかあ?」

提案に対し目を丸くする野獣。

対して炭治郎たちは快い反応をする。

「かまいませんよ。困ったときにはお互い様ですし。帰る方法も当てもないのに、この雪の中に放っておくわけにもいかないでしょう?」

「来客なんて久しぶりですし、この子たちも遊び相手が増えて嬉しいと思います。ね?」

「遊んでくれるの? やったー!」

「やったぜ。人出が増えてまき割りが楽になる」

「きつと帰る方法が見つかりますよ。それまでゆっくりしていつてください」

もとより炭治郎をはじめ、善良でお人好しな竈門一家である。彼ら彼女らの心委、温かい態度と迎え入れに、野獣は改めて彼らの懐の深さ、親切さを感じ、心に沁み、涙を

流した。

「・・・持つべきものは親切な人、竈門さん一家は恩人だつてはつきり分かんだね。なんて言えばいいか・・・これもう分んねえな。とにかく感謝で・・・涙がで、出ますよ。本当に・・・ありがとナス！それじゃあ改めて、しばらくお邪魔させてもらいます、オツスお願いしまーす！」

こうして野獣は竈門家にしばらくの間居候することになった。

それから野獣は竈門家の家事や仕事の手伝いをしたり、子供たちの遊び相手をしたりして過ごした。ガスも水道もない生活を送り、またある時は炭を売りに行く炭治郎についていき町まで行ってその古い街並みに、野獣は改めて今が令和ではなく大正なのだ実感したりもした。野獣にとつては、都会から遠く離れた田舎でもガスや水道はおろかWi-Fiも整備されているのが常識。それとは大きくかけ離れた、現代生活に慣れた野獣には少々不便な大正時代の生活であつたが、少しずつ慣れていき、また竈門家の温かさに助けられ感謝するのであつた。

そんな日々が続き、野獣が居候を始めてから一週間ほど経過したある日。今日もまた

炭治郎は炭が大量に入った籠を背負い町へ売りに行くこうとしていた。

「雪が降って危ないから行かなくてもいいんだよ?」

「でも俺、正月になったら家族みんなに腹一杯食べさせてやりたいし。少しでも炭を売りに行ってくるよ」

「・・・ありがとう」

心配そうにする母親に炭治郎は言う。本当に家族思いな子だ。そこへ野獣がやってくる。

「なんだ炭治郎、今日も炭売りに行くのか? だったら俺も手伝うぜ」

「浩二さん・・・いいんですか?」

「二人で行くのは危ないし、重いだろ? 俺水泳部と空手部掛け持ちしてるから体力には自信があるんだよな。この家にいさせてもらってるんだし、これくらいの手伝いをするのは当然だってそれ一番言われてるから」

「ありがとうごさいます」

そう言つて炭治郎と共に身支度を始める野獣に、炭治郎の弟や妹たちが集まる。

「兄ちゃん、今日も町へ行くの?」

「私も連れてつてよー」

「駄目よ、炭治郎や田所さんみたいに早く歩けないでしょう? それに今日は荷車を引

いていかなから途中で載せてもらって休むことができないのよ？」

「ええー？」

せがみ駄々をこねる子供たちとそれをなだめる葬枝。平凡だがほほえましい光景だ。

それから身支度を終えると、弟の竹雄にできる範囲で木を切るように頼み、野獣と炭治郎の二人は寵門一家に見送られながら家を後にした。

「ついていくって言ったけどさあ……やっぱり寒スギイ！」

二人で炭の入った薪を背負い、雪山の中を歩く野獣と炭治郎。しかし慣れない野獣は改めて寒さに身を震わせる。

「……思ったんだけどさ、炭治郎ってさ、いつもこうして一人で炭を売りに行ってるのか？」

「うん。父さんがつい最近亡くなつて。さつきも言ったけど、そろそろ正月だからみんなにたくさん食べさせたいし、それに少しでも家族に楽をさせてあげたいし。俺は長男だから頑張らないと」

「そうなのか……でもやっぱり大変だろ？」

「慣れてるから大丈夫ですよ。それに……」

「それに？」

「浩二さんがいてくれて助かっています。こうして家のことを手伝ってくれているし。禰豆子も言っていました、最近父さんが死んじやって寂しくなつてたから浩二さんが来てくれて賑やかになった、六太が懐いているって」

そう言つて炭治郎は笑つた。

「……生活は楽じゃないけど。俺は幸せです。こうして家族に囲まれて……」

「……人間の鑑だなあお前」

家族思いな炭治郎に野獣は今時のことは違ふと感心するのであつた。

町に着くと、二人はさつそく炭を売り始めた。

「おーい、炭を売ってくれ」

「あたしにも一つ」

「あつ炭治郎！皿を割つた犯人にされてるんだよ俺ー！助けてくれよ！！この皿を嗅いでくれー！」

「おい炭治郎！その兄ちゃん！すまねえが荷物運ぶの手伝つてくれ！」

普段から炭治郎と何度も接しその人柄を知っているからだろう。町の住人が寄つて

きては炭を買っていく。

その一方で、何かの手伝い頼む人も続々現れる。逆に言えばそれだけ炭治郎が慕われ、頼られているということなのかもしれない。

炭売り以外にもいろいろんな仕事や手伝いをしているうちに気づけば夕方になっていった。今からければ家に着くのは夜遅くなるだろう。

「遅くなっちゃいましたね・・・」

「心配しなうちに早く帰らないと・・・やばいやばい」

二人がそう言つて家路を急ごうとすると。

「おい炭治郎！そこの兄ちゃん！」

不意に男の声がした。

振り返ると一人の老人が家屋の窓から顔を出して叫んでいる。

「三郎爺さん」

どうやら炭治郎の知り合いらしい。

「おまえら今から山に帰るつもりか!?やめとけ！」

三郎の溪谷に二人は首を傾げた。

「俺は鼻が利くから大丈夫だよ」

「俺も空手やつてるし。大丈夫だつて爺さん、安心しろよ、へーキへーキ」

「はあ．．．うちに泊めてやるから、今すぐ来い、戻れ．．．鬼が出るぞ」

鬼が出る。そういう三郎の声に冗談やふざけの色は全く無く。むしろ本気で言っていた。

結局三郎の気迫に押され二人は彼の家に一晚止まることになった。

「昔からな、人食い鬼は日が暮れると動き出す。とりあえず飯食ってさっさと寝ろ。明日早起きして帰ればいい」

「はあ．．．」

「鬼は．．．家の中には入ってこないのか？」

「いや．．．入ってくる．．．だが」

三郎は煙管をふかしながら言う。

「鬼狩り様が鬼を切ってくれるんだよ。昔からな．．．」

夕食を終え布団の中に入り野獣は炭治郎に話しかける

「なあ、鬼っているのかな？」

「．．．さあ。でも死んだばあちゃんと同じようなこと言ってたな．．．でも、まあ．．．鬼なんかいないよ大丈夫さ．．．」

鬼。鬼狩り様。三郎の話を聞きながら野獣はふと、この世界に来る直前、木村の話を思い出していた。大正時代まで鬼が実在したこと、そして鬼殺隊と呼ばれる組織がいた



こと。しかしそれらはあくまで眉唾物の都市伝説。しかも今は大正時代だ。そういう伝承が信じられるのもおかしい話ではない。まあ、確かに夜道は危ないし明日早起して早く帰ればいいかと、野獣は布団の中でうとうとしながらそう思い、やがて静かに眠っていった……

一夜明け早起した野獣と炭治郎は三郎に礼を言う素早く身支度し家路を急いだ。

「なるべく早く帰るって言ったのに、みんな心配してるだろうな」

「早く帰ろうぜ」

みんな今頃どうしてるだろう。遅くなってやっぱり心配しているだろうな……早くみんなを囲炉裏を囲んで暖を取りたい……そんなことを考えながら二人は歩いていく。彼らの脳裏にあるのはいつも通りの家族の姿、平穏な日常。普通の、幸せな日々だ。

……そして。幸せが壊れるときは。いつも、血の匂いがする。

あと少しで家に着くというところで不意に炭治郎が足を止めた。鼻を引くつかせている。

「?..どうしたんだ?」

「……血の匂い」

「?」

「血の匂いがする．．．なんでだ．．．?」

そう言う炭治郎の眼には明らかに不安の色が浮かんでいた。野獣も不意に胸騒ぎがしてきた。

自然と歩みが早くなる。自然と、心臓の鼓動が早くなる。血の匂いは濃くなり。不安は一步步たびに倍増していく。近づいてはだめだ、見ては駄目だと思う一方で、急がなくては、と脳が正反対のことを思う。

家に着いた時。そこにあつたのは。

「．．．フアツ!」

「なんだよ．．．これ．．．?」

血が染み込み赤く染まった雪、血で赤一色に染まった壁や床。

そして、その中で血にまみれ何も言わず、ピクリとも動かない家族の姿だった。

．．．どうしてこうなった? いったい何が起こった? 誰がやった?

惨劇の現場からしばらくして。野獸と炭治郎は禰豆子を抱えながら雪山の中を必死に歩き、走っていた。

帰った途端広がつっていた地獄絵図。二人ともしばらく体が動かなかつたが、すぐに炭治郎が叫びながら駆け出していた。

倒れ、転がっている家族一人一人に声をかけるが動くものは一人としていない。生きているものの匂いや気配がしない。

葵枝、竹雄、禰豆子、茂に花子、六太——炭治郎の家族が、野獸の恩人が皆寝間着姿のまま血にまみれ物言わぬ物体と化して転がっていた。

熊や獸に喰われたような跡は見当たらず、みな体を何かで切り裂かれたような跡があつた。獸の匂いはせず、その代わり何か得体のしれないおぞましい何かの匂いがした。誰かに、あるいはその何かに家族が殺された。

家族が皆殺しにされた。

みんな、みんな死んでしまった。

そのあまりにも悲惨な事実の前に炭治郎は狼狽し、野獸はただ立ち尽くすほかなかつた。が、不意に炭治郎が妹の禰豆子一人がまだ微かに体にぬくもりがあり、息があることに気付いた。

そこから先の二人の行動は早かつた。

そこら辺にあった布で血を拭き、包帯代わりにして止血し、交代で背負いながら医者  
のいる町まで駆け出した。

二人とも体力に自信はある。だが、町までは非常に遠く、山道は険しく、しかも季節  
は雪の降る真冬。あつという間に息切れし、体の関節や筋肉が悲鳴を上げ、冷たい空気  
が灰を冷やす。

だが二人とも歩みを止めない。止めるわけにはいかない。

医者に見せればまだ助かるかもしれないのだ。

それにしても——どうしてこうなった？なぜあんなことになってしまった？いった  
い誰がやった？

「禰豆子、死ぬな、死ぬなよ」

「絶対助けてやるからな」

「絶対に兄ちゃんが助けてやるからな！」

野獣に背負われている禰豆子に、炭治郎が泣きながら声をかける。

その思いは野獣も同じだった。

険しい道のりに加え、凍てついた空気で肺が痛くなり、さらに息が、体が苦しくなる。

だがここで歩みを止めるわけにはいかない。絶対に、助けてやる——二人がさらに踏  
ん張り歩を進め速めようとしたその時だった。

「ウウウ・・・」

「禰豆子?」

最初に異変に気付いたのは炭治郎だった。

「浩二さん、禰豆子が・・・」

「?」

「ウウウウ・・・!」

野獣も背中に背負っている禰豆子の様子が何やらおかしいと気づく。

次の瞬間。

「グオオオオオッ! ガアアアアッ!」

「フアッ!」

「禰豆子!? 浩二さん!」

人ならざる者の咆哮が聞こえたと思った瞬間。バランスを崩し、野獣は禰豆子を背負ったまま雪に滑り、山中を転がり落ちる。炭治郎も二人をつかもうとして一緒に滑り、転がり落ちる。

「ウーン・・・」

「浩二さん!? 大丈夫ですか!? 禰豆子!」

雪で滑った二人はしかし同じく雪がクツシヨンになったおかげで何事もなかった。

が、強い衝撃を受けたからか、野獣はうめき声をあげ、動けずにいる。そして彌豆子が見当たらない。炭治郎があたりを見渡すとすぐそばに、先ほどまで血にまみれ息も絶え絶えだったはずの彌豆子が立っていた。

「彌豆子!? 大丈夫か!? 無理して歩かなくていい、俺が町まで、医者の方まで運ぶから……!?!」

彌豆子のもとへ駆け寄ろうとして。炭治郎は異変に気付いた。

「ふうつ、ウウウ……!」

額にいくつも浮き出た血管、荒い呼吸、きつく食いしばられた歯。恐ろしく厳しい目つき。炭治郎を捉えるその瞳はまるで獣のように血走り、光り、理性がなく、そして瞳孔が縦に裂けていた。

いつもの彌豆子じゃない。何かが違う、人とは違う——

そう炭治郎が本能的に悟った瞬間。

「——!」

「彌豆子!?!」

獣のような慟哭を上げながら彌豆子が炭治郎に襲い掛かった。

とつさに炭治郎は斧を両手で構える。彌豆子の鋭い歯が斧の柄に噛み付き、そのまま彌豆子が炭治郎に覆いかぶさるように倒れる。

すさまじい力だ。身動きが取れない。

鬼だ。今の禰豆子は鬼だ。

三郎爺さんの話を思い出し、炭治郎は察した。

今の禰豆子は鬼になっている。

信じられない。禰豆子は人間だ。生まれた時から、今までずっと、人間だ。鬼じゃない。鬼のわけがない。でも匂いがいつもの禰豆子じゃない。今の禰豆子は鬼になっている。

だが――

暴れる禰豆子を抑えながら炭治郎は家の様子を思い出した。

あの時禰豆子は六太をかばうように倒れていた。口や手についておらず、あの惨劇は禰豆子によるものではない。それに、もう一つの匂いが――

「ウウウウウ！ガアアア！」

「!？」

そうしている間にも炭治郎を押さええつける禰豆子の力は強くなっている。それどころか、信じられないことに彼女の体が大きくなっている。炭治郎を押さええつける力が強くなり、彼の肌や肉が裂け血が滲み出る。斧の柄を噛む禰豆子の口から涎が垂れる。このままでは喰われる――

そう思う一方で、炭治郎はそれでも禰豆子のや家族のことを思っていた。

俺達が布団の中でぬくぬくとねっむっている間、みんなはあんな惨いことになってしまった。痛かったろう、寒かったろう。でも禰豆子はまだ生きている。人ならざるものになってしまったが、まだ誰も殺していない。せめて禰豆子だけでもなんとかしたい――

気付けば炭治郎は叫んでいた。

「頑張れ禰豆子！こらえろ、頑張ってくれ！鬼になんかなるな、しっかりするんだ！頑張れ！頑張れ!!」

「ウウウウ……!」

必死に呼びかける炭治郎。まだ理性が残っているのか。

気付けば禰豆子は両目から大粒の涙をぼろぼろとこぼしていた。

炭治郎も思わず涙をこぼす。

まだ理性が残っている。

頼む禰豆子、そのまま――

「!？」

そう思った炭治郎の視界の片隅に。

二人の頭上から人の形をした何かが見え、恐ろしい速さで迫ってくるのが見えた。



雪が降り注ぐ中、それはそのまますさまじい速度で何かを二人に振り下ろそうとして。

「炭治郎!?!」

野獣の声が響いたと思った次の瞬間、その何かは横から飛んできた別の何かにタックルされ、炭治郎は彌豆子を抱きしめたまま横に転がりすんでのところで回避した。

そのまま彌豆子をかばうようにして炭治郎が見上げた先にはこちらに背を向ける野獣と——見慣れぬ青年の姿があつた。

長髪に整った端正な顔立ち。しかしこちらを見つめるその瞳に感情はなく冷たい。黒い服の上から左右で模様が変わった羽織を着ている。右手には刀。よく見ると刃に「悪鬼滅殺」と刻印されている。

「いったいこの青年は誰だ？」

それは野獣も同じ思ひだったようだ。野獣が思わず叫ぶ。

「なんだこのオッサン!?!」

「・・・俺は・・・オッサンじゃない」

青年はそつけなく答える。

「それよりも・・・なぜ庇う?」

そのまま刀と瞳を彌豆子の方向に向け、青年は冷たくそう言った。そしてそ

の目は彌豆子を人として捉えてはいなかった――

### 第3話 野獸先輩、鬼狩りと出会う

鬼。

世間一般には伝説・伝承上の存在とされているが、奴らは実在する。

奴らが一体何時の時代から、どのように生まれ存在してきたのかはつきりとは分かっていない。

だが、鬼は人間にとって非常に恐るべき存在であることは事実であった。

鬼の主食は人間。人間を襲い、人間を殺し、人間を喰らう。時には残酷な殺され方で残忍に喰われることもある。

そして身体能力が人間に比べ遥かに高く、どんな傷もたちどころに回復する。身体を切り落とされても回復し、新たに手足を生やす。中には体の形を変えたり、異能の力を持つ鬼もいる。

鬼を殺すには、弱点である太陽の光を当てるか、日輪刀と呼ばれる特別な刀で頸を切り落とすしかない。

まさに脅威、恐るべき存在。

だが人々を守るため、奴らを滅ぼすため、人知れず鬼に立ち向かう者も確かに存在す

る。

鬼殺隊。

その名の通り、鬼を殺すための組織。そして、唯一鬼と戦うことのできる組織。その構成人数はおよそ数百人、政府からは公式には認められていない組織である。

誰が彼らの指揮を執っているのか等、その内実は謎に包まれている。

だが彼らは古より確かに存在し、今日も鬼と死闘を繰り広げている。

彼らはいくまで人間であり、生身の体で鬼に立ち向かう。人間であるから当然、傷の治りは遅いし、失った手足は戻らない。

それでも彼らは人知れず、今日も鬼に立ち向かう。人々を守るために。

青年・富岡義勇はその鬼殺隊に所属する人間だ。

彼は今、鬼の出現の報告を受け雪山の中を駆けていた。鬼殺隊の隊服に左右で模様の違う変わった羽織に身を包み、手には鬼を殺すことのできる唯一の武器、日輪刀を携えている。

鬼と対等に戦うために長年の特別な鍛錬を重ねた強靱な肉体は、常人とはかけ離れた

身体能力を發揮し、人間とは思えぬ凄まじい速度で雪山の中を駆け抜けていく。

もはやそれは鬼と大差ない速さだ。雪上には人間をやめたと思えない間隔で足跡が残されていく。

(間に合ってくればいいが……しかし、もうおそろく——)

木々の間を駆け抜ける中、富岡は人々の安否を気遣う一方で、諦めの心境も持っていた。

やがて木々の間に家屋が見えてくる。傍らには製炭所らしき小屋が。

家屋に近づき、その中に広がっている惨状を見て富岡は顔をしかめる。

壁や床に散らばる大量の血痕。赤く染まった雪。その中に転がる物言わぬ死体。

間に合わなかった。

瞬間、後悔に似た懺悔の感情が富岡の胸の内に浮かび上がる。俺がもう少し早くここに来ていれば。

「……すまない」

だが、後悔しても遅い。過ぎたときは戻らないし、死者が生き返ることはない。今は鬼殺隊の人間としてやるべきことをするしかない。

心の中で犠牲者達に黙祷を捧げると、富岡はあたりを散策する。すぐに付近に足跡を見つけた。

（足跡は一つ……いや二つ。まだ新しい。鬼か？それとも生き残った人間が逃げているのか？）

手がかりを見つけた義勇はすぐさま足跡を辿るように雪山の中を駆けていく。進んでいくうちに。やがて鬼の気配を感じ、そして強くなつていく。

そして。

「ウガアアアッ！」

「禰豆子！しっかりするんだ！」

「……！」

突如として聞こえた人ならざる者の叫び声と怒号。間違いない、鬼だ。そして恐らく生存者がいる。

富岡はすぐに抜刀できるような刀の柄に手をかけ臨戦態勢をとり、そのまま声のしたほうへ駆け出す。

その光景はすぐに眼前に現れた。

鬼と思しき少女が叫び声をあげながら覆いかぶさるように少年に襲い掛かっている。少年は斧の柄を少女に噛ませ必死に抵抗している。少し離れたところには今の季節にはそぐわないぐらい日焼けした青年が大の字になって倒れている。鬼のようにも死んでいるようにも見えず、おそらく何かしらの理由で気絶しているのだろう。

富岡は人々を守り鬼を殺す鬼殺の剣士である。そして、鬼と化した元人間が罪のない人々を貪り食う醜い光景を何度も目にしてきた。

やるべきことは一つ。

富岡は鬼の少女に狙いを定め抜刀。飛び上がり、頭上から彼女めがけてそのまま袈裟切りにするべく刀を振り下ろそうとした。振り下ろそうとしたが――

「炭治郎!」

横から気配を感じた富岡が僅かに視線を逸らすとそこには先ほどまで気絶していたはずの青年が富岡に向かって突進していた。今になって気が付いたというのか。

思わず不覚を取られた富岡はそのまま青年にタツクルされる。その隙に覆いかぶさられていた少年は鬼と身代わりになるように身を取り換え、転がりまわる。振り下ろされた刀身がブチリと鬼の少女の長髪を切る音がした。

タツクルされつつも富岡はとっさにその衝撃を受け流し、青年を蹴飛ばして雪上に立つ。

眼前にはかばうように鬼の身を抱える少年と、盾になるように二人の前に立つ青年の姿。

「なんだこのオッサン!?!」

青年が思わず叫ぶ。

「……俺は、オッサンじゃない」

富岡はまだ19歳の青年である。根拠もなくオッサン扱いされたことに内心軽く傷付きながらも、刀身と瞳を鬼のほうに向け、理解できないといった風に疑問を投げかける。

「……なぜかばう」

少年もまた、富岡の問いに対し理解できないといった風に答える。

「……妹だ……俺の、妹なんだ……!」

「ガアアツ!ガツ、グアウ!」

必死にかばおうとする少年、暴れる鬼。

「それが?……それが妹か?」

縦に裂けた瞳孔。

異常に尖り伸びた爪。

人の血に濡れた肌と服。

正気を失った獣のような瞳。

それら全てが、少女が鬼であることの証左であった。

富岡は鬼を確実に屠るべく駆ける。

身構える青年と、妹に覆いかぶさる少年。



だが次の瞬間には少年の腕の中に少女の姿はなく。向こうに視線をやると刀片手に富岡に拘束された少女の姿が。

「・・・ファッ!?!」

「彌豆子!?!」

「動くな」

富岡の静かだが、しかし殺気のこもった声に二人の体が固まる。

「俺の仕事は鬼を斬ることだ。勿論お前の妹の首も刎ねる」

「ふざけんな! (迫真) 鬼だか何だか知らねえが、いきなり襲っていきなり切り殺そうとするお前のほうが鬼じゃねえか! 頭にきますよ!」

富岡の言葉に青年が激高する。少年もまた、困惑と懇願のこもった瞳で富岡に口を開く。

「そんな、待ってくれ! 彌豆子は誰も殺していない! 家にはもう一つ匂いが、嗅いだことのない誰かの匂いがした! 皆を殺したのは・・・多分そいつだ! 彌豆子は違う! どうしてそうなったのかは分からない。けど、けど——」

「簡単な話だ。傷口に鬼の血を浴びたから鬼になった。人喰い鬼はそうやって増える」

鬼になった妹を助けようと必死に懇願する少年に対し、富岡は冷厳な事実を突きつ

け、平行線の言い合いが続く。

「禰豆子は人を喰ったりしない!」

「よくもまあ今しがた己が喰われそうになっておいて」

「違う!俺のことはちゃんと分っているはずだ!俺が誰も傷つけさせない、きっと禰豆子を人間に戻す!絶対に治します!」

「治らない。鬼になったら人間に戻ることはない」

富岡は日輪刀を構え、少女にその刃を向ける。ますます少年が焦り、必死になる。傍らの青年もますます激高し叫ぶ。

「いい加減にしろ!そうやって罪もない人間を殺して何が楽しい!」

「やめてくれ!家族を殺した奴も見つけ出して!禰豆子も治して!俺が、俺が全部するから」

やめてくれ。

どうか妹を殺さないでくれ。

お願いします。

そう言って。

家族を皆殺しにされ、唯一生き残った妹も手にかかれようとしている少年は土下座をした。

少年からは、もうこれ以上俺から奪うのはやめてくれという悲壯な思いが。

青年からはこの少年から、さらに奪うのかという理不尽に対する強い怒りが感じられた。

ああ。

わかるよ。

わかる。

冷徹な態度とは裏腹に、富岡はその内心においては彼ら二人の心境を察していた。

わかるよ。お前らがどういう思いなのか。しかし、でも、だから——

「人間の屑がこの野郎……！お前に人間の心はないのか!? 家族を皆殺しにされたこいつの気持ちにもなってみろ！ 必死で家族を助けようとしているのを、お前は一方的に踏みじろうとしているんだぞ！ ふざけるな！ どうしてお前にこんなことする権利があるんだ、いい加減に」

「いい加減にするのはお前らのほうだ!! 生殺与奪の権を他人に握らせるな!!」

怒りを露わにする青年と必死に懇願する少年を遮って、富岡は腹の底から叫んだ。

少年の肩がびくりと震える。

「惨めつたらしくうずくまるのはやめろ!! そんなことが通用するならお前の家族は殺されていない!! 奪うか、奪われるかの時に主導権を握れない弱者が、妹を治す? 仇を見

つける？笑止千万!!」

感情を爆発させ、容赦のない言葉を浴びせる富岡。だが、彼の内心はまた違うことを思っていた。

「弱者には何の権利も選択肢もない！ことごとく強者に力でねじ伏せられるのみ！確かに妹を治す方法はあるかもしれない！鬼はそれを知っているかもしれない！だが、鬼どもがお前たちの意思や願いを尊重してくれると思うなよ！当然、俺もお前を尊重しない！それが現実だ！なぜお前は妹に覆いかぶさった？それで守ったつもりか？なぜその斧を振らなかつた？なぜ俺に背中を見せた？何なら、お前ごと妹を串刺しにしても良かったんだぞ！」

涙をぼろぼろと流す少年。そこにあるのは己の無力への嘆きか、理不尽に対する怒りか。

泣くな、絶望するな。

お前たちが今すべきはそうじゃない。

富岡は、彼らの思いが、怒りと悲しみと絶望が分かっていった。だからこそ、彼は激高したように叫んでいた。

家族を殺され妹も鬼され、つらいだろう、叫びたいだろう、ああ、わかるよ。もしかすると間に合わなかつた俺に対する恨みもあるだろう、いやある。俺がもう少し早く来

ていればこんなことにはならなかったかもしれない。

けど、それでは駄目なんだ。今すべきはそうじゃないんだ。過ぎた時を巻き戻すことはできない。

怒れ。

許せないという怒り、理不尽に対する純粹な怒りは、やがて手足を動かすためのゆるぎない原動力となる。

そして、脆弱な覚悟では妹を守ることも治すこともできない。そして仇を討つことも。

富岡は鬼殺の剣士として、己のすべき義務を果たすため、日輪刀を振り上げ禰豆子めがけて振り下ろす。

「やめろ……!」

ドスツと肉が突き刺され裂ける感触が伝わる。

ぎやあつと少女が悲鳴を上げる。

「やめろーっ!!」

少年と青年はほぼ同時に行動を起こした。

少年が石を富岡めがけ投げつけ、横に駆け出す。

勢い良く投げられた石を日輪刀の柄で弾き飛ばす。

同時に横から青年がすさまじい勢いでこちらに駆け出すのが見えた。

青年がそのまま拳を富岡の顔面目掛けて突き出そうとする。柄でその腕を振り払うのとはぼ同時に膝蹴りか、でなければ足払いを喰らわせようとする。だがそのまま拳を突き出すと見せかけて青年は腕を引つ込め、上半身を後ろに引く。瞬間富岡の眼前には青年の脚がすさまじい速度で迫ろうとしている光景が広がった。

「！」

「又ウン！ヘッ！ヘッ！アアアア！！（大迫真）」

回し蹴りをくらわせようとする青年。その様子、動き、迫真の叫び声とその裏にある呼吸音に富岡は既視感を感じた。あの動き、叫び、呼吸。そう、あれは確かまだ富岡が鬼殺隊に入るための修行をしていたころの――

すんでのところで頭を引つ込め避けると、隙ありとばかり一瞬露わになった股間部分目掛けて、刀を握ったままの拳を勢い良く突き出す。更に膝蹴り。

「フアツ!? ウーン……」

勢いよく蹴飛ばされ地面に叩きつけられ激痛と共に青年は気絶する。

（今の動きと叫び声……そして呼吸、見覚えが……まさか）

先ほどの青年の動きに既視感を感じる一方で、富岡は素早く体を別方向に向ける。

先ほどの少年が叫び声をあげ、何かを投げながら木々の間からこちらに迫るのが見え

た。手元が服で隠れ見えないが、おそらく斧をもって突撃しようとしているのだろう。だが、そこに技術や戦術は感じられない。感情に任せた単純な攻撃。

愚か——

少年の体が激突する直前、富岡は刀の頭部分を少年の背中目掛けて勢いよく叩き込んだ。

ガハッと肺から空気が漏れる音と共に、少年はどさりと雪の上に倒れそのまま気絶した。

——斧がない。何処だ。

倒れた少年の手にはあるはずの斧が無かった。

何処にある？

何かを感じ咄嗟に頭上を見上げると回転しながら勢い良くこちらに落ちてくる斧が。咄嗟に避ける。ドカツと勢いよく斧が背後の木に刺さる。

富岡は悟った。あれは感情に任せた単純な攻撃などではなかったのだ。

木の陰に隠れる直前こちらに石を投げ、木の陰に隠れた瞬間、こちら目掛けて斧を上投げる。丸腰であることを悟られないように手元を隠しながらこちらに向かつて突撃する。富岡の攻撃で倒れた時、斧は彼の頭上から襲い掛っている。

少年が富岡に勝てないからこそその攻撃。少年が倒れた後、富岡を倒そうとしたのだ。

見覚えのある動きをした青年、そしてこの少年。この二人は……

「ウガアア……」

「！」

そこで富岡は先ほどまで拘束していたはずの鬼の少女が、その腕から離れていることに気付いた。二人を相手にしている内に拘束が緩んでしまったようだ。

少女が勢いよく蹴りを突き出す。瞬間富岡は後ろに下がる。

そのまま少女は倒れた二人の下に駆け出した。

しまった、喰われる——

今まで何度も鬼が人を喰う光景を目にした経験のある義勇はここに来て焦った。

そして——

二人が食べられることはなかった。

少女は。

二人に背を向け、こちらを睨んでいた。

まるで、二人を守るかのように。

『彌豆子は違う。人を喰ったりしない』

昔、同じようなことを言って結局喰われたやつがいた。鬼になり飢餓状態となった人間はたとえ家族でも殺して喰う。理由は単純、栄養価が高いから。特に鬼になりたてで



飢餓状態になっている場合は猶更だ。

この少女は鬼になりたてで、その上げがを負い、治している。そのための相当な力を消費しており、間違いなく今は重度の飢餓状態。一刻も早く人の血肉を喰らいたいたいはず。

だが、目の前の少女は。盾になるように二人の前に出て、荒い呼吸と共にこちらを睨めつけている。

それは明らかな守る動作、富岡に対する威嚇行為。

少女が叫び声をあげながらこちらに飛び掛かる。

人を喰らうのではなく守る動作を見せた鬼の少女。

鬼と化した少女を守るため、捨て身のしかし計算された攻撃を見せた少年。

見覚えのある動きと呼吸を見せた青年。

こいつらは。

何かが違うのかもしれない。

そう感じながら、富岡は少女の首筋に手刀を打ち込んだ。

暗い。

野獣は漆黒の中にいた。

あるいはそのように感じたというほうが正しいかもしれない。意識が朦朧としていく。

一体ここはどこなのか。何処からが上で、どこからが下で、どこから左右なのか。

そんな中ふと聞き覚えのある声があった。大切な人の声だということは分かるが、だれのものなのかははつきりと分からない。

「……こんなことになってすみません、田所さん」

「手前勝手なお願いだとは承知しています。でも頼れるのがあなたしかいません。私たちはもう行かないと……」

「どうかあの子たちに伝えてください。置き去りにしてごめんねと……」

「どうか息子と娘を……炭治郎と禰豆子をお願いします」

そんな声を聴きながら、野獣の意識はまた漆黒の中に沈んでいった……

炭治郎もまた漆黒の中にいた。

何処からか、懐かしい、とても大切な人の気配と声がある。

「……置き去りにしてごめんね、炭治郎」

優しい声だった。

「禰豆子を頼むわね。田所さんもいるから……」

そこで瞬間、炭治郎の意識が覚醒した。

まず視界に映ったのは禰豆子だった。大切な、大切な炭治郎の妹、唯一生き残った家族。口に竹でできた口枷を咥えているが、静かな呼吸音が聞こえる。眠ってるようだ。愛する家族が、妹が無事であることに思わず涙が流れる。

隣に目を向ければ野獣が横たわっていた。こちらも意識はないが息はしていた。

「禰豆子……浩二さん……」

大事な人が無事であることに安どする炭治郎。三人とも雪の上で横たわっていたやうだ。

「起きたか」

不意に聞き覚えのある声があった。

声のしたほうに目を向けると、先ほど禰豆子たちを襲った青年の姿があった。

思わず禰豆子の体を抱きかかえる炭治郎。また三人に危害を加えようとしているの

か。

だが青年は何をするでもなく、口を開いた。

「狭霧山の麓に住んでいる鱗滝左近次と……秋吉という二人を訪ねろ。富岡義勇に言われて来たと言え。二人には俺から手紙を出す」

青年は三人に背を向ける。

「今は日が射していないから大丈夫なようだが……妹を絶対に太陽の下に連れ出すなよ」

「……」

そう言つて、青年はそのまま去つていった。

しばらくして。炭治郎と野獣、そして禰豆子の三人はかつての家の前にいた。

野獣を起こして一旦家に戻つた炭治郎達は協力して地面を掘り起こし、家族の遺体を埋めた。

炭治郎と野獣は手を合わせ、黙祷した。

禰豆子は鬼になった影響か、状況がよく分からないのか、起きてからぼーつとしたまままだ。

「……お別れ、ですネ」

「ああ……」

「……浩二さん。確か初めて出会ったとき、『すまほ』で家族の写真を撮りましたよね?……見せてくれませんか?」

「ああ」

野獣は柔らかくスマホの取り出した。電池の節約のためオフにしていたが、状況が状況だ。画面にあの時とった野獣と家族の写真が映し出される。炭治郎と禰豆子にとつて最初で最後の家族写真。野獣にとつてはあの雪山の中で知らない人間である自分を快く迎え入れてくれた命の恩人だ。もう会話をしたり食卓を囲むことはない。もう、二度と会えないのだ。苦しかったろう、辛かったろう。もつと、ああしておけば良かった、あの時こうしていれば。

様々な感情が二人の間にこみ上げ、混ざり合い、よく分からなくなる。

「……もう、会えないんですね。母ちゃんにも、竹雄にも、みんなにも……」  
ただじつと、家族の写真を見つめる炭治郎に野獣は声をかけた。

「……でもまだ禰豆子がいる。たった一人残った家族だ。何がなんでも守らないといけないって、はつきり分かんだね」

「ええ、そうですね」

二人の言葉には確かな決意がある。でも一方で、写真を見ている内にこみ上げてくる感情も確かにあった。

「・・・お前にとって大事な家族、俺にとっては命の恩人。でもまだ恩を返せてない・・・  
なんとしても・・・じゃけん、必ず仇を討ちましようね」

「はい」

「でも・・・やっぱり・・・こんなのないですよ」

「浩二さん・・・」

「行く前に・・・泣きませんか？泣きましようよ・・・もう色々・・・感情が・・・  
涙が、で、出ますよ」

「浩二さん、でも、俺」

長男としてか、男としてか。必死にこらえようとする炭治郎の肩に野獣は手を置く。

「大切な人が死んで泣くのは当たり前だよな？・・・それに、泣きたいときに泣かない  
と・・・心が持たないってそれ一番言われているから・・・」

「・・・うう。母ちゃん・・・竹雄、花子、茂・・・六太・・・みんな、みんな・・・  
ごめん・・・ごめん・・・！う・・・づわあああああー!!」

辺り一带に、少年の慟哭が鳴り響いた。野獣もまた、涙を流し時折叫ぶ。ぼーつと  
していたはずの禰豆子も、声こそ上げていないものの見れば目から涙を流していた。

一通り泣いた後、三人は身支度を終え、出発の準備を整えた。

炭治郎は禰豆子の手をしっかりと握る。

「・・・浩二さん」

「？」

「・・・俺必ず・・・仇を討ちます。そして・・・禰豆子を人間に戻します」

「そうだな。・・・俺も同じだよ、炭治郎」

それから炭治郎はかつての家と埋葬された家族を振り返ったがすぐに向き直った。

「・・・行きましょう！」

「ああ・・・！」

そして三人は駆け出した。

敵討ちのため、妹を人間に戻すため。

過酷で残酷な運命を断ち切り変えるため。

三人は歩みだす。

もう止まることはない。

ただ、前へ進むのだ。





## 第4話 AKYSとの再会

狭霧山。

その麓にある小さな家屋の近くで一人の男が鍛錬に勤しんでいた。

白い空手の胴着を着込み、黙々と正拳突きを繰り返す。

腰の黒帯、鍛え上げられた肉体、そして何よりも隙のない動きと構え、人間離れした突きの速さと勢いが、彼が相当な実力の持ち主であることを示していた。

不意に男がその拳を止めた。

空を見上げると一匹の鴉がゆっくりと舞い降りてくる。

その足には白い紙が結ばれていた。手紙だ。結びをほどき、紙を開き、書かれている文章に目を通す。

『略啓

鱗滝左近次殿 秋吉殿

鬼殺の剣士になりたいという少年と青年とそちらに向かわせました。

丸腰で私に挑んでくる度胸があります。

身内を鬼によって惨殺され、唯一生き残った妹も鬼に変貌していますが人間を襲わな

いと判断いたしました。

この三人には何か違うものを感じます。少年のほうは鱗滝殿と同じように鼻が利くようです。また、青年のほうは秋吉殿と同じような迫真空手の動きと呼吸を見せていました。あくまで勤ですがもしかするとあなたと同じような人間かもしれませぬ。

もしかしたら、“突破”し“受け継ぐ”ことができるかもしれませぬ。どうか二人を育てていただきたい。

手前勝手な他の身とは承知しておりますが何卒、御容赦を。

お二人共、御自愛專一にて精励くださいますようお願い申し上げます。

忽々

『富岡義勇』

家屋から天狗の面を付けた初老の男が出てくる。道着姿の男が手紙を見せた。文章に目を通す。

それから二人共しばらく考え込んだ後、うなずき合うと簡単に身支度をし、二人は家屋を後にするのだった。

野獸と炭治郎、禰豆子の一行は青年の言葉を頼りに鱗滝左近次と秋吉なる人物の待つ狭霧山へと足を進めていた。

一刻も早く狭霧山へと行きたい一行はしかし青年の禰豆子を絶対に日の光に当てるなどという言葉から、途中炭治郎は道中で出会った農民から要らない竹や古い籠を分けてくれと頼み、中に光が差さないよう細工し補強した籠を作り、この籠の中へ禰豆子を入れて運ぼうとした。

「……さすがに人が入るにはその籠小さい……小さくない？」

「でも禰豆子が鬼になった時、体が大きくなりましたよ。もしかすると逆もあり得るんじゃないんですか?……禰豆子、この籠の中に入れるかい? 昼間も先に進みたいんだ。俺が背負っていくからさ……あの時お前からだ大きくなたろ? 逆に小さくできないか?」

「……」

しばらく籠をじつと見ていた禰豆子だったが、もぞもぞと頭から入り込み、しばらくもがいた後で徐々に彼女の体小さくなり籠にすっぽりとはまった。

「おおっ、すごい。偉いぞ禰豆子」

「はえー．．．すっげえ小さい．．．でもこれでみんな移動しやすくなったってはずり分かんだね」

「そういえばちよつと前までは禰豆子もすごい小さかったよな．．．それがあんなに大きくなって．．．」

「おーい、炭治郎早くしろー（ホモはせっかち）」

「あつ、はい」

妹の思い出にふける炭治郎に野獣は声をかけ、一行は再び狭霧山へと向かう。

「そういえばお前さ炭治郎さ、さつきヌツ．．．籠作つてた時にさあ、禰豆子の奴なかなか（穴から）出てこなかったよな？」

「そうですね．．．」

野獣と炭治郎が竹や藁を使って籠を補強し作り上げている最中、禰豆子はずっと近くの洞穴にいた。しかも、その中に更に穴を掘ってその中に引きこもっていた。

「すごく顔をしかめてました．．．よっぽど日に当たりたくないみたいですね．．．」

あの青年は何があっても禰豆子を日の光に当てるなど言っていた。禰豆子の日中の様子を考えても、単純に嫌がるだけではないようだ。おそらく、禰豆子やそして鬼にとつて日光は大変害のあるもののようなのだ。

長時間歩き、日も暮れ辺りも暗くなったころには、とある山の麓にまで来ていた。地

元の人に聞いてみれば狭霧山に行くにはこの山を越える必要があるという。

この周辺、この時間帯には人が消えている、気を付けろという忠告を受けながらも、少しでも先を急ぎたい一行はもう少し歩くことにした。

山道を歩きながら野獣は少し考えこむ。

「なあ、たしかあいつは狭霧山の鱗滝と秋吉っていう二人を訪ねろって言ったよな？」

「はい、二人には手紙も出すって……どうかしたんですか？」

「俺、この時代に来る前はさ、大学で空手部と水泳部掛け持ちしていたんだけどさ……空手部の顧問が秋吉って名前なんだ。あいつが言ってたのと同じ名前だ。で、秋吉師匠、何か事件に巻き込まれでもしたのかここ最近行方不明になっていてさ……その行方不明になった場所が狭霧山なんだ」

野獣がタイムスリップする以前所属していた迫真空手部の顧問、AKYSこと秋吉。野獣やその仲間たちにとっては厳しく、そして頼りになる師匠だった。だがその秋吉は狭霧山に修行しに行つたきり、そのまま行方不明になってしまった。そして、富岡義勇が訪ねろといった人物と場所も、秋吉と狭霧山であった。……これは偶然の一致というべきだろうか？

「……まさかとは思うけど。秋吉師匠も俺みたいにこの時代に来ちまって狭霧山にいるなんてことはないよな……？」

「うーん・・・流石に偶然じゃないですか？浩二さんみたいに未来からくるなんてそう  
そうないと思いますし・・・」

「ですよねえ・・・」

炭治郎の言葉に野獣も流石に偶然、思い違いかと考え直す。炭治郎の言うとおり、夕  
イムスリップなどそうそうあるものではない、というよりまずありえないことだ。名前  
と場所が一致していたのは多分、偶然だろう・・・そう、偶然だ・・・

「あつ、浩二さん見てください」

しばらく山道を歩いていると炭治郎が何かを見つけて指をさした。

その先には古く小さいお堂がぽつんと建っていた。中に誰かいるのか、中から明かり  
が灯っているのが見える。

「お堂がありますよ。明かりが漏れてるから誰かいるみたいですけど。ちょうどいい  
からあそこで一晩過ごしましょう」

「おつ、そうだな」

これ幸いとそのままお堂の中へ入ろうとして不意に炭治郎が足を止めた。鼻を引  
くつかせている。何か嗅ぎ付けたようだ。

「・・・！血の匂いがする！」

「血の匂い？誰か怪我人がいるのか？」

「多分。この山は険しいから誰かが怪我をしたんだ。大丈夫ですか・・・!？」  
「フアツ!？」

炭治郎がお堂の扉を開けたその時、中にいたのは一行が予想したような怪我人の姿ではなく。

壁と床一面に散らばったおびただしい量の血。床に転がる数人の男女の血まみれの死体。そして、そのうちの一人の腕に噛み付き一心不乱にその肉を貪り食う一人の男だった。

男がじろりとこちらに目を向ける。

血走り殺気のこもった、獣のような瞳。肉食獣のように鋭くとがった歯、鋭くとがった爪。

眼前に広がる光景から野獣と炭治郎は瞬時に察した。鬼だ。人喰い鬼だ。死体をむさぼっていた男、否、鬼が口を開く。

「なんだ、おい?ここは俺の縄張りだぞ?俺の餌場を荒らしたら許さねえぞ」

突然の出来事、眼前に広がる惨状に二人は過ぎには動けずにいた。禰豆子に至っては死体から流れ出る血を見て、息を荒くし、竹の口枷からぼたぼたとよだれを垂らし、体を震わせている。鬼と化した禰豆子にとつては御馳走が転がっているようなものだ。それをまだ残っている理性で必死に抑えている風だった。

身動きが取れずにいる一行を見て鬼が首を傾げる。

「それにしても妙だな．．．ひよつとしてお前ら．．．人間か？」

次の瞬間。

野獣の隣を何かが凄まじい速度で擦過した。

遅れて先ほどの鬼が人間離れした速さで跳躍し炭治郎を襲ったのだと認識する。

慌てて後ろを見ると、炭治郎の上に鬼が覆いかぶさり血しぶきが舞っていた。

嫌な予感が野獣をよぎったが、すぐにその血が炭治郎のものではないと悟る。炭治郎

の右手には血の付いた斧が握られていた。襲われた瞬間咄嗟に持っていた斧を振り、鬼の首を切り裂いたのだ。

鬼が後ろに跳躍する。

その首は斧の斬撃で裂け、中の肉と骨が丸見えになり、大量の血が噴き出していた。普通ならまず即死の傷。だが相手は鬼だ。

「!？」

「はは、斧か。やるな．．．でもこんな傷、すぐ治る。ほら見ろ、もう血が止まった」  
見れば既に血が止まり、切り裂かれた肉が繋がるように傷がふさがっていき、血も少しずつ消えて行っている。

驚愕する炭治郎と野獣に、鬼は嘲笑う。



傷が完全にふさがると同時に再び鬼が素早く炭治郎に襲い掛かった。瞬間炭治郎は鬼に組み伏せられる。

野獣は禰豆子を一瞬ちらりと見た。鬼の食糧である人の死体とその血を前にしてぶるぶる震えて固まっている。人としての理性と鬼としての本能がせめぎ合っているのだ。あれでは動けまい。炭治郎も鬼に組み伏せられ、身動きが取れずにいる。いずれにせよ野獣を含めここにいる全員が危険に晒されている。どう動くべきだ？

「さあ、このまま頸をへし折って・・・」

「アッアッアッ!!」

瞬間野獣は雄たけびを上げ鬼に向かって突進していた。

そのまま鬼に掴みかかり地面に組み伏せようとする。炭治郎も鬼の力が緩んだ一瞬のスキをつけてその拘束を逃れると、野獣に加勢し斧の柄を使って鬼を地面に押し付け拘束しようとする。だが――

「へっ、馬鹿野郎お前、人間二人程度で鬼に勝てるわけないだろお前!」

「ぐっ・・・!」

「ウーン・・・」

鬼の力は明らかに人間の力をはるかに上回っていた。拘束しようにも跳ね返されてしまう。一転攻勢、次の瞬間には野獣はその体を吹き飛ばされ、炭治郎は元のように地

面に押し付けられ組み伏せられてしまう。

鬼がその首をへし折ろうとしたその瞬間、何かが襲い掛かり鬼の首を吹き飛ばした。吹き飛ばされた頸がボールのように宙を舞い地面に激突する。

先ほどまで固まっていた禰豆子が素早く駆け付け、凄まじい力で鬼の首を蹴り上げたのだ。その力は首を吹き飛ばすには十分だった。

首のなくなった鬼の胴体があくと力をなくし、血を吹き出しながら炭治郎の倒れ掛かる。

ぎよつとする炭治郎。

殺したのか？

だが次の瞬間、鬼の腕が再び動き出し、炭治郎の体を引き裂こうとする。

禰豆子が胴体を蹴り飛ばす。

首をもがれても動くというのか。

吹き飛ばされた首のほうを見れば、なんと怒りと憎悪のこもった表情でこちらを睨みつき喋っていた。

「クソっ！ やっぱ一人鬼だったのかよ！ 妙な気配させやがって、なんで鬼と人間がつるんでるんだ、クソツタレ！」

首のない胴体が立ち上がり、禰豆子に襲い掛かろうとする。

「やめろつ、禰豆子に触れるなあーっ！」

胴体に掴みかかる炭治郎。

野獣が首のほうを見ればなんと、腕を生やしつつあった。下手をすればあのまま胴体も再生させかねない。

野獣は転がっていた斧を掴むとそのまま首に向かって駆けだした。

同時に腕を生やし終えた首が野獣に襲い掛かる。

鋭い爪を生やした両手が野獣の肩を掴み、鋭い歯が斧の歯に噛み付く。

「ふざけんじゃねえよ、何お前首だけの癖に腕生やしてんだよ……」

野獣に怒りの感情が燃え上がる。高ぶった感情と危機的状況は人間に大きな力を発揮させる。野獣は斧の柄を首に引っ掛け力ずくで引きはがすと、そのまま渾身の力を籠め斧を振り回し木の幹に叩きつけた。

斧の柄と木に引っ掛かり首は身動きが取れなくなる。強く斧が食い込んだのと生えた腕も短いため、斧を引きはがすこともできない。しばらくは身動き一つとれまい。

「炭治郎!!」

野獣が振り返った先には胴体と取っ組み合い、蹴り飛ばされる炭治郎と禰豆子の姿があった。

野獣は急いで駆け出すと、勢いに任せ、そのまま飛び蹴りを喰らわせた。

胴体が宙を舞い、そして消えた。

何が起こったのか見てみると、眼前には断崖絶壁と落下する胴体が見えた。

あのままだと炭治郎と禰豆子は胴体に蹴り飛ばされて崖から落下していたかもしれない。

鬼の胴体はやがてグシャツと地面に激突し無残に散らばった。

「ギャツ」

引っかけられた首が短く悲鳴を上げそのままぐったりと意識をなくした。胴体をやられたからだろうか。

いずれにせよ何とか助かった。

「……大丈夫か、お前……？」

「はい……禰豆子も……大丈夫です。間一髪でしたね……でも……」

炭治郎はちらりと斧で引っかけられたままの首を見る。

「あれ……どうします……？」

「とどめ指すしかないでしょ？……ていうか、あの鬼お前の家族を襲った奴じゃないのか……？」

野獣の疑問に炭治郎は首を横に振る。

「いえ……家に残っていた匂いと違いました。やったのは別の鬼です……でも……」

とどめを刺さないと、また襲うかもしれませんよね……？」

炭治郎は短刀を抜き。

野獣はそこら辺に落ちていた大きめの石を持つ。

おそらく鬼はこれ以外にも大勢いるはずだ。

これはそのうちの一人にすぎない。今は首だけになり意識を失っているとはいえ、死んだわけではない。微かに息がある。止めを刺さねばまた人を襲うだろう。

だから、自分たちがやるのだ。

そう、頭ではしっかりと理解していた。

しかし首に近づくと、その短刀を、石を持つ手が震える。もともと荒かった呼吸がさらに荒くなる。

止めを刺す、つまり殺す。

必要なことだと二人とも分かっていた。

だが、殺すとは本来異常な行為。たとえ必要なことでも一般人ならまず忌避し、戸惑う。鬼相手とはいえ、はじめてその手で直に命を奪うことに戸惑わないはずがない。

だがやらねばならない。

二人はうなずき合うと、震える手を振り上げそして――

その手を誰かが掴んだ。

「そんなんじや雑魚鬼も殺せねえぞ、お前ら」

「!?!」

「フアツ!?!」

振り返ったその先には、二人の男が立っていた。

一人は頭巾に天狗の面を被った男。かろうじて見える白い頭髮が、彼がある程度の年齢であることを示していた。

もう一人は黒帯に白い道着姿の男。精悍な顔つきに六尺以上はあろうかという長身の偉丈夫だ。

彼らは誰だ？

音もなくいつの間にか背後に忍び寄っていた二人の存在に野獣も炭治郎も驚いていた。だが恐らく、野獣のほうがその驚愕の度合いは大きかったかもしれない。何しろ二人のうち一人は、野獣の見知った顔だったからだ。

野獣は目を見開いてその名をつぶやく。

「・・・秋吉、師匠・・・?」

AKYSこと秋吉。

迫真空手部の顧問、野獣たちの師匠。行方不明になっていたはずの男。

白い道着姿の男は紛れもなく秋吉その人であった。

「手紙を見てまさかとは思ったが・・・久しぶりだな、野獣」  
驚く二人とは対照的に秋吉はふっと笑ってそう言うのだった。

## 第5話 野獣先輩、覚悟の裏技

野獣と炭治郎のもとに突然現れた二人の男。一人は天狗の面をつけた初老の男。もう一人は行方不明になっていたはずの野獣の師匠、秋吉。二人とも全く足音も気配もなく突然現れた。天狗の面の男は何者なのだろうか？なぜ行方不明になっていた人物がここにいるのだろうか？

突然の事態に二人ともしばらく嘔然としていたが、やがて野獣が口を開いた。

「・・・秋吉師匠・・・何でこんなところに・・・？」

「話は後だ。それよりも」

秋吉は斧の柄と木の幹の間に挟まり身動きが取れずにいる首だけの鬼を指さす。

「お前ら、あれにとどめを刺さなくていいのか？」

顔を見合わせる野獣と炭治郎。ついさつきまで、二人はあの鬼にとどめを刺そうとしていたところなのだ。ここでやらねば更に人が殺されると。

今度は炭治郎が口を開く。

「・・・どうすればとどめを刺せますか？」

「人に聞くな。自分の頭で考えられないのか」



答えたのは天狗面の男。

「・・・」

炭治郎は短刀を、野獣は石を見つめる。ついさつきまでこれでとどめを刺そうとしていた。胴体が失われたとはいえ、あの鬼はまだ生きています。胴体だけで動いていたし、首からは腕が生え出ている。放っておけば完全に再生するかもしれない。そしてまた人を殺し喰らうだろう。とどめを刺すのは当然の義務だ。ついさつきまでそう思っていた。だが改めて状況を目の前にすると、心に揺らぎがある事に気付いた。

どうすればとどめを刺せるだろうか？そんなものでは雑魚鬼も殺せないと秋吉は言った。頭を潰すべきか？となるともつと大きな石を思いきり打ち付けるべきだろうか？しかし一撃で殺せるだろうか？それで鬼は死ぬだろうか？余計な苦しみを与えるのではないか？

野獣も炭治郎も凶器を手にし、瀕死の鬼を目の前にしながら動けなかった。一言でいえば彼らは殺すということに対して躊躇していたのだった。

二人の躊躇は天狗面の男も秋吉も感じていた。当然といえば当然というべきかもしれない。

本来一般の人間にとって殺すというのは異常で非日常的な行為。不慣れな人間ならまず戸惑いや良心の呵責を感じるだろう。まして目の前にいるのは鬼とはいえ見た目は人間と変わらない。ついさっきまで普通の生活を営んでいた二人が躊躇を感じるのは当然とも言えた。だが……

天狗面の男は匂いを嗅ぐ。そしてすぐに悟った。

（ああ……この子は駄目だ）

二人のうち耳飾りの少年。彼から躊躇に加え、優しさや同情の匂いがした。行為に対する躊躇もあるが、思いやりが強すぎて決断できていないのだ。鬼を前にしても優しさが消えず、それどころか同情すら抱いている。育ててほしいという手紙をもとに来ては見たが……少なくともこの子には無理だろう。

漂う沈黙、過ぎ去っていく時間。

秋吉が不意に呟いた。

「……そろそろ夜明けだな」

東の空を見ればオレンジ色に輝き木々の間から光が少しずつ漏れ、強くなっている。そして山の稜線から太陽がわずかに顔をのぞかせ、その光が山々に、野獣たちに、そして鬼に降り注ぐ。と、次の瞬間。

「ぎゃあああああああつ!？」

「!?」

日光が当たった瞬間、鬼の首が一気に焼け、燃え上がる。先ほどまでのしぶとさが嘘のように、すさまじい速さで炭のようにボロボロに崩れていく。

「ハッ．．．ハッ．．．アッー！アッー！アッー！アッー！アッー！アッー！アッー！アッー．．．アッー！」

声にも鳴らす絶叫を上げ必死に、しかし空しくもがく鬼。日光に焼かれ、ボロボロに崩れ、最後には塵のようになったかと思うと、そのまま鬼は跡形もなく消え、後には幹に刺さった斧だけが残された。

野獣と炭治郎は義勇の「絶対に妹を日の光に当てるな」という言葉と、禰豆子が太陽を嫌がっていたことを思い出す。

日光が鬼の弱点のようだが、日の光に当たるだけでこうなるとは。道理で禰豆子が嫌がるはずである。

呆然としていた野獣と炭治郎だったがそこで秋吉と天狗面の男のことを思い出す。

視線を移すと二人は盛り上がった土の山の前で手を合わせていた。お堂の中であの鬼に殺された人を埋葬していたのだ。匂いである程度分かっていたが、少なくとも悪い人間．．．ではなさそうだ。

「あの．．．」

炭治郎が声をかけると天狗面の男が振り返った。

「儂は鱗滝左近次だ。そしてこいつが……」

「秋吉だ。義勇の紹介はお前たちで間違いないな？」

「は……はい。竈門炭治郎といます。妹は禰豆子で、この人が田所浩二さんで」

「お前ら、もし妹が人を喰ったらその時どうする」

「……!?!」

秋吉の突然の質問に野獸も炭治郎も一瞬言葉が詰まらせ固まった。

突然の、考えたこともなかった質問。妹が……禰豆子が、人を喰ったら？そんなことがあるはずがない。そうはさせない。でも可能性は0ではない。もしそんなことになったら自分たちはどうするべきなのか？そうさせない、ありえないとばかり考えていたが、完全に起こりえないとは限らないのだ。しかしいざそうなったら自分たちはどうするべきなのだ？

一瞬、沈黙が場を支配する。と、次の瞬間。

「オルルアー！」

「おぶえ!?!」

「フアツ!?!」

突然、秋吉が人間離れた速さで正拳突きを炭治郎に見舞った。まったく動きをとる

ことが出来ぬまま炭治郎は後ろに吹っ飛ぶ。そのまま髪入れずに秋吉は野獣に回し蹴りを繰り出す。構えをとる暇もなく野獣も横に飛ばされる。地面にぶつかる寸前何とか受け身の姿勢をとるが、それでも受けた衝撃は大きく眩暈がした。

「カスが判断が遅いんだよ」

地面に転がる二人を睥睨し秋吉は言った。

「朝になるまでとどめを刺そうとしなかった。今の質問にすぐに答えられなかった。殺すことを躊躇していた。とにかく判断が遅いんだよ。殺すのを躊躇するのは分かるが・・・特に炭治郎、お前は単に躊躇していただけじゃなく、鬼に情を捨てきれていなかった。鬼になった妹を助けるとか何とか言っていたが・・・本当に本気でそう思っているのか？正直、お前の覚悟は甘いとしか言えないぞ」

「そんなことありません！俺は本気で禰豆子のことを——」

「鬼になった妹が人を喰ったら、お前はそれを許せるのか？」

「・・・!?!」

秋吉の指摘に炭治郎は言葉を詰まらせた。今炭治郎と禰豆子は鬼に家族を殺され、鬼にされた立派な被害者である。だが禰豆子が人を食らう鬼であることは紛れもない事実である。今はまだそんなことはしていないし、させるつもりは炭治郎も野獣も絶対がないが、自分たちが加害者の側になることは十分あり得るのだ。その人の未来や大切な

家族をもし奪うことがあったら……果たして炭治郎は禰豆子にどう接すべきなのだろうか？それでも許し守るべきなのか、できるのか？

「妹が人を喰った時にやることは二つだ」

沈黙する炭治郎に天狗面の男——鱗滝が言った。

「妹を殺す。そしてお前達は腹を切つて死ぬ。鬼になった妹を庇い、連れていくというのはそういうことだ。しかしこれは絶対にあつてはならないことだと二人とも肝に銘じておけ。罪なき人の命を奪う、それだけは絶対にあつてはならない。……儂の言っていることが分かるか？」

「はい！」

鱗滝の言葉に今度は野獸も炭治郎も間髪入れずに答える。

「……ではこれからお前たちが鬼殺の剣士として相應しいかどうか試す。妹を背負つてついてこい」

指示に従い、野獸と炭治郎は鱗滝と秋吉の追つて走っていた。炭治郎の背中にはもちろん禰豆子の入った籠が背負われている。

鱗滝も秋吉も、速い。そのうえ足音が全くしない。運動部で鍛えている野獸はともか

く、禰豆子を背負う炭治郎は負担が特に大きいだろう。二人ともすぐに、特に炭治郎は強く息切れを起こした。

「アアツ！ハアツ！イキスギイ……ハア……ハア……ヌツ、炭治郎、大丈夫か……大丈夫じゃない？」

「ハツ、ハツ……ウーン……だ、大丈夫です、まだ、いけます……！浩二さんこそ、大丈夫ですか……ハツ」

クツソ汚い息切れをしながらも炭治郎を気遣う野獣とそれに応える炭治郎。

「空手部と水泳部掛け持ちしてるから体力には自信あつたけど……やつぱり、秋吉師匠は速いっすね……ハヤスギイ……」

「あ、あの道着姿の人と知り合いなんですか……？」

「以前行方不明になった俺の空手部の師匠のこと話したろ？……あの人がそうなんだよ……」

「え、そうなんですか!?!じゃあ、まさかあの人も……」

思いもしない事実には炭治郎は目を丸くした。未来から来た人間の師匠。それがここにいるということはあの秋吉という人物も野獣と同様未来から来た人間ということになる。

「俺も正直信じられないよ……行方不明になってたはずなのに。でもどう見たって秋

吉師匠だつてはつきり分かんかね」

行方不明になつたはずの恩師がここにいる。再会できたこと、無事だつたことは素直に嬉しいが、何故ここにいるのか、自分と同様タイムスリップしたのか、疑問も次々と湧いてくる。それと同時に野獣の脳裏に秋吉の熱心かつ過酷な迫真空手の指導が思い浮かぶ。基礎体力作りのグラウンド810周に1919回の筋トレ、114514回の正拳突き・・・他にも思い出したらきりがなし、思い出すのもゾツとする。迫真空手は一般の空手とは大きく異なり非常に強力で、非常に過酷なのだ。

「秋吉師匠の稽古はとにかく厳しい・・・というより過酷すぎるんだ・・・あの二人俺たちを試すとか言つてたけど・・・絶対これだけ終わるはずがないつて分かんかね・・・」

炭治郎、覚悟しておいたほうがいい・・・」

「・・・はいー」

野獣の迫真の表情に炭治郎は頷く。秋吉や鱗滝が言つたように鬼になつた妹を守ることはとんでもなく重いものを背負うということだ。生半可な覚悟ではできない。今も苦しいが、確かに野獣の言うとおりこれだけで終わらないだろう。おそらくこれからも堪え難きを耐えなければならぬ経験が炭治郎や野獣、禰豆子に降りかかるだろう。

(・・・耐える、か)

思えば炭治郎もそうだったが、禰豆子もまた耐え、辛抱するばかりだつた。以前炭治



郎は彌豆子が着物を直していた時のことを思い出した。もう何回、何十回も破れまた直しているのを見て炭治郎は新しいのを買ってやるからと言った。そんな彼に彌豆子は屈託のない笑顔で大丈夫、この着物は気に入っているからと言ってこう続けた。それよりも下の子たちにもつと食べさせてやってほしい、そっちのほうがよくつぽど大事なことから。炭治郎だけでなく彌豆子も、みんなも辛抱していたのだ。明るい未来を信じながら。

みんなにしてやれなかった分を攻めて彌豆子にだけはしてやりたい、何があつても必ず守つてやる、人間に戻してやると炭治郎は改めて心に誓った。

そしてそれは、野獣もまた同じだった。

日が暮れるころには四人は狭霧山の麓の小屋に辿り着いていた。鱗滝も秋吉も平然としている一方で、野獣と炭治郎は疲労困憊で座り込みげえげえと激しく息切れを起こしていた。

そんな二人を尻目に秋吉は平然とした様子で告げる。

「早く起きろ！ 試すのはこれからだ。山に入るぞ」

彌豆子の入った籠を小屋に置くと、そのまま連れられるようにして、二人は疲労困憊

の体を何とか動かし山を登る。山には霧が立ち込め周囲の視界は恐ろしく悪い。疲労困憊しているのに加え、高地故空気が薄くくらくらする。

どこまで歩いただろうか、鱗滝が振り返り二人に告げる。

「ここから山の麓の家まで下りてこい。今度は夜明けまで待たない」

それだけ告げると鱗滝と秋吉はまるで霧か霞のようにたちどころに何処かへと消え去った。後には野獸と炭治郎だけが残った。

「・・・どうする、疲れてるから体力回復のために一旦休んでく・・・休んでかない？  
一応下りて来いって言ってたけど」

「そうですね・・・」

周りには霧が深く立ち込めている。夜だから一層暗く、視界が悪い。一歩進んだだけで迷いそうだ。

「やつぱり行きましよう。この霧です。下りるだけとは言ったけど、迷ったら大変です。先を急ぐに越したことはありません」

「ですよねえ・・・ていうか秋吉師匠のことだから絶対下りるだけじゃないと思うんですがそれは・・・そう言えばお前さ、炭治郎さ、又ツ、鼻が利くって言ってたよな？秋吉師匠と鱗滝さんの匂いも分かるのか」

「はい！二人の匂いはもう覚えています。だから道を間違えることはありません。と

りあえずそれを頼りに行きましょう。」

麓へ向けて歩き出した二人。

数歩歩いた次の瞬間。

「!?」

足に何か、紐のようなものが引っかかる感触。と同時にどこからか複数の風切り音が響いてきた。

「フアツ!」

「浩二さん!」

無数の石礫が野獣の体に投げつけられる。その勢いは凄まじく思わず野獣は倒れこんだ。

「アーイキソ……」

罨だ。

二人は驚くと同時にやはりとも思った。試す、というからにはただで下ろしてもらえない。おそらく罨はこれだけではなくさらに仕掛けてあることだろう。しかも霧と暗さで視界が悪く、二人とも疲労困憊しているうえ空気が薄く頭がくらくらするため、罨を察知するのも避けるのも困難だ。

「っ!」

炭治郎は何か糸のようなものを踏む感触を覚えた。しまった、と思うと同時に眼前に巨大な丸太がすさまじい勢いで迫ってきた。避けても間に合わない。が、それが炭治郎に衝突することはなかった。

「ヌンツ！ヘツ！ハツ！ンアツ！」

起き上がった野獸が丸太めがけて飛び蹴りをし、軌道をずらす。そのまま丸太は炭治郎の顔の横を擦過した。

「おつす、大丈夫か・・・大丈夫か？」

「何とか・・・でもまずいですよ、この調子で罨にかかってたら朝まで間に合わないかも・・・そのうえ空気が薄くてくらくらする・・・」

「このくらいであきらめるんじゃないやねえ！妹を助けるんだろ！」

「・・・はい！」

野獸の叱咤を受け、気を取り直す炭治郎。そうだ、家族や禰豆子が受けた痛み甚至比べればこんなもの屁でもない。

呼吸を整え匂いを嗅ぎ分ける。鱗滝と秋吉のそれと同時に別の匂いもかすかに感じる。

罨だ。罨の匂いだ。やはり人の仕掛けた罨はやはりかすかに匂いが違う。

「浩二さん、俺が鱗滝さんと罨の匂いを辿ります。しっかり、ついてきてください！罨

の匂いがしたら知らせます！」

「おし！じゃあもし罾があつたら俺に任せてくれ！さつきみたいにぶっ飛ばしてやるから！」

「はい！」

二人は再び歩み始めた。そして……

### 麓の小屋。

中では鱗滝が禰豆子に布団をかぶせ寝かせている。禰豆子は竹筒を咥えたまますすうすと深い眠りにについている。一方の秋吉は戸の前に立ち山の方を見つめていた。そろそろ夜明けだ。東の空がオレンジ色のグラデーションに染まり、木々がわずかに光に照らされ稜線が明らかになってくる。

「……！」

麓から誰かが下りてくる。少年と青年らしき二人……少年が青年の肩を支えるようにしてこちらに歩いてくる。すぐに誰か分かった。耳飾りの少年に日焼けした青年……野獣と炭治郎だ。切り傷、擦り傷に打撲痕、どちらも全身傷だらけだが特に野獣がひどかった。足取りも炭治郎に比べると少し覚束なく、炭治郎に肩を支えられるようにして

歩いている。あの山の中で罨から炭治郎を庇い、蹴り飛ばしたりしているうちに自然と炭治郎よりそのダメージを受けていたのだ。とはいえ炭治郎もその足はひどく震え息も震えている。

やがて秋吉の前まで来ると二人はずるずるとへたり込んだ。

「はあ……はあ……も、もどり、まし、た……」

「チカレタ……」

「……戻ったか」

彌豆子を寝かせた鱗滝が出てくる。

「……お前ら、覚悟はあるか？」

地面にへたり込む二人に秋吉が言葉をかける。

「言っておくがこいつは入り口の入り口だ。お前らが踏み込もうとしているのは、これまでとは全く違う、文字通り死と隣り合わせの世界だ。しかも、鬼を連れて行くこうとしている。背負うもんは相当な重さだ。それでも覚悟はあるのか？」

「……あります」

秋吉の問いに炭治郎は答える。

「家族の仇をとつて。彌豆子を必ず人間に戻す。そう誓ったんです。口では何とでもいえると思うかもしれませんが、俺にはそれしかないし、やらなきゃいけないんです。」

やらないとか出来ないじゃなくて……やらなきゃいけない……！それに今のままじゃ俺は守ることも前に進むこともできない……だからここに来たんです……！」

「……お前だどうだ、野獣」

今度は野獣に問いかける。

「お前も俺みたいなのにこの時代に来たみたいだが……ここから先は死と隣り合わせだ。稽古とは違う。それにお前は炭治郎や禰豆子とは赤の他人だろう？ どうしてここに来た？ 覚悟はあるのか？」

「……」

秋吉の言葉に野獣は目を閉じる。

今のことは始まりに過ぎないのだろう。炭治郎や禰豆子とともに歩むということは過酷な戦いの道に足を踏み入れるということだ。そして炭治郎と野獣は確かに赤の他人だ。わざわざ道を共にする必要や義理はないのかもしれない。だが……

野獣の脳裏に炭治郎や禰豆子、竈門家との思い出が浮かぶ。

雪山で途方に暮れる中、自分を見つけ連れて行った炭治郎。赤の他人の自分を温かく受け入れてくれた竈門家。貧しいながらも明日を信じ懸命に明るく生きる、幸せな家族、野獣の命の恩人。短くも暖かい記憶が野獣の脳裏に次々と浮かぶ。だがそれらがこれから先繰り返されることはない。そんな当たり前の尊い日常は突然理不尽に奪われ

たからだ。

もしあの時炭治郎と行動を共にせず、自分がそばにいたら何ができただろうか？恐らく、自分も何もできずに死んだかもしれない。だがもしかすると、自分がいたことで何かが変わった可能性もごくわずかにあったかもしれないのだ。自惚れかもしれない。だが自分が何もできなかった、守れなかったという自責がそこにはあった。自分は暖かく迎え入れてくれたあの命の恩人達に何もできなかった、守れなかった。彼らの未来は理不尽にも奪われ閉ざされてしまった。残った家族も過酷な運命に晒されている。だが、それでも炭治郎たちは懸命に立ち向かい前に進もうとしている。それをただ見てるだけで放っておくのは許されることなのだろうか？

彼らは赤の他人ではない。立派な命の恩人だ。それを見捨てるのは男ではない。

「・・・確かに、傍から見たら赤の他人かもしれませんが。でも、俺にとっては、命の恩人です」

「・・・」

「あの雪山で遭難していた時・・・赤の他人の俺を快く、何の見返りもなく受け入れてくれた・・・命の恩人です。明るくて、幸せな家族で・・・でもそれが突然奪われた・・・」

野獸の視界が歪む。

野獸の目から涙が溢れ、地面にポタリ、ポタリと落ちる。



「俺……悔しいんです……命の恩人に、何もできなくて、何も守れなくて……こんな理不尽を前にして恩がありながら自分は何もできなかった……炭治郎はそれでも前に進もうとしている……俺が何もしないわけには、何もできないわけにはいかない……俺は……もつと強くなつて……守りたいんです……だから、お願いします……！」

「……フツ」

秋吉が静かに笑つた。鱗滝と頷き合う。

「お前ら……二人とも良い目してんじやねえか。理不尽に直面し、奪われそれでも貪欲に求める野獣のような目……己の弱さを自覚し困難を前にしてそれでも守るために進もうとする、漢の目だ」

秋吉が静かに言う。

「田所浩二、竈門炭治郎……お前らを認める。俺たちがお前らを強くしてやつから、俺達が直々に、呼吸を教える」

「……はい！」

東の空を見れば完全に日が昇り、四人を照らしていた。それは新たな始まりを知らせるかのようであつた。

## 第6話 鍛錬の裏技

「儂や秋吉は“育手”だ。文字通り、剣士を育てる。育手は山ほどこいてそれぞれの場所、それぞれのやり方で剣士を育てている。鬼殺隊に入るためには藤襲山で行われる最終戦別で生き残らなければならない。最終選別を受けていいかどうかは儂と秋吉が決める」

「まずは鬼殺隊士として最低限必要な体力や技能を身に着けるための鍛錬をする。これは鱗滝と俺が一緒に行く。それからしばらくしたら今度は別々に鍛錬を行う。鱗滝が炭治郎、俺が野獣だ。俺と鱗滝が使う呼吸が違うし、お前らに合う呼吸も違うだろうからな。というわけで野獣、お前には俺が直々に、呼吸を教える。というわけで早速始めるぞ。返事イ！」

「はい！」

「オッスお願いまーす！」

こうして秋吉と鱗滝による、野獣と炭治郎への熱心な指導が始まった。

最初は山下りを繰り返す日々だった。あの霧で満ち隈が張り巡らされた狭霧山を下りるのだ。二人で協力しながら降りるうちに、隈を避けられるようになった。体力が向

上したのと、炭治郎が以前より罨の匂いを鋭く察知できるようになったこと、野獣が以前より罨に対処できるようになったからである。だがそれと同時に罨の難易度も上がっていった。無数の槍や矢が降りかかり、糞が塗られた竹槍でいっぱい、落とし穴に落ちそうになる。どう考えても二人を殺す気だ。

一定期間過ぎると今度は刀をもつて山を下る。邪魔で邪魔でしようがない。手ぶらの時と違い罨に引つ掛かるからだ。

行われた鍛錬は山下りだけではない。刀の素振りを毎日行うこともあった。山下りの後、腕がもげそうなほど素振りを行う。

鱗滝によれば、刀は折れやすいのだと言う。縦の力には強いが横の力には弱い。それ故、力をまつすぐに乗せ、刃の向きと力の方向が全く同じにならないようにしなければならない。その上、刀を破損つまり折ったりすれば野獣と炭治郎の骨も折って、刀でケツを掘ると脅された。

秋吉直々の指導はさらに過酷だった。

山下りや364364回の素振りに加え、秋吉による迫真空手の鍛錬メニューが加わるのだ。狭霧山の周囲を810回全力疾走する、1919回の筋トレ、114514回の正拳突き、893回の蹴りや931回の組手・・・

ある時は秋吉と鱗滝による受け身や組手の訓練が行われた。どんな体制になっても

受け身をとって素早く起き上がるための訓練だ。野獣も炭治郎も刀をもって二人を切るつもりで向かう。対する秋吉と鱗滝は素手の丸腰だが、馬鹿のように強く、何度もすぐに投げられ地面に転がった。

このように山下りや鱗滝による指導、秋吉による迫真空手の稽古など過酷な体力向上・技能習得のための鍛錬の日々が休みなく、毎日続いた。

・・・ただでさえ鱗滝による訓練だけでも苦しいのに、そこに秋吉による過酷な迫真空手の鍛錬メニューが加わるのである。それも、大学にいた時のように休みがあるわけではない。毎日、何セットも行うのである。炭治郎はもちろん、経験者である野獣さえも、何度も心が折れそうになった。ある時は野獣も炭治郎もキレて「こん・・・空手じゃないんだよ!」「育手だからってセクハラしていいと思ってるんですか!」と二人で一斉に秋吉を闇討ちしようとしたこともあったが、一転攻勢、「カスが効かねえんだよ(無敵)」と野獣も炭治郎もあつという間に返り討ちに合い、闇討ちの翌日はさらに訓練が厳しくなった。

鍛錬に打ち込む一方で、秋吉からこの世界に来た経緯を聞いた。あの日、秋吉が行方不明になった日、秋吉はいつものように山へ自主鍛錬しに行っていた。場所は狭霧山。

いつものように稽古に励んでいたら、不意にあたり深い霧が立ち込め、気付いたらこの時代のこの狭霧山にタイムスリップしていたという。そして山を下り、散策していたところで数体の鬼に襲われた。秋吉は迫真空手に対応したが、相手は不死身の鬼。首の骨を折っても、心臓をついてもなかなか死なない。その内体力が消耗し万事休すかと思われたが一転攻勢、殺せないのなら気絶させたらどうかと判断し秋吉は鬼共をあつという間に気絶させ、危機を乗り切った。そこへ鱗滝が駆け付け鬼にとどめを刺した。これが二人の出会いだったという。

やがて紆余曲折の末更に鍛錬を積んだ秋吉は選抜を経て鬼殺隊に入隊。しばらく活動した後、ある時「自分は教える方が性に合っている」と言って、鱗滝とともに育手として活動するようになり、今に至る、ということだった。

半年ぐらい経つと、今度は秋吉と野獣、鱗滝と炭治郎とに分かれ、その呼吸法と型を習った。秋吉いわく、自分と鱗滝とでは使う呼吸が違う、野獣には自分の使う呼吸法の方が合っているだろう、とのことだった。

この呼吸によって自身の身体能力を飛躍的に向上させ、鬼と対等に戦えるようにし、型によって刀を振るい、鬼と戦いその首を切り落とすのだ。

何度も腹に力が入っていない、吸う量が足りないと怒られ叩かれた。

呼吸の型には様々なものがあるが、秋吉の使う呼吸法は他の鬼殺隊士や育手の使うものとは大きく異なる、というより全く知られていなかったものとのことだった。

「俺の使う呼吸と型は迫真空手における呼吸法や鍛錬、技を応用したものだ。だから、普段から迫真空手の稽古をしているお前に一番合うと考えた」

「はえ〜……それにしても名前何なんすか?」

「そうだな……実をいうと、まだ無い。恥ずかしながら考えていなかった……だがそうだな……よし、野獣の呼吸と名付けよう。貪欲な獲物を狙う野獣のような眼光をしたお前に相応しい。ちょうどあだ名も野獣だしな」

「ありがとうナス!」

「それはそうと、まだ肺と腹筋に力が入ってねえぞ!そんなんじや虫も殺せねえぞ! オルルア!」

「ンアツ!イキスギイ!アーシニソ、イクイク……」

「ぬわあああああん疲れたもおおおおおん」

「チカレタ……」

ある日の小屋に鍛錬を終えた野獣と炭治郎の声が響く。どちらもその体は傷とあざだらけで、顔には疲労が満ちている。

「いやもうキツかったつすねー今日は」

「今日は本当疲れましたよー・・・」

「ねー今日鍛錬きつかったねー」

「ああもう今日は・・・すつげえキツかったゾ」

「何でこんなキツいんすかねえくもく・・・やめたくりますよー鍛錬」

「どうすつかなー俺もなー」

日ごろの鍛錬の苦しさや不満を吐露する二人。だがそこで野獣は不意に真剣な顔つきになる。

「・・・でも、やめるわけにはいかないってはっきり分かんたね。禰豆子や、みんなのためにも」

「・・・そうですね。俺も浩二さんもつと頑張つて、強くないと」

二人の目線の先には布団の中ですうすうと眠る禰豆子の姿がある。ここにきてから半年が経つが、禰豆子はずつと眠つたままだ。この半年の間、一度も起きることなく。見た目こそ変化していないが明らかに異常だ。医者を呼んで見せたこともあつた。異常はないとのことだったが、やはり眠り続けるのはおかしい。炭治郎は怖かつた。朝起

きたら死んでしまっているのではないかと考え、不安に襲われない日はなかった。

それは野獣も同じだった。

この時代にタイムスリップしてから半年以上経つ。行方不明だった秋吉に再会できたことはうれしい。しかし同時に、野獣は三浦や木村といった空手部の仲間や家族や友人たちのことが不安だった。今頃彼らはどうしているだろう。無事なのだろうか。自分と同じようにタイムスリップしたのだろうか。だとしたら今頃どこで何をしているのか、鬼に襲われていないだろうか……。とにかく不安で、寂しくて、悲しかった。

だが野獣は一人ではなかった。秋吉や鱗滝といった育手の存在はもちろん、炭治郎というこの世界で唯一無二と喋っている仲間だから。

「あつ、そうだ（唐突）、まずうちさあ……。噂で聞いたんだけど、この辺に、美味いラーメン屋の屋台、来てるらしいっすよ」

「ラーメン、ですか？」

「うん。この時代にはあんまりないのかな？食ったことない？」

「うーん、ないですねえ……。食べたことあるんですか？」

「ありますねえ！何度も食べたぜ、部活仲間とよお。この鍛錬と選抜乗り越えたら、食べに行かない？おごるからさ。絶対うまいぜ！」

「ああ、いいっすねえ……。ありがとナス！」



「じゃけん、必ず鍛錬と選抜乗り切りしましょうね……禰豆子と、みんなのためにももつと強くなって、守ることが出来るようになるためにも」

「……そうですね（揺るがぬ意志）」

野獸と炭治郎は何度も励まし合い支え合つて鍛錬の日々を送つた。

「野獸……もう俺から、教えることはない」

狭霧山に来てからちようど一年。野獸は秋吉に突然こう言われた。

「あとはお前次第だ。お前が俺の教えたことを我が物にし、昇華できているか。俺が直々に……試験を行う。それが出来たら最終選別に行くのを許可する」

そう言うのと、秋吉はおもむろに狐の面を取り出し顔につけた。

「……この面は特別な材質でできていてな。とても固く、お前の持つているその刀でないと斬ることが出来ない。もちろん簡単に斬ることもできない」

秋吉は刀を持つ野獸に向き直る。

「やる事は簡単だ。その刀で俺に切りかかつてこい。そして……この面を真つ二つに斬れ。誤つて俺の顔面や体を真つ二つにして死なせたら勿論、ちよつとした切り傷が俺にできて失格だ。俺を傷つけることなく、この面だけを正確に、真つ二つに斬るんだ」

「ええ……」

突然の指示に困惑する野獣。無理もない、突然恩師に向かって切りかかれと言われたのだから。

秋吉は平然とした様子で続ける。

「俺は毎日、同じ場所にいる。いつでもかかってこい。俺を誤って死なせたり傷をつけて失格にならない限り何度でも挑める。今、炭治郎も鱗滝の指示で最後の試験に取り掛かっている。どっちが先にやり遂げるか見ものだな……さあ、早くしろ！返事イ！」  
こうして最後の試験が始まった。

それ以降、秋吉は何もしやべらず、何も教えてくれなくなつた。

野獣は何度も秋吉に挑んだ。

鱗滝や秋吉に教わつたことを何度も繰り返した。

柔軟や体の動かし方など基礎的なことはもちろん、呼吸に至るまで……学んできたあらゆることを駆使して秋吉の面のみを斬らんと挑んだ。

だがその度に返り討ちにされ、地面に投げ飛ばされた。面をつけ視界や呼吸が制限されているはずなのに、秋吉の動きには全くスキがなく、繰り返し出される技の力は強力だった。真正面から、真上から、真横から、後ろから挑んでも、返り討ちにされ回し蹴りを食らい、ある時は組み伏せられある時は腕を組み伏せられ刀を一切振るえないまま地面

に打ち付けられた。ある時は骨を折られそうになり、ある時は一瞬で気絶させられた。

「そんなんじや虫も殺せねえぞ」

「カスが効かねえんだよ（無敵）」

「お前ら俺のおもちやでいいんだ上等だろ」

「屑どもが（至言）」

半年たつても面は切れず、秋吉に勝てなかった。野獣は焦った。鍛錬が足りないのだ、と。もつとやらねば、もつとやらねば。もつと強くならねばならない。守ることが出来るよう、もつと、もつと強くならねばならない。炭治郎や、禰豆子や、竈門家やみんなのためにも。野獣のような貪欲な意思だけが彼のボロボロの心身を支えていた。

そんな日々が何度も続いた。

鍛錬と勝負を続ける日々が続く中、ある日野獣は不意に心が折れそうになった。変わらぬ日々、報われぬ日々。どうでもいいという思いがどこかで生まれた。

思いつきり地面に大の字に寝転がる。

「・・・ダメみたいですね（諦め）」

ぼつりとつぶやく野獣。

目から涙が静かに流れ、やがて激しくなる。

炭治郎や禰豆子や竈門家のことはもちろん、タイムスリップ前の記憶や三浦や木村と

いった仲間たちのことを思い浮かべ、心がいっぱいになる。

「諦めちゃダメなのに……やらなくちゃいけないのに……涙が、で、出ますよ……」  
そつと目を閉じ、しばらくの間涙を流していると。

「……泣いてるの？大丈夫？」

不意に、傍らから声があった。少女の声だった。

「……ファツ!?だ、誰だ……？」

思わず起き上がると傍らには見知らぬ少女が座り込んで野獣の顔を覗き込んでいた。花柄の着物に頭には花模様の狐面がつけられている。腰には道着の黒帯がつけられている。身長は炭治郎より低そうだ。肩まである黒髪、年は十代前半から半ばぐらいか。数年もすれば間違いなく美人に育ちそうな、かわいらしい少女だった。それがじつと野獣のことを見ていた。

その少女は真菰と名乗った。名前だけ名乗り、それ以外はあまり話さなかった彼女だったが、彼女は野獣の思いを感じ取ったのか、私が見てあげる、きつと強くなれるよ、と言った。

それ以来、真菰は野獣の鍛錬に付き合うようになった。悪いことがあれば指摘し直し

てくれた。無駄な動きや癖がついているところを直してくれる。なぜそうしているのか、どこから来たのか聞いても教えてくれなかった。不思議な少女だった。

一方で、炭治郎が錆兎という少年とともに鍛錬し、試験に挑んでいることを教えてくれた。

「全集中の呼吸はね、体中の血の巡りと心臓の鼓動を速くするの。そしたらすぐく体温が上がって、人間のまま鬼のように強くなれるの。とにかく肺を大きくすること、血の中にたくさん空気を取り込んで血がびっくりした時、骨と筋肉が慌てて熱くなつて強くなる」

「すんげえフワフワしてんな……どうやってたらできるんだ？」

「うーん……死ぬほど鍛える。結局それ以外に出来ることはないと思うよ」

「ええ……(困惑)」

「当たり前だよねえ？」

「ですよねえ……」

言うことがふわふわしている不思議な少女だった。が、彼女がついてくれるように、野獣は少しばかり、持ち直し、やがて少しずつ再び立ち上がるようになった。

(……あんなかわいい子が見ている、女の子の前で恥ずかしい真似はできないってそれ一番言われてるから……それに、おれにはやらなきゃいけないことがある。何よ

り……俺は一人じゃない。炭治郎、三浦、木村、秋吉師匠……みんな。見てくれよな。俺、必ずやるから」

たまに真菰が自分のことを少し話すこともあった。

なんでも彼女はもともと孤児だったが、それを秋吉が拾い、鱗滝と共に育て鍛錬をしたらしい。

「子供たちは他にもまだいるよ。いつも浩二や炭治郎を見ているよ」

「あの人……秋吉さん、とても厳しい人だったけど、とても優しくかった。私たち、秋吉さんのことも、鱗滝さんのことも大好きなんだ」

「この黒帯、秋吉さんにお守り代わりにもらったの。このお面は鱗滝さんに」  
鍛錬が続いた。

体がちぎれそうなほど、内臓が破れ破裂しそうなほど、鍛錬をした。

半年が経った。

狭霧山に来てからちょうど二年がたった。

その日も、いつも通り、いつもの場所に秋吉は面をつけて立っていた。

「……ようやく、漢の顔になったな、野獣」

「……今日は、負けませんよ」

そう言つて、野獣は刀を構えた。真正面からの勝負は単純だ。より速く、より強い方

が勝つ。

その日、野獣は真正面から秋吉に向け、ただ一心に突撃し、刀を振った。

勝負は一瞬で決まった。

その日初めて、野獣の刀の刃が、秋吉の面に触れた。

永遠にも思える沈黙が一瞬流れる。

パカリと綺麗に面が割れ、秋吉の顔が露わになる。そこに傷は一つもなかった。

野獣は勝ったのだ。

「……強くなつたな、野獣」

野獣が勝った時、秋吉はこれまで見せたことのないような満面の笑顔を見せそう言った。その目には嬉しさと、安心と、満足、それから少しばかりの寂しさがあった。

野獣が勝利の報告を真菰にした。

「おめでとう。勝つてね、浩二。アイツにも」

そう言うのと真菰は霧に包まれたかと思うと、いつの間にか消えていた。

数日後、野獣と炭治郎、秋吉と鱗滝の四人が久しぶりに集まっていた。

今日は最終選別の日だ。禰豆子は眠り続けており、秋吉達に預かってもらうことに

なった。

「・・・お前を最終選別に行かせるつもりはなかった。もう、子供が死ぬのを見たくなかったからだ。お前にあの岩は切れないと思っていたが・・・よく頑張った。炭治郎、お前は凄い子だ」

「野獸、炭治郎。お前なら必ず最終選別を生きて帰れると信じている。・・・いや、必ず生きて帰れ。俺も鱗滝も、妹も、此処で待っている。・・・命令だぞ、いいな！必ず生きて帰ってこい！返事イ！」

「はい！」

「それからこれをつけておけ。餓別だ」

そう言つて鱗滝と秋吉はそれぞれ狐の面と、黒帯を野獸と炭治郎につけさせた。鱗滝と秋吉いわくお守り代わり、厄除けとのことで悪いことから守ってくれるとのことだった。

「それじゃあ、鱗滝さん、秋吉さん、行つてきます！禰豆子のことよろしく頼みます！あつそれから、錆兎と真菰によろしく！」

「あつ俺からも真菰によろしく伝えてくれよな〜頼むよ〜・・・それじゃあ、行つてきますす！」

炭治郎と野獸はそう言つて狭霧山を後にし、最終選別へと向かつていった。



後には鱗滝と秋吉だけが残った。

二人の姿が見えなくなつた後、鱗滝はぼつりとつぶやいた。

「……炭治郎、浩二……なぜ、お前たちが……死んだあの子たちの名を知っている……？」

「ああ……野獸……なぜ……あいつのことを？」

その問いに答えるものは誰もいなかった。

## 第7話 空手部再会の裏技

数時間の道のりを経て、野獸と炭治郎は鬼殺隊の最終選別が行われる藤襲山に着いた。すでに夜になり、あたりを月明りと星の光だけが照らしている。麓に辿り着くと野獸は山を指差した。

「ハハハハ」

「はえ、すつこい大きい…あ、見てください浩二さん」

山の大きさと広さに感嘆する炭治郎があることに気が付く。

「藤の花がこんなに…こんな季節じゃないのに」

「そう…（無関心）」

麓には山を囲むようにして大量の藤の花が咲き乱れていた。しかも季節外れの光景であり、尋常な量ではなく、むしろ狂い咲いていると言うべきかもしれない。

炭治郎がそのあり得ない光景に驚く一方、野獸はあんまり興味なさそうだった。比較的自然と近い大正時代の人間と、あんまり詳しくない現代人の差というやつだろう。

山の階段を上ると広場があり、何十人もの少年少女が集まっていた（もちろん少年の方が多）。全員が最終選別のために集まったことは明らかだった。その中央には日本

人形のような見た目の、着物におかっぱの少女が二人いた。どちらも頭の片方に花飾りをつけており、一人は白い髪、一人は黒髪だった。

二人は確認するようにあたりを見渡すと、やがて交互に口を開いた。

「皆様、今宵は最終選別にお集まりくださってありがとうございます。この藤襲山には鬼殺の剣士様方が生け捕りにした鬼が閉じ込めてあり、外に出ることはできません」  
「山の麓から中腹にかけて鬼共の嫌う藤の花が一年中狂い咲いているからでございます」

「しかしここから先には藤の花は咲ておりませんから鬼共がおります。…この中で七日間生き抜く」

「それが最終選別の合格条件でございます」

「では行つてらっしゃいませ」

二人が深々と例をすると同時に、続々と少年少女が門をくぐり山の中へ入っていく。最終選別が始まったのだ。この中には大量の鬼が潜んでいる。この中に野獣と炭治郎も入り、生き延びねばならないのだ。果たして何人が生き残れるだろうか、野獣と炭治郎は生き残れるのだろうか。だがこの試練を乗り越えねば鬼殺隊には入れないし、禰豆子を助け、仇を討つ機会は永久に失われるのだ。

「…行こう、炭治郎」

「はい、浩二さん」

二人は頷き合うと、共に門をくぐり山の中へと入っていった。

山の中を歩く野獣と炭治郎。夜目を凝らし、いつでも日輪刀を構えられるよう周囲を警戒しながら進んでいく。野獣が炭治郎に話しかける。

「山に入ったはいいいけど…鬼がうじゃうじゃいるんだよな。炭治郎、おいでどこに鬼がいるか大体分らないか？」

「うーん…難しいですね。藤の花の匂いがしなくなったら急に鬼の匂いが漂ってきたんですが…四方八方から漂ってきているから正直特定しづらいです…これもう分らないですね…」

野獣の問いに首を横に振る炭治郎。

感情さえも嗅ぎ分ける炭治郎の嗅覚をもってしても分かりづらい、ということはこの広大な山の中に大量の鬼がひしめき合っているということなのだろう。

「とにかく二人で警戒しながら進むしかなさそうだな…」

「ですね…」

「ア、oooooooooo!! (汚い高音) ンア、oooooooooo!! (クツソ汚い高音)」

「!？」

「フアツ!？」

二人が話し合っていると、突然どこからか凄まじい、クツソ汚い叫び声が響いてきた。声のした方角を見ると、二人の人間がこちらに向かつて走ってきている。一人は少年のようで、一人は青年のようだった。更によく見ると、二人を追うようにして鬼が二人走っている。

「来ないでエ! やめてーッ! やめてくれよおーッ!! (絶望)」

「なんで逃げる必要なんかあるんですか! 一緒に戦おうって言ってるのに!」

「いやあーッ! 死ぬ死ぬ死ぬッ! 俺弱いから戦っても絶対死ぬって! それより守つてよナオキさあーッ!」

「ええ… (困惑)」

叫ぶ少年に対し叱咤激励するように青年が話しかける。

そうしている間にも後ろの鬼たちがさらに凄まじい速度で二人を追ってくる。長い期間閉じ込められ何も喰えず相当空腹だったのだろう。どちらの鬼も目が尋常でないほど血走り、よだれをこれでもかと垂らしている。

「久方ぶりの人肉だ!」

「逃げんじゃねーよ!」

いずれにせよこのままでは二人の命が危ない。そして野獣も炭治郎も危険な目に遭っている人間をそうやすやすと放っておけるような人間ではなかった。

気付けば野獣も炭治郎もその場から駆け出していた。呼吸法により凄まじい速度で駆け寄り、鬼の前に躍り出、日輪刀の鯉口を切る。口から呼吸の音が漏れる。

「ヒュウウウウ…ッ！」

「ヌウン、ヘッ、ヘッ、ハア、アッ、アッ、アッ…ッ！」

水の呼吸、壺ノ型、水面斬り——

野獣の呼吸、壺ノ型、淫夢之一太刀——

瞬間、二人から横合いの斬撃が同時に繰り出され、同時に二人の鬼の首をそれぞれに斬り落とした。

首を切り落とされた瞬間、鬼の体は力がなくなつたようにガクンと崩れ落ち、やがてあつという間に首も体もボロボロに崩れ後には鬼が身に着けていた服だけが残された。日輪刀で首を切り落とすと骨も残らずに消え去るのか——

知識として知ってはいても、初めて直に見るとその光景はどこか哀れにも思えた。手を合わせ成仏を祈ると、野獣と炭治郎は振り返った。

「二人とも、大丈夫ですか…わっ!？」

「おっ、大丈夫か？大丈夫か？…!？」

振り返り、助けた少年と青年の様子を見た瞬間、二人は驚愕した。炭治郎が驚いたのは突然、少年が炭治郎に泣きながら抱き着いたからである。

「ありがとう、助かったよおう、この恩は忘れないよ〜っ!」

抱き着いた少年は涙と鼻水をぼろぼろに流し、炭治郎の服で拭き取らんとする勢いだ。見れば少年の髪は染めてでもいるのか立派な金髪だった。その髪型はまるでタンポポを思わせる。一方の野獣が驚いたのは、青年の顔が明らかに見覚えのある、というか顔見知りの顔だったからである。短髪に整った顔立ち。青年の方も覚えがあるのか野獣の顔を見て驚きに染まっていた。野獣は青年のことをよく知っていた。なぜなら、その顔は彼にとっては今は行方知れずの仲間であり、後輩だったからだ。野獣はその名を呟く。

「…木村? 木村なのか…?」

「そういうあなたは…まさか、田所さん…野獣先輩ですか!」

青年…否、野獣の後輩、迫真空手部の部員木村ナオキも驚いた顔で野獣の名を叫ぶ。そう、彼こそは間違いなく野獣の後輩であり、タイムスリップしてから行方知れずになつていた仲間、木村ナオキだった。

野獣とその後輩は思わぬ形で再開することになったのだった。

しばらくして四人は焚火を囲むようにして座っていた。いったん状況を把握すると、このまま歩き回っても仕方ないからとりあえずいったん暖を取って休息しようとなったからである。

「じゃあ、先輩も僕と同じように育手のところで修行してたつてことですか？」  
未だ再会の驚きと喜びが覚めない木村が野獣に話しかける。

「うん。しかも、行方不明になっていた秋吉師匠も一緒にいてさ。いやもうキツかつたつすねー鍛錬…」

「えっ、秋吉師匠もいたんですか!？」

「おう、俺や木村と同じようにタイムスリップして、色々あつて鬼殺隊に入ったらしい。とにかく無事で良かったよ…鍛錬はきつかったけどな。師匠は変わらず師匠だったよ…」

「良かった…無事だったんですね…僕も早く会いたいです」

「えっと…二人はお知合いなんですか？」

笑顔で話し合う野獣と木村に炭治郎が話しかける。

木村が頷いた。

「はい。僕と田所さんは大学の迫真空手部の後輩と先輩の関係で。同じようにこの時



代にタイムスリップしていたところを育手のお爺さんに拾われたんです。で、この子が僕と一緒に拾われた我妻善逸君です」

「どうも……」

金髪の少年、我妻善逸が軽く頭を下げた。

それから木村は自分の身の上やタイムスリップのこと、ここに至るまでのいきさつを説明した。

迫真空手の稽古が終わり野獣たちとくつろいでいたところ、突然黒塗りの高級車が突っ込んできて気付いたら大正時代にタイムスリップしていたこと。行く当ても頼れるところや人もなく、途方に暮れていたところを、育手の老人に善逸と一緒に拾われたこと。ほかに行く当てもなく、生活の糧を得るためと拾ってくれた恩を返すために鬼殺隊に入ることにしたこと。厳しい鍛錬の日々、そして今日の最終選別へと至ったこと。

「本当に大変だったんですよ……鍛錬は厳しかったし、最終選別に行くときなんか、善逸君、行くのを嫌がってビンタされまくって……ここまで連れて行くのが大変でしたよ」

「いやだって、俺もの凄く弱いんだぜ！舐めるなよ、俺はとにかく弱いんだ、この選抜で死ぬ運命なんだ、絶対死ぬ！でなきや俺のこと守ってくれよお、ナオキさん、みんな」

「ええ……（困惑）」

善逸の臆病ぶりに困惑するばかりの木村。野獣が顎をさすりながら口を開く。

「まあ、とにかく…木村も秋吉も無事で良かったよ…てことは三浦もこの時代にタイムスリップしてんのかな？木村、何か知らないか？」

「うーん、分からないですね。僕たちだけタイムスリップしたとは考えにくいけど…三浦先輩もこの時代に来て、鬼殺隊に入ろうとしているとは限らないし…今は無事を祈るしかないですね」

「カンノミホ…」

野獣と木村は互いの再会を喜ぶ一方で、もう一人の存在のことも思い浮かべていた。三浦智将（ともまさ）、逼真空手部員の一人にして野獣と木村の先輩である。あの日タイムスリップして以来、三浦とも別れ行方知れずになっていた。野獣や木村、秋吉もこの時代にタイムスリップした以上、あの日一緒にいた三浦もこの時代にタイムスリップしている可能性はあるが、果たして三浦は今頃どうしているのだろうか。木村と野獣が無事に再開し、秋吉の安否がわかった一方で、三浦はまだ行方知れずだ。果たして無事なのだろうか。

野獣と木村が未だ行方知れずの天然の先輩のことを思い浮かべる中、不意に炭治郎が鼻を引くつかせ、善逸が耳を澄ませた。

「…匂いが近づいてる…でも鬼じゃない」

「なつ、なんか、誰か来てる…今度はなんだよう…」

「先輩…」

「ああ」

何者かの接近を告げる二人の様子に野獣も木村も刀を手に取り構える。

やがて草木をかき分ける音と何者かの気配を野獣と木村も感じ取る。

やがて気配と音は大きくなり、一人の人間が姿を現した。

その姿を見て野獣も木村も一瞬動きをとめ、やがて顔に驚きの表情を浮かべる。

坊主頭に薄いひげ、がっしりした体躯。どこか抜けていそうな顔。その人間は二人の知っている人物であり、まさに二人がちょうど話題にしていた人物だった。

「み、三浦先輩!」

噂をすれば影とはこのことか。今まさに野獣と木村がその身を案じていた先輩の姿がそこにあつた。まさか思い浮かべていたちょうどその時姿を現すとは。

「…何だか煙い匂いがすると思つてきてみたら…野獣に木村じゃないか。…なんでこんなところにいるんだ?」

驚きを隠せない二人に対し、当の本人、三浦はのんびりとしたどこか抜けた様子でそう答えるのだった。

火を囲む人数が五人に増え、その場は少し騒がしくなっていた。それも当然だろう、あの日突然離れ離れになり行方知れずになっていた三人がこうして思わぬ形で再開し集まったのだから。

野獣も木村も、そして三浦も、三人の顔には喜びが浮かんでいる。

「いや〜まさかこんなところで皆と再会できるとは思わなかったゾ〜、とにかくみんな無事なようで本当に嬉しいんだゾ」

「俺もまさか三浦先輩とこんなところで会うとは思わなかったつすよ…噂をすれば影って、はつきり分かんだね」

「田所さんも、三浦先輩も無事で何よりです…やっばり、こうして三人で集まると落ち着きますね!」

「そりやお前、俺たち迫真空手部は三人で一つって、それ一番言われてるから。でも三浦何でこんなところにいるんですか?」

「それを説明すると少し長くなるんだゾ…」

野獣の問いに三浦は頷きこれまでのいきさつを話し始めた。ある日部室に突然黒塗りの高級車が突っ込んで、直後、気付けば三浦は見知らぬ山の中にいたこと。彷徨っているうちに、突然猪の被り物をした少年と出会い、格闘の末、仲間になったこと。こ

こが大正時代であることを知ったこと。それから鬼殺隊士と出会い、襲撃・力比べ（意味深）の末、鬼殺隊や鬼などについていろいろ聞きだし、少年と共に鬼殺隊に入ることを決めたこと。育手を介さない鍛錬の末、この選別へやってきたこと。

「伊之助の奴、ここに着くなり『伊之助様のお通りだ』とか『俺の踏み台になれ』とか言つて真つ先に山に突っ込んでいったんだぞ、せつかちで困るんだゾ…おかげで気付いたらはぐれてしまったんだゾ」

「猪の被り物にせつかちつて…もしかしてあいつと知り合いなのか!？」

三浦の言葉に善逸が驚いた表情をする。

「知ってるのか、善逸?」

「俺たちが麓に集まる前に真つ先にやってきて真つ先に入山した、せつかち野郎がいんだ…猪の被り物をした。まさか知り合いだったなんて…」

炭治郎と善逸がそう話し合う一方で、野獸が改めて感心したような様子で頷く。

「それにしても育手を介さずに自己練でここまでくるなんて、さすがつすね三浦…」

「いやあくすつげえキツかったゾ、でもあのまま伊之助と山の中にこもっているよりは鬼殺隊に入って安定した生活を求める方が良いと思つたんだゾ。あの時思い切つて伊之助と一緒にあの鬼殺隊士を襲つて正解だったんだゾ、二人で一緒に刀を奪つてそれから色々ぶち込んでやったぜ（意味深）」

「思い切つて襲うなんて、三浦さすがつすね、その行動力…俺も見習いてえなあ…俺も水泳部の後輩の遠野を襲おうと睡眠薬も用意したんですけど、結局出来なかつたんだよなあ…」

「いやいや、睡眠薬を準備するなんて、さすがは野獣だぞ、野獣の準備と根回しの良さを俺も見習いたいんだゾ」

「ええ…（困惑）二人して何言つてるんですか…」

「この人たち頭おかしい（ドン引き）」

「浩二さん、何人襲おうとしていたんですか!? まずいですよ!」

人間の屑のごとき言動を見せる野獣と三浦に対しドン引きし、突っ込みをする木村と善逸、そして炭治郎。

それから木村が再び口を開く。

「それで、再会したはいいいけれど…とりあえずこれからどうしましょうか? 僕らは最終選別としてこの山を七日間生き延びなきゃいけないわけですけど」

野獣が顎をさすりながら考え込む。

「ですよねえ…。とりあえずずつとここに居座るわけにはいかないし。とりあえず皆で行動しませんか? 人数が多ければその分戦力も高くなるし、何かあつてもカバーし合えると思うんですけど」

「そうですね。ここで会ったのも何かの縁でしょうし。みんなといた方が心強いですよね」

野獣の言葉にうなづく炭治郎。

「じゃあ俺、みんなに守ってもらうことにするから…」

「は？（威圧）舐めてんじゃねえぞ、男のくせによお、少しは戦おうって気概はねえのか」

「うわあ、許してください、何でもしますから！」

善逸の言葉に木村がどすを聞かせた声で叱咤する。この木村という男は普段は落ちていた常識人だが怒らせると恐ろしく怖いのだ。

「それで、とりあえず移動しますか？七日間ここにいる以上、水とか食べ物とか必要になるでしょうし…とりあえず、川辺とか、水のある所に行きませんか？水を確保しやすいように」

「あつ、そうだ（唐突）、水辺といえはさつき水の…川みたいな匂いがしたんです。この辺にいい、ちよつとした川があるみたいですよ。とりあえず行きませんか？行きましょうよ」

野獣と炭治郎の提案に対し、三浦が待ったをかける。

「あつ、おい、待てい（江戸っ子）。水辺に行くのはむしろ危険だと思っただぞ、水の

確保は確かに重要だけど、たぶん鬼達もそれを考えて、待ち伏せしているかもしれないんだゾ、それに雨が降って水量が増えて氾濫したら危険なんだゾ」

「んにゃび…確かにそうっすね…」

三浦的的を得た反論に頷く野獣たち。普段は天然で抜けたところのある三浦だが、このように時折非常に鋭いところも見せるのである。

そんな風に五人が話し合っていると、突然炭治郎が顔をしかめ鼻を抑えた。善逸も耳を抑えおびえた表情を見せる。

「っ!?!何だ、このひどく腐ったような匂いは…」

「ひゃーッ!?!死ぬ死ぬ死ぬ!死んでしまっ!?!こんな不気味な音初めてだあーっ!」

明らかに尋常ではない様子。野獣も、他の者も、尋常ではないものの気配を感じ刀を構え、警戒する。この気配は、もしや――

気配の正体はすぐに表れた。

ズル、ズルリ、ボコボコと。

木々の間から何かが現れる。

姿が明らかになる。

それは一言でいえば、異形だった。

横幅高さともに何メートルもある巨大な体躯。そのあちこちから太い腕が何本、何十



本も生え、その巨大な体軀を守るように巻き付いている。その頭部には、腕や手の間から巨大な二つの血走った目が覗いている。その瞳は裂けている。その姿、その気配、明らかに人間ではない。明らかにそれは、巨大な、異形の鬼だった。

「フアッ!?!」

「ポツチャマ」

「やめてくれよ…(絶望)」

今まで対峙してきた鬼とは明らかに違うその異形の姿に思わず慄く。緊張と恐怖が五人の間に漂う。

異形の鬼の目玉がぎよろりとこちらを捉える。さも嬉しそうに、たつぷりの弱い獲物を前にした獣のように、おぞましい声で言った。

「また俺に食われに来たな…鬼狩りのガキども」

再会の喜びは一転、早速試練が空手部と少年達に降りかかったのだった。

## 第8話 空手部連携の裏技

先ほどとは一転して、緊迫した空気が漂っていた。

野獸たちの目の前にいる、無数の手や腕に覆われた巨大な異形の鬼——仮にその特徴から手鬼と名付けるとして——は今まで見てきたり対峙してきた鬼とは見た目はもちろんまとう空気も違っていた。

これは間違いなく、強い。やばい。

ここにいる全員がそう認識していた。

手鬼が再び口を開く。

「ガキ共、今は明治何年だ？」

「!?!?!今は大正時代だ」

不意に年代を聞かれ戸惑いながらも炭治郎がそう答えた瞬間、手鬼の様子が一変した。

「アアアアア！年号がア!!年号が変わっている!!」

巨大な体を大きく震わせながら叫ぶ手鬼。その声色には明らかな怒気が含まれていた。

「まただ！俺がこんな所に閉じ込められている間に！許さん！許さあああん！！鱗滝め・・・鱗滝め、鱗滝めえええ！！」

「どうして鱗滝さんの名前を・・・」

何故か師匠の名を叫ぶ手鬼は炭治郎の疑問に答えるようにさらに叫んだ。

「知っているさ！！俺を捕まえたのは鱗滝だからな。忘れもしない四十七年間・・・あいつがまだ鬼狩りをしていた頃だ！江戸時代・・・慶応の頃だった！！」

手鬼のその言葉は彼がはるか昔に捕らえられ、この藤襲山に閉じ込められ何十年もの間生き永らえていた事実を示すものだった。

その事実信じられないといった様子で善逸が叫ぶ。

「そんな、嘘だろ!? そ、そんなに長く生きている鬼がこの山にいるはずがないだろお！！」

「そうなのか善逸!?!」

野獣の言葉に今度は木村が答える。

「はい、僕らの育手のおじいさんが言っていました！最終選別には人間を二、三人食べた鬼しか入っていない、その間選別で斬られるか共食いするかして長く生きることはないって・・・」

「でも俺はずっと生き残ってる、この藤の花の牢獄で。五十人は喰ったなあ、ガキ共

を」

食べた人数が五十人。

その事実には野獣や炭治郎をはじめ、その場にいた全員が戦慄する。人数が尋常でないこともそうだがもう一つ、それはその手鬼がどれほど強いのかを示しているからだ。

『覚えておけ、基本的に鬼の強さは人を喰った数だ。力は増し、肉体を変化させ妖しき術を使うものも出てくる。お前ももつと鼻が利くようになれば鬼が何人喰ったか分かるだろう』

鱗滝の言った言葉を思い出す。鬼は人を喰った数が大きければ大きいほどその分強くなるのだ。

「どれ狐の面をつけた奴は、一、二、…二人か。てことはお前たちで十五になるな」  
「!?何の話だ」

鱗滝からもらった狐の面をつけた野獣と炭治郎を指差す手鬼。突然指を刺され、その言動に疑問を抱く野獣と炭治郎に手鬼は薄気味悪く笑いながら言った。

「俺が喰った鱗滝の弟子の数だよ。あいつの弟子はみんな殺してやるって決めてるんだ。…そうだなあ、特に印象に残っているのは二人だな。あの二人…珍しい髪色のガキだったな。一番強かった。宍色の髪をしていて、口に傷があった。もう一人は花柄の着物で女のガキだった。小さいし力もなかったが、すばしこかった」

花柄の着物の少女。野獣は覚えがあつた。秋吉との最後の鍛錬、心が折れかかつたと  
き不意に現れた真菰と名乗つた少女。不思議な雰囲気をまとい、自分を励まし、時には  
丁寧な教え、支えてくれた少女。

だが手鬼の言葉は真菰がこの手鬼に食い殺されたことを示すものだった。

もしそれが事実なら、あの真菰という少女は何だつたのだろうか？しかし自分は確かに彼女といいた。

手鬼は続ける。

「目印なんだよ。その狐の面がな。鱗滝が彫つた面の木目を俺は覚えている。あいつがつけてた天狗の面と同じ掘り方。厄除けの面とか言っていたが、それをつけてるせいで皆喰われた。鱗滝が殺したようなもんだ」

そう言つてさらに嘲笑の色を強める手鬼。野獣と炭治郎の体が昂る。

「フフフ……これを言ったとき、女のガキは泣いて怒つてたなあ。フヒヒヒ、そのあとすぐに動きがガタガタになったから、手足を引きちぎつてそれから——」

瞬間、野獣と炭治郎は同時に手鬼に向かつて突撃していた。二人は怒りに支配されていた。恩人を、弄ぶように喰い殺されたことへの怒りが二人を昂らせ、突発的な行動に移らせた。

無数の腕が野獣と炭治郎に迫る。

それらを次々とぶつ切りにしていく。

だが迫る腕の数と再生の速さがそれを上回る。

横合いから腕が勢い良く迫り、二人をそれぞれ殴り飛ばす。

吹っ飛んだ二人はそれぞれ木にぶつかり炭治郎は失神し、野獣も意識が遠のきかける。

「ウーン、アーイキソ・・・」

まずはお前からとばかりに手鬼の腕が勢い良く野獣に迫る。

「先輩！」

「野獣！」

「うわあ！」

仲間の危機に木村や三浦、善逸がそれぞれ動き出したり悲鳴を上げたその時――

「猪突猛進！猪突猛進！！」

不意に誰のものでも、もちろん手鬼のものでもない声がどこからか響いてきた。

善逸が耳を抑える。

「また音が！今度は何だよお！」

ガサガサガサツ!!と草木を乱暴にかき分け音がしたと思つた次の瞬間。草木の間から何者かの姿が勢いよく飛び出てきた。

それは何とも奇妙な姿をしていた。

猪の被り物をした、上半身裸の人間。その肉体は鍛え上げられ、両手に日輪刀を携えている。

突然の出来事に手鬼の動きが一瞬鈍る。

その隙を突くかのように猪男は突っ込み、野獣に迫っていた腕を切り落とした。

猪男が叫ぶ。

「さあ、化け物!! 屍を晒して、俺がより強くなるための、より高みに行くための踏み台となれえ!!」

「なんだこの猪男!?!」

寸前で手鬼の腕から逃れた野獣が立ち上がりながら叫んだ。この奇妙ないでたちの闖入者は誰だ?

その姿を見た善逸と三浦があっ、と思わず漏らした。その顔には驚きと、既視感がある。二人はこの猪男のことを知っているようだった。

「そう、あいつだよ! 俺たちが集まる前に誰よりも早く入山してきたせつかち男だ!」  
「伊之助、そんなところにいたのか! 探してたんだゾ! 勝手にいなくなるなんてひどいんだゾ!」

「知ってるんですか、あの猪男のこと!?!... そういえば知り合いだとか言っていました

ね」

三浦の言葉に驚く木村だったが、三浦がこの世界にタイムスリップした時、伊之助という少年と知り合いになったと言っていたことを思い出す。

三浦の声に猪男もとい伊之助も反応しこちらを向く。

「あ、兄弟！そんなところにいたのか！すまねえ、でもこいつ面白いぜ！手がウジャウジャしてやがる！面白いぜえ！」

そういうと伊之助は再び手鬼に向かって突進する。

「あ、そのまま突撃したらまずいんだぞ！！」

三浦も手鬼に向かって駆け出す。

伊之助は四方八方から迫る腕を切り落としていくがやはり野獣と炭治郎の時と同じように、横合いから殴り飛ばされ、伊之助を庇おうとした三浦も同様に殴り飛ばされる。投げ飛ばされた三浦は短時間宙を舞いそのまま近くの鬼に頭をぶつけた。

「このクソガキどもめ、まずは見るからに池沼のお前からだ！」

うつ伏せに倒れ込む三浦に手鬼の腕が迫る。

手鬼の腕が三浦を握りつぶそうとしたその瞬間——その手がちぎれ落ちた。

「たか。」

突然の出来事に間拔けたような声を出す手鬼。



ちぎれた手がぼとりと地面に落ちる。その腕の断面は刃物で切られたようなものではなく、何か別のものでもちぎり取られたように荒々しかった。

「・・・蹴り落とされた？」

「そうだよ」

手鬼が眼前を向くと、目の前には先ほど自分が掴もうとした三浦が立っていた。掴まれる直前、勢いよく体を回して起こし、その手を蹴り飛ばしたのだ。

眼前に立つ三浦は、しかし先程とは全く違う様子を身にとっていた。

「・・・兄弟が、本気になりやがった」

その様子を見てぼつりとつぶやく伊之助。

ついさっきまでの三浦は天然で、どこか抜けたような顔と雰囲気だった。

だが、今の三浦の顔は凜とした顔つきで、その目には闘志と怒りが宿っている。姿勢はまったくで全く隙がない。

その場にいる全員が悟った。これは、戦士の姿だと。

「み、三浦さん・・・これは・・・？匂いがさつきと全く違う・・・まるで別人だ・・・」  
失神から起き上がった炭治郎が三浦を見て呟く。善逸も失神していなければ、音が別人だ、といったことだろう。

「み、MUR閣下だ・・・」

炭治郎を起こしながら野獣が呟く。

「知っているんですか？」

「ああ、さつきも言ったけど三浦は俺達迫真空手部の先輩なんだ。普段はさつきみたいに抜けてて天然で、ひどいときには池沼扱いされることもあるけど……」

野獣の言葉を木村が継ぐ。

「二度何かきかつけがあつたら、あんなふうにも別人みたいに豹変するんです。覚醒といつた方が良いかもしれない。まるで歴戦の格闘家、戦士のように……それを僕らは『MUR閣下』って呼んでるんです。あの状態になったら恐ろしく強くて、敵わない。僕達一度も……あの状態の三浦先輩に勝つたことはありません」

今までと全く違う、彼がまとうその空気に、手鬼が一瞬たじろぐ。

三浦が口を開いた。

「……今までの話を聞くに、貴様、何の罪もない少年少女を何十人も喰い殺したようだな。それも散々弄んだうで。……許せん、俺が喝を、入れてやる。俺が直々に……正義の鉄槌を下す」

ゆつくりと構えをとる。

「……迫真空手の強さ、見たけりや見せてやるよ」

直後、三浦が飛んだ。

跳躍した三浦に手鬼が再び無数の腕を向ける。だが――

便乗の呼吸、式ノ型、双打『陽』――

その目に捉えられない速さで次々と拳を打ち出す。乱打しているようで、その一つ一つは非常に正確で強烈だった。正確に向かつてくる腕や手を捉え、拳で打ち返し、時には大きく損傷させる。

三浦の動きをかくぐり、再生したのも含めさらに手鬼の腕が迫る。だが――

便乗の呼吸、参の型、双打『夜』――

手鬼の腕が三浦を捉えるより遥かに素早く三浦の脚が動き、次々と打ち返す。

三浦の動きは先程までのそれより遥かに速く、正確で華麗だった。

素早く、一斉に相手の複雑な動きを把握し、正確に、そして相手の動きに便乗するよ  
うに流れに乗り、手鬼の攻撃を次々とその拳と脚で打ち返していく。

飛んできた腕の一本を両手でがしつと掴み、手鬼を睨む。

「調子に乗りやがって……貴様死にてえのか！ いったいどれだけの罪を犯したか分かるか？ 人間の屑がこの野郎……」

「お、俺は鬼で」

「この畜生目がア！」

「グアアアッ!？」

一気に捻り、三浦が手鬼の腕を引きちぎる。

三浦の攻撃がさらに苛烈なものになる。だがまだ完全な決定打にはなっていない。戦いの様子を見ながら木村が言った。

「先輩……これはチャンスです！僕たちが奴の目を潰します！先輩はその隙に奴の首を！」

「分かった、頼んだぞ木村！」

「オッス、お願いしまーす！」

頷き駆け出す野獣と木村。

木村は傍らの善逸に向き直る。恐怖と混乱と責任感で彼は失神寸前だった。

「善逸君……ごめん！」

「え？フアツ!?ウーン……」

素早く善逸の胸を突き気絶させる木村。

意識を失った善逸はそのまま地面に崩れ落ちる……ことはなかった。

次の瞬間、善逸は刀に手をかけ、その鯉口を切り、居合の構えをとっていた。シイツとその口から呼吸音が漏れる。

気絶しているはずの善逸の明らかな臨戦態勢を見て木村が頷く。

「よし……奴の目を狙い撃ちにしましょう！僕が右目をやるから善逸君は左目をお願い

いします！」

コクリと頷く善逸。木村も日輪刀を構え、突きの体勢をとる。

それぞれの口から呼吸音が漏れる。

雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃——

痴呆の呼吸、壱ノ型、夜瞳照昏世（やめてくれよ）——

瞬間、木村と善逸は手鬼めがけてまつすぐ、突つ込んでいた。その速度はまさに神速。目にも留まらぬどころか、音速を超えているのではと思うほどの速さ。二人が突つ込むのとほぼ同時に、二人の刀が手鬼の両眼をそれぞれ捉える。

善逸の刀が左目を切り裂き、木村の刀先が右目を突き刺し、破壊する。

「ギャッ！」

思わず悲鳴を上げる手鬼。

野獣が叫ぶ。

「三浦、奴の腕を潰してください！」

「おつ、そうだな！おい伊之助え！お前も見えてないでこつち来て、お前も腕を斬つてみるよ」

「あいよ、兄弟！」

「伊之助早くしろ——」

伊之助も駆け出し手鬼に突撃する。

獣ノ呼吸、伍ノ型、狂い裂き——

二刀流の刀を巧みに動かし、三浦とともに手鬼の腕を切り落としていく。

木村と善逸が目を潰し、三浦と伊之助が腕を次々と切り落とし或いは打ち返す中、野獣が炭治郎に叫んだ。

「炭治郎、今がチャンスだ！一緒に奴の首を斬るぞ！」

「はい！仇をとりましょう！」

同時に跳躍し、手鬼の首めがけて刀を構える。

「ヒュウウウウウ」

「ヌウン、ヘツ、ヘツ、ヘツハツ、ヌ、ツ！」

以前よりもはるかに力強い呼吸が響く。

大量の酸素が、血が、体中を駆け巡り、体中が大きく躍動し力が入るのを感じる。

水の呼吸、壺ノ型、水面切り——

野獣の呼吸、壺ノ型、淫夢之一太刀——

一斉に抜刀し横に一闪、刀を振る。

手鬼の首に二つの日輪刀が一斉に、的確な部位に凄まじい勢いで食い込む。

普通の鬼より遥かに硬い肉と骨がそれを阻もうとするが、力もその向きもその手鬼の

肉体の部位や弱点、流れを的確に掴んでおり、更に切り刻もうとする。そこへ更に新たな力が加わった。

便乗の呼吸、肆ノ型、砲茶魔——

「よしーじゃあぶち込んでやるぜ!!」

手鬼の首めがけて三浦が強烈な飛び蹴りを食らわせた。

その蹴りは単に手鬼の肉体をダメージを与えるだけでなく、野獣と炭治郎の刀にまっすぐ乗るように撃ち込まれ、二人の刀を振る勢いにさらに力を与える。

そして。

メキッ！ザンツ！ブツチツパ！

首の肉が裂け、切れ、そして次の瞬間完全に胴体から離れた。

切断された手鬼の首が宙を舞い、やがてどしやりと地面に落ちる。

そのまま切断された首も、そし手頸をなくした巨大な胴体も、あつと言う間にポロポロになり、塵のように崩れ去っていく。

数えもしないうちに、その巨大な体躯は嘘のように完全に消え去り、後には虚空だけが残された。

炭治郎が目を閉じ、手を合わせて彼に殺された者たちと、彼自身の冥福を祈る。

野獣も静かに目を閉じる。

「真菰……みんな……仇はとつたぜ」

手鬼は死んだのだ。野獣と炭治郎たちは、勝つたのだ。

東の空を見れば、日の光でオレンジ色に染まり始めている。

野獣と炭治郎たちの勝利を表し、彼らの前途を祝福しているかのようにだった。



## 第9話 うんこの擬刀化

野獸と炭治郎達が連携して手鬼を倒してから七日後、早朝。

最終選別は終わり、野獸たちは山の麓に集まっていた。

最初入った時には何十人も少年少女がいたが、今集まっているのは野獸をはじめとした空手部三人と、炭治郎と善逸、蝶と戯れている少女と顔に傷のある少年の七人だけで、大きく激減していた。この事実は最終選別がいかに過酷なものであったかを物語るものであった。ちなみに伊之助は野獸や三浦が止めるのも聞かず我先にと真つ先下山してこの場にはいない。ホモはせっかち。

「お帰りなさいませ」

「おめでとうございます。ご無事で何よりです」

入山した時のおかつぱの着物少女二人が口を開く。

最終選別が終わったこと、生き残り合格したことへの簡単な祝辞を述べると二人は今後の流れ等について説明を始めた。

隊服を支給すること、鬼殺隊の階級は十段階あり、野獸たちはまず一番下の癸から始まること、日輪刀は今日中に原料の玉鋼を選び二週間ほどで支給すること、また連絡用

のために一人につき一羽、鏝鴉を支給すること等々。

バサバサとはばたく音とともに炭治郎たちの肩に鴉が舞い降りる。これが鏝鴉なのだろう。

だが野獣の肩に止まったのは鴉ではなかった。

「えっ、何それは……」

野獣が腕を見るとその先にいたのは鴉ではなく黒いくくりとした目を持った白い小動物、スローロリスだった。明らかに鴉ではなく、サルである。

野獣の腕につかまるスローロリスは黒い眼でじつと野獣を見つめながら、なぜか右手を上げガッツポーズをしている。

「ちよつと待つて!?! どうみても鴉じゃなくてサルなんですがそれは……」

「なんか、自分のこと淫夢くんって呼んでくれて言ってると思うですけど（名翻訳）」  
困惑する野獣に炭治郎が言う。

「え、こいつの言葉分かるの?」

「はい。色々大変だろうけど、ハイ、ヨロシクウ! って」

平然と肯定する炭治郎。正直信じられない野獣だったが、感情が分かるほど嗅覚が鋭い嘘をつかない素直な性格なので本当なのかもしれない。

「そうか……それじゃ淫夢くんこれからよろしくナス! 色々大変だろうけど、これか

らよろしくなく頼むよ〜」

そういつて野獣が淫夢くんの脇をなでると何故かスローロリスもとい淫夢くんはさらに勝ち誇つたように右手を上げガッツポーズをするのだった。

ちなみに明らかに鴉ではないものを支給されたのは野獣だけではなかった。

木村と善逸のほうを見れば、それぞれの手のひらにセミと雀が乗っている。

「・・・え？鴉？これ雀じゃね？」

「僕に至つてはセミなんですすがそれは・・・」

バシイッ！ギャアッ！

一同が鴉を支給されるなか突然、何かが叩かれる音と鴉の悲鳴が聞こえた。

音のした方を見れば、顔に傷のある少年が支給されたばかりの鎧鴉を張り倒していた。

跳ね飛ばされた鴉を咄嗟に善逸がキャッチし撫でる。このあたり、善逸は臆病だが根は優しい人間の鑑といえるだろう。

「どうでもいいんだよ、鴉なんて!!」

鴉を跳ね飛ばした少年がそう言うと二人組の着物少女の白髪のように迫り、今度は彼女の顔めがけて拳を勢い良く突き出す。鈍い音がした。更に髪をひつつかむとそのまま彼女の顔面に迫り怒鳴る。

「刀だよ、刀！今すぐ刀をよこすんだよ！鬼殺隊士が持つてる『色変わりの刀』をよお！あくしろよ！」

だが彼の乱暴狼藉がさらに続くことはなかった。

炭治郎が怒りの形相で少年の腕をつかむ。

「人間の屑がこの野郎……！女の子に暴力を振るって恥ずかしくないのか！今すぐその手を放せ、放さないと言え！」

「ああ？なんだテメエは……やってみろよ！」

少年のほうも表情一つ変えず負けじと言い返す。

瞬間、炭治郎の手に力が入りミシリと少年の腕が音を立てた。

激痛が顔を歪め、少年が少女の髪から手を放す。それから睨みあう二人。野獣が少女に駆け寄り、「おつ、大丈夫か大丈夫か？」と傷跡に布を当て介抱する。

「お話は済みましたか？」

緊張した空気が流れる中、着物少女の二人組の一人、黒髪の少女が口を開いた。

台のほうに手を向ける。

台には日輪刀の原料となる玉鋼がずらりと並んでいた。大きさも形も、色もそれぞれに異なる。

「それではあちらから、各人刀を作る鋼を選んでくださいませ。……鬼を滅殺し、己

の身を守る刀の鋼はご自身で選ぶのです」

各人が沈黙する中、鴉と雀の鳴き声、そして善逸の「多分俺はすぐ死ぬよ……死ぬ死ぬ……アーク」という声だけが響き渡っていた。

「ぬわあああああん疲れたもおおおおおん」

「チカレタ……」

野獸と炭治郎は互いに肩を支えあいながら、鱗滝や秋吉、禰豆子の待つ狭霧山の小屋へ向かっていた。

選別が終わると、各人はそれぞれの育手のもとへ一旦帰宅するように指示された。

再び空手部の仲間と再会したばかりなのにまた別れることになり、悲しかったが、そういう指示なら仕方ないし、二度と会えないというわけではない。また、三人で集まろう、無事でしょうと固く誓い合うとそのまま各人はそれぞれの帰路へ着いた。

藤襲山を下り始めたころから長期間の過酷な選別による凄まじい疲労と体中の痛みが二人を襲っていた。

「いやもうキツかったつすねー選別は」

「ああもう選別は……すつげえキツかったですよ……やめたくなりますよー鬼殺隊

「秋吉直々の迫真空手の体力練成の指導を受けていた二人にとって何とか耐えられるものではあったが、それでも相当にきつく交替で支えあいながら家路を急いでいた。」

「・・・甘かったなあ・・・」

炭治郎がぼつりとつぶやく。

「最終選別で八人の鬼と会ったけど・・・みんなまともに会話できる状態じゃなかった。鬼が人間に戻る方法ちゃんと聞けませんでした。・・・ごめんよ、禰豆子・・・ごめんなあ・・・」

選別で鬼に出会う度に炭治郎は鬼を人間に戻す方法を問うたがどの鬼も答えることはなく何も聞き出せないまま結局襲われ、斬っていた。

炭治郎は妹を人間に戻すために鬼殺隊に入ることを決意したのだ。その彼にとって愛する妹のために何の収穫も得られなかったということは、炭治郎を申し訳ない思い出さなければいには十分だった。

謝罪の言葉を漏らす炭治郎に野獣が声をかける。

「・・・まあ誰も知らないしすぐに分かるとは限らないし、しょうがないね・・・それに禰豆子を人間に戻せないと決まったわけじゃないし、まだまだ始まったばかりだから。気を落とさずにやっつけていこう。きつと、方法があるはずだからさ」

「・・・そうですね。まだ始まったばかりなんだ」

「とりあえず、風呂入ってさっぱりしましよようよ」

「そうですね」

そうこうしているうちに、二人は狭霧山の麓に着いていた。

目の前に立つ小屋に歩み寄ろうとしたその瞬間――

バン！（大破）

小屋の戸が凄まじい勢いで何者かにけ破られ大破し、吹っ飛ぶ。野獣と炭治郎が驚き立ち止まる中、中から戸を蹴飛ばした人物が歩いてきた。

着物に黒い羽織、長い髪、そして口に竹筒を咥えた少女。

それは炭治郎と野獣が誰よりもよく知っていた、そして大切に思っていた人物だった。炭治郎がその名を叫ぶ。

「あーっ！禰豆子、禰豆子お前・・・起きたのかあ!!」

狭霧山での鍛錬以来ずっと眠っていた禰豆子が起きたのだ。二年ぶりだ。

禰豆子が炭治郎と野獣の姿を視認した瞬間、彼女も勢い良くこちらに駆け寄り二人に抱き着く。

鬼ゆえか、嬉しさゆえか、その勢いは強く、そのまま三人は後ろに転がる。

それから野獣と炭治郎が立ち上がろうとすると、禰豆子はまず炭治郎をぎゅうつと抱

きしめ、それから野獣も抱きしめ、それから二人を一緒に抱きしめた。炭治郎も野獣もこれでもかと抱き返す。

二人の目から涙がこぼれる。

「わーっ、お前、なんで急に寝るんだよオ、ずっと起きないでさあ！死ぬかと思つたじゃないかあ!!」

「自分、涙いいすか?・・・で、出ますよ・・・本当に無事で、よ、良かった・・・」  
そんな抱きしめあう三人にさらに駆け寄り抱きしめるものが二人いた。

鱗滝と秋吉である。

鱗滝が三人を抱きしめ、秋吉も頭をなでる。

鱗滝の顔と面の間から涙があふれる。秋吉もいつになくその目が潤んでいた。

「よく・・・よく生きて戻った!!」

「野獣・・・炭治郎・・・よく帰ったな！俺は・・・嬉しいぞ！」

それから皆しばらくの間再会を喜び、抱きしめあい、涙を流すのだった。

——19日後——



野獸と炭治郎たちのもとに一人の来訪者が訪ねてきた。

その来訪者は奇妙ないでたちだった。

顔を隠すように網代傘を深々とかぶり、しかもその網代傘は周囲にまんべんなく無数の風鈴がつけられていた。一步一步歩くたびにチリンチリンと音が鳴る。

「俺は鋼鋳塚という者だ」

来訪者はそう名乗った。

「竈門炭治郎と田所浩二の刀を打った者だ」

そう言うと彼は地べたすわり、持つていた風呂敷を広げた。風呂敷には刀が二つ並んでいた。中へ入るよう勧める野獸と炭治郎の声も聞かずに鋼鋳塚は話し続ける。

「これが日輪刀だ。俺が打った刀だ。日輪刀の原料である砂鉄と鋳石は太陽が一番近い山——陽光山でとれる。一年中日が差している山だ。そこに原料の鉄がある。『猩々緋砂鉄（しようじょうひさてつ）』『猩々緋鋳石（しようじょうひこうせき）』。日の光を吸収する鉄で、この二つから日輪刀を造り上げる・・・」

日輪刀に関する情報を一気に述べてから不意に鋼鋳塚は野獸と炭治郎のほうを向いた。

「うわっ」

「フアッ!？」

隠れていた素顔、というよりは顔につけられたひよつとこの面が明らかになる。鬼殺隊関係者は顔に面をつける習慣や規則でもあるんだらうか？

驚く二人をよそに鋼鍬塚は炭治郎の顔をまじまじと見つめた。

「んん．．．？お前、『赫灼の子』じゃねえか。こりやあ、縁起がいいぞ」

「いや俺は炭十郎と葵枝の息子です」

「そういう意味じゃねえ」

「炭治郎、お前頭固いって言われる．．．言われない？」

鋼鍬塚の言によれば炭売りをしていた竈門家のように火仕事をする家には頭の毛や目が赤みがかつている子が生まれる、それは縁起がいいのだという。

「こりやあ、刀も赤くなるかもしれないな。なあ、鱗滝」

そういういながらようやく鋼鍬塚は家の中に上がる。どうやら彼は鱗滝と知り合いのようだ。

一堂が会したところで、野獣と炭治郎にそれぞれ日輪刀が渡される。

今日この時から、この日輪刀が二人の命を守り、そして鬼を滅する武器、相棒となるのだ。

「さあさあ、刀を抜いてみな」

手をうねうねと揺らし催促する鋼鍔塚。

「日輪刀は別名色変わりの刀と言つてなあ、持ち主によつて色が変わるのさあ」

「はえくすつげえ変わつてる……」

催促されるまま二人は渡されたそれぞれの日輪刀をゆつくりと抜き、構える。

言葉通り、抜いて手にした途端、それまで鏡のように光沢を放つていた刃の色がゆつくりと変わつていった。

「おおっ」

炭治郎が思わず声を上げる。

炭治郎の日輪刀は真つ黒に。そして一方の野獣の日輪刀は……クツソ汚い、茶色に変色していた。たとえるならまるで……うんこみたいに。

「黒っ！茶色っ！」

「黒いな……」

「茶色いな……」

様子を見ていた鱗滝や秋吉も驚きの声を漏らす。

「え、黒いとかよくないんですか!?不吉なんですか!？」

「俺のに至つてはなんかクツソ汚い、うんこみたいな色になつたんですがそれは……」

「いや、そういうわけではないが……あまり見ないな、漆黑もこんな茶色も」

「キー——ッ!!」

困惑する野獣と炭治郎に、鋼鍬塚が怒りの声を叫ぶ。

「ふざけんな! (声だけ迫真) 俺は鮮やかな赤い刀身が見れると思ったのによオ! 第一お前に至ってはなんだ! 俺が丹精込めて売った刀をこんなクツソ汚いうんこみたいなた色に染めやがってよオ!!」

怒りのまま炭治郎をひっぱたき、野獣につかみかかる鋼鍬塚。炭治郎も野獣も声を上げる

「そんな! ただ握っただけじゃないですか! オナシヤス! センセンシャル!」

「そうですよ! 俺だって好きでこんな色にしたんじゃない!」

「うるせえ! 丹精込めて苦労して刀を打った俺の気持ちにもなってみろ!! 一所懸命に入った刀が、こんなクツソ汚い色に染まっちゃうよオ! 分かるか? この罪の重さ! 分かるよなあ鱗滝!」

突然話を振られ困惑しながらも鱗滝と秋吉がそれぞれに答える。

「うーむ……まあ、確かに……汚い色だな……まるでうんこの擬人化ならぬ、うんこの擬刀化だ……」

「ああ……鋼にうんこを混ぜて錬成して打ったらこんな色になりそうだ」

汚い茶色、クツソ汚い色、うんこ、うんこの擬刀化。野獣の日輪刀に散々な評価が投

げかけられる。しかし確かにそんな色をしているのだから仕方ない。炭治郎も内心、（言えない・・・浩二さんの日輪刀から、うんこみたいな、獣みたいな、クツソ汚い匂いがするなんてとてもじゃないけど言えない・・・）などと考えていた。

鋼鋳塚がさらに声を荒げ、野獣を掴む力が強くなる。

「ほら、こいつらもこう言ってるじゃねえか！もう許さねえからなあ？」

「そんな、許してください、何でもしますから!!」

「ん？今何でもするって言ったな？」

「えっ、それは・・・」

家の中が騒がしくなる。が、それを不意に断ち切ったものが現れた。

「カアアア！カアアア！竈門炭治郎オ、田所浩二イ！仕事ダア！鬼狩リトシテノ最初ノ仕事ダア!!」

家中に鴉の鳴き声が響き渡った。

見れば炭治郎の鎧鴉と野獣のスローロリス、もとい淫夢くんが並んでいた。淫夢くんの高々と上げられた右手には紙が握られている。

野獣が淫夢くんから紙を取ってみると、そこには野獣と炭治郎への指令が書かれていた。

鎧鴉が内容を読み上げる。

「北西ノ町へ向カエエエ！北西ノ町デワアア、少女ガ消エテイルウ！毎夜毎夜、少女ガ消エテイル！！今スグ、北西ノ町へ向カエエエ！！」

野獣と炭治郎は顔を見合わせ、頷き合った。初の任務だ。

最終選別から約二週間。

ついに野獣と炭治郎の鬼殺隊士としての活動が始まるのだった。

## 第10話 最初の任務

野獸と炭治郎は指示に従い、鬼が出没していると思しき町を歩いていった。

ちなみに禰豆子は何処にいるかというところ：炭治郎が背負っている箱の中にいる。昼間禰豆子を運ぶために鱗滝が特別に作ったもので、非常に軽い霧雲杉という木で作られている。岩漆を塗って外側を固めてあるので強度も高い。昼間野獸と炭治郎が移動する間、鬼である禰豆子はこの箱の中に入ることと安全を確保・二人と行動を共にすることが出来るようになる。

歩きながら炭治郎は一人の人物……もとい鬼の名を呟く。

「……鬼舞辻無惨……それが俺たちの仇」

「こうもあつさりと仇がだれなのか分かるなんて意外つすね……」  
歩きながら、二人は鱗滝から聞いた自分たちの仇であり、おそらく禰豆子を人間に戻すための力ギとなるであろう人物についての話を思い出していた。

『人間を鬼に変える血を持つ鬼はこの世にただ一体のみ。今から千年以上前、一番初めに鬼となったもの。つまりそれがお前の家族の仇だ、炭治郎。さらにそいつならば妹を人間に戻す方法を知っていると俺は思っている。その鬼の名は……鬼舞辻無惨』

「家族の仇にして、禰豆子を鬼にした張本人。そして禰豆子を人間に戻すためのカギになるであろう鬼。二人にとつてまず彼について情報を集めることは何よりも重要なことだった。」

「今回の任務で鬼から鬼舞辻無惨について聞き出せたらいいんですが」

「まあ、地道にやつていくしかねえな・・・でも」

野獸は町を見渡す。

「指示に従つて街にやつて来たはいいけど・・・どうすればいいですかね？ 肝心の鬼を見つけないことにはどうにもならないし・・・これもう分んねえな」

「とりあえず聞き込みとか、地道に調べていくしかないと思うんですけど（提案）」

二人がそんな風に今後の行動について相談しながら歩く中、一人のやつれ落ち込んだ様子の青年がふらふらと二人のそばを通り過ぎた。よく見ればその顔には殴られたような跡がある。

男について知っているのか、町の人が彼を指さしたり、見やつたりし、噂をする。

「ほら和巳さんよ、可哀想にやつれて・・・」

「一緒にいたときに里子ちゃんが攫われたからね・・・」

「毎晩毎晩気味が悪い・・・」

「ああ、嫌だ。夜が来ると若い娘が攫われる」



「ここ最近、毎晩のように若い娘が行方不明になっている」  
「いったいつまでこんなことが続くのやら」

野獸と炭治郎は顔を見合わせた。

鏝鴉の指示にあつた、毎晩若い娘が攫われる話。

町の人々の噂。

そして先ほど二人を通り過ぎた和巳という青年。彼はその失踪事件の関係者らしい。二人は振り返るとすぐに先ほどの青年、和巳のところに駆け寄つた。

「和巳さん、ちよつとお話を伺いたいのですが……」

閑静な住宅街。

野獸と炭治郎は和巳から里子という女性が消えた話を聞き、その現場にいた。

「じゃあ、気付いたら完全に消えていたと？」

「ああ……」

和巳によれば話は次の通りだった。

彼には里子という名の婚約者がいた。

ある夜、彼はいつものように彼女と共に家路を歩いていた。彼が提灯を持ち、その後

ろについていくように里子が歩いていった。

途中、不意にごく短い彼女の声ないし悲鳴のようなものが聞こえた気がして、後ろを振り向いた時には彼女の姿はなく、影も形もなかった。確かに彼の後ろをついていたはずなのに、また付近には誰もいなかったのにもかかわらず、である。

つまり里子は誰も認知しないうちに一瞬でその姿を消した、あるいは攫われたということになる。

同様のことはここ最近この町で連日のように起きていた。

「ここでも里子さんは消えたんだ。信じて貰えないかもしれないが……」

やつれた表情のまま和巳は首を横に振る。顔についた殴られた跡は里子の父親にやられたものだという。突然自分の娘が疾走したので、混乱し、受け入れられず、和巳の責任だと彼にぶつけようとしたのかもしれない。

「信じます。俺は信じますよ」

和巳の話を聞いた炭治郎はそう言うとおもむろに地面に伏せ匂いを嗅ぎ始めた。

「えっ、なにそれは……」

炭治郎の突然の行動に困惑する和巳。

そんな彼に野獣は言葉をかける。

「んあ、大丈夫ですよ、こいつ鬼の匂いを嗅ごうとしているだけだから」

「え?」

「この状況……どう考えても、鬼の仕業としか考えられないって、はつきり分かんたね。鬼の匂いどう?する?しない?」

地面に伏せ花(鼻)を引くつかせる炭治郎に声をかける野獣。

「んにやび、やつぱり鬼の匂いが……微かにしますね、とりあえず。でもまだらというか……変な感じがしますよ」

「とりあえず、鬼の匂い辿ることはできる?」

「できますできます」

「……あなたたちは一体?」

(……そういえば、鬼狩り様が、鬼殺隊がいるという話を昔聞いたな。もしかして二人は……いや、まさか……)

奇妙なやり取り、鬼という単語。

何から何まで不思議なこの二人に和巳は不意に、噂で聞いた話を思い出し、しかし否定するのだった。

炭治郎が地面にかすかに残る鬼の匂いを辿り、それを野獣と和巳が追う内に数刻が過

ぎ、日が沈みはあたりはすっかり暗くなっていた。夜に——鬼が現れる時間になったのだ。

不意に炭治郎がこれまでより大きく鼻を引くつかせると突然道を走り出した。

「!? どうした炭治郎!」

「どうしたんだ急に!!」

「匂いが濃くなった!! 鬼が現れてる!! 浩二さん、俺についてきてください!!」

「ん、おかのした!」

炭治郎と野獣は一刻も早く鬼が現れたであろう場所に向かうため、これまでよりも速い速度で駆け出した。呼吸法により、肉体の動きと働きがさらに活性化し、常人を遥かに上回る、鬼に匹敵する身体能力が発揮される。

跳躍。

一般人にはありえない高度まで飛んだかと思えば野獣と炭治郎は二階建ての家屋の屋根に着地。そのまま建物を辿るように疾風の如く屋根の上を駆けていく。

そのありえない光景に和巳はただ啞然とする。

その一方で、鬼の話や鬼殺隊の噂は本当だったのだ、と悟る。

しばらく呆然とする彼だったが、はつと我に返ると何とか彼らに追いつこうと走り出すのだった。

しばらく走ると、野獣と炭治郎は静かな道に着地する。周りは閑静な住宅や建物で囲まれ、人は一人もいない。

二人はゆつくりと日輪刀を抜き構える。

「ここです。鬼は今ここにいます。匂いは二種類・・・鬼と人間の女の人の匂いが」

「つまり、攫われたばかりのことか・・・ここ最近の失踪事件や聞いた話と完全に合致してるってはっきり分かんだね。でも姿が見えねえぞ・・・？」

野獣の言葉通り、今この道には自分たち以外には誰もいない。炭治郎の嗅覚通りなら、確かに今ここに鬼が現れたばかりなのだ・・・

炭治郎はさらに匂いを嗅いだ。

この匂いが強かった場所を取り分けて一番濃い匂いがする場所を探す。

そして、炭治郎の鼻が大きく引くついた。

「ここだ!!」

瞬時に、地面に向け刀を突き刺す。

「ギャッ!!」

地面から人ならざる者の悲鳴が聞こえたかと思うと、突き刺した点を中心に影のよう

な真つ黒い染みが地面一面に広がる。

そして、水面から物体が姿を現すように、黒い面に何かが浮き出る。それは最初何かの布のように見えたが、だんだんと姿を露にしていく。

「—」

黒い影に浮き出てきたのはまだ十代と思しき少女だった。意識を失いぐったりしている。が、特に目立つた外傷はなく呼吸も正常で生きている。

うら若い少女が攫われる、鬼、若い女の匂い——

瞬時に鬼に攫われたばかりの少女だと悟り野獣と炭治郎は迷うことなく彼女を掴み、地面に広がる黒い影から引き揚げようとする。

直後、そうはさせまいとばかりに黒い影からさらに腕のようなものが伸び少女の着物の袖を掴む。その手の爪は異様なほどに鋭かった。

瞬時に炭治郎は彼女を掴み、抱きかかえて後ろにジャンプ。着地する。ピリつと掴まれている袖の部分が破れる。着地した炭治郎たちの盾になるように野獣が前に出て刀を地面の影とそこから現れた異形の存在に向ける。

水面から人が現れるように、その異形の存在が姿を現す。

忍者のような黒に綱目模様の入った服に、額に生えた三本の角。目は真つ黒く、爪は鋭い。時折口から見える歯は鋭い。先ほど炭治郎が突き刺したものだろうか、右腕には

切り傷があり出血していたが、シユウウウと瞬時に再生し血も消えていく。

間違いない。こいつは鬼だ。それもただの鬼ではない。

「異形の鬼……！」

野獣と炭治郎は砂霧山で鍛錬していた頃の、秋吉と鱗滝の言葉を思い出した。

『異能の鬼つすか？』

『ああ。鬼の中には“血鬼術”という特殊な術、異能を使う鬼がいる。それが異能の鬼だ』

『一口に異能、血鬼術といっても様々だ。催眠や、空間移動……いずれにせよ、全ての鬼がそうというわけではないが、そのような術を使う鬼が大勢いる。鬼殺隊士として活動する以上、今後はそのような鬼とも戦うことになるだろう』

あの鬼はさつきまで地面の中にいた。おそらくあの影のようなもので地面の中に空間を作って普段は隠れ、人を攫うとすぐさままた攫った人間ごと地面の中に潜り隠れていたのだろう。それがここ最近の失踪事件の真相だろう。おそらく里子を攫ったのもこの鬼だ。道理で姿が見えなかったわけだ。

「……!?なんだ、これは……」

ようやく野獣と炭治郎に追いついた和巳が異能の鬼の姿を目にして絶句した。

炭治郎が叫ぶ。

「攫った女の人たちは何処にいる！それから二つ聞く……」

だが言い終える前に、鬼がギリギリと歯ぎしりをしたかと思うと野獣と炭治郎を睨んだ。歯ぎしりの不快な音があり得ないほどの大きさまで大きくなり、響く。睨んでいるのと相まつてまるで威嚇しているかのようだ。

その勢いに誰も何も言えずにいる。炭治郎も鬼から怒りとも憎しみともとれる強烈などす黒い感情の匂いを感じ取る。

そのまま鬼はどぶん、と影の中に沈んでいったかと思うと、同様に地面の影も急速に小さくなり完全に消えた。

助け出した女性を和巳に預け抱えてもらおうと、野獣と炭治郎は二人を守るように自分たちの間合いの内側に入れ歩き出す。

「炭治郎、さっきの鬼の匂い、まだ分かる……分からない？」

「匂いはまだします。あの様子ならたぶん地面や壁ならどこからでも……もしかすると空中からも出てこられる。でもこの鬼は潜っている間も匂いを消せません！俺が合図をするから浩二さんも合わせて、お願いします！」

「オツス、お願いしまーす！」

二人が掛け合っていると、不意に再び匂いが強くなった。

「！来た！」



水の呼吸、伍ノ型、千天の慈雨——

野獸の呼吸、参ノ型、愛栖鄭——

一点に狙いを定め、一気に同時に刀を振り下ろそうとする二人。だが——

「!?」

「フアツ!?!」

地面に黒染みが広がったと思つた瞬間、先ほどの鬼が地面から現れる。だが、先ほどとは様子が全く違つていた。現れたのは——三体。それぞれ生えている角が一本、二本、三本となつていてという点を除けば全く同じ姿の異能の鬼が三体、一気に地面から現れたのだ。それも野獸たちを取り囲むように。この異能の鬼は地面に潜り隠れるだけでなく、分裂できるというのか、あるいはもともと三人だというのか。

——落ち着け、技を変えろ——

瞬時に呼吸の型を変える。

水の呼吸、捌ノ型、滝壺——

野獸の呼吸、肆ノ型、法螺法螺法螺法螺——

炭治郎が真下に斬撃を与え、さらに野獸が瞬間に刀を連続して振る。

三人の鬼の腕を切り、あるいは身体の一部に切り傷を与える。だがその刃が首に届くことはなく致命傷を与えることはなかった。

チツ、と舌打ちをしたかと思うとまたどぶん、と水に潜るように地面に消える。

「ふざけんな! (声だけ迫真) 鬼が群れてるなんて聞いてねえぞ! 三人一気に襲い掛かるとかこれもうやべえよ……やべえよ……」

「三人とも全く同じ匂いでした……一人の鬼が分裂しているんだ」

それはつまり二人の人間を守りながら、三人の鬼を切らねばならないということだ。しかも相手は地面に潜りどこからでも自由に攻撃を繰り返せる。

どちらか一方が二人の護衛に徹し、一方が攻撃に出れば一人で三人を相手にすることになる。二人で一斉に攻撃に出ても、残る一人の鬼があつた二人を襲う。相手の鬼の数が多く、姿を隠し、地面や屋根など、どこからでも襲える以上、確実に隙を突かれるだろう。建物に囲まれた決して広いとは言えない道であり、また人を守らねばならない以上刀を思い切り振ることはできない。状況は野獣たちが不利だ。

再び今度は後ろから和巳たちを襲うように鬼が現れる。

炭治郎が刀を振るう。が、切込みが浅く、致命傷にならなかつた。

下半身を地面に潜らせたまま鬼が叫ぶ。

「貴様アア!! 邪魔をするなアア!! 女の鮮度が落ちるだろうがあ!! もう今その女は十六になっているんだよ! 早く食わないと刻一刻で味が落ちるんだ!!」

「冷静になれよ、俺」

ゴボ、という音とともに更にもう一体鬼が地面から現れる。呼びかけ方からしてやはり一体の鬼が三体に分裂していると考えるべきだろう。

「まあいいさ……こんな夜があつても。この町では十六の娘を喰つたからな……どれも肉付きがよく美味だった。俺は満足だよ。」

「俺は満足じゃないんだよ！まだ喰いてえんだ!!」

「ば、化け物……一昨晚攫つた、里子さんは……里子さんは何処だ！里子さんを返せ！」

言い合う鬼に和巳が震える声で、必死に叫ぶ。

和巳の声に反応した鬼が首をかしげる。

「里子？……誰のことかねえ。この蒐集品の中にその娘のかんざしがあれば喰つていよるよ」

いやらしい笑みを浮かべながら鬼が服をめくり、その内側を見せる。そこにはおそれく今まで攫い喰つてきた女のものであろうかんざしや髪飾りが所狭しと並び吊るされていた。

そしてその中に一つ、目立つ形で大きな赤い髪留めがあるのを見た瞬間、和巳は青ざめ、大粒の涙をぼろぼろと流す。その眼には絶望と、悲しみと怒りで満ちていた。同時に野獣と炭治郎も悟る。

間に合わなかった。里子は、彼の婚約者は喰われたのだ。

その悲しみと怒りを野獣も炭治郎も、特に炭治郎にはよく分かった。なにしろ彼は鬼に大切な家族を殺されたのだから。不意に炭治郎と野獣の脳裏に今は亡き竈門家や人間だったころの禰豆子の姿が思い浮かばれる。それらの姿はあつという間に血にまみれていく。

この忌むべき畜生は大切な家族を奪った。そしてただ食べ物として喰うばかりでなく戦利品だといわんばかりにその装身具を収集する。命への冒涇以外の何物でもない。

「なんてことを……(憤怒)」

「屑共が(至言)」

あつという間に二人の心は怒りで染め上げられ、刀を握る手が強くなる。

再び、三人の鬼が一斉に襲い掛かる。

野獣も炭治郎も刀を振るうが、相手は素早く、壁や地面から突然現れて隙をついて突然襲い掛かるため、攻撃は浅くなり、決定打になりえない。

一人の鬼が炭治郎の真後ろから襲い掛かる。その鋭い爪と牙が炭治郎の頸をとらえようとしたその瞬間、炭治郎の背負っていた箱の戸が開き、脚が飛び出した。明らかに人間のものではないすさまじい勢いで飛び出した脚はそのまま、後ろから炭治郎を襲おうとした鬼の頭を蹴り上げた。その威力は、蹴りを食らった鬼の首がぐるりと一回転し

たほどだった。ミシ、グシャツ、ベキツ！と骨の折れる音がし、口から大量に血を吹き出し後ろに倒れる。

ゆっくりと開いた箱から蹴りを出した人物——彌豆子が現れる。

外の、炭治郎や野獣の危険を察した彼女が眠りから起き、飛び出したのだ。

「なぜだ……どういふことだ？なぜ人間の分際で、鬼を連れている……？」  
信じられないといった様子で一体の鬼が呟く。

その疑問ももつともだ。本来ならあり得ない光景なのだから。

今の彌豆子は鬼。喰う側の存在である彼女がなぜ、喰われる側の人間を、しかも鬼にとつて最大の敵の鬼殺の剣士を襲うことなくともに連れたつて行動しているのか……？箱から出てきた彌豆子はゆっくりと女性を抱きかかえる和巳のもとへ歩くとそつと、やさしくその顔に手を添え、じつと顔を見つめる。その瞳が、和巳の目に浮かぶ涙を捕らえる

「……彌豆子」

その光景に何を思ったのか。彌豆子が振り返り歩みだす。

炭治郎も、そして野獣も察した。今の彌豆子が怒りと決意に満ちていることに。人間が傷つけられ、大切なものを奪った鬼に怒り、人間を、炭治郎たちを守ろうとしていることを。

禰豆子が再び足を振り上げ、地面に浮かぶ鬼に振り下ろさんとする。振り下ろされる直前、鬼が再び地面に潜る。それを追うように駆け回る禰豆子。禰豆子を捕らえんと、再び鬼が地面から現れ手を伸ばすがひよいと、空中を一回転し避ける。

「禰豆子、深追いするな！こつちへ戻れ！」

炭治郎が叫ぶ。

「！」

炭治郎と野獣のもとに駆け戻る禰豆子。

二人は迷っていた。禰豆子は今は人間ではなく鬼だ。人間よりもはるかに強い鬼で、日光や日輪刀以外ではまず死ぬことはない。必ずしも二人が守らねばならないほど弱いわけではなく、むしろ、鬼と対等にやりあえる存在なのだ。

だが、禰豆子は二人にとって家族。任せてもいいのだろうか。任せれば攻撃に専念できらるだろうが……

だがこのままでは埒が明かない。

先に肚を決めたのは野獣だった。

「……炭治郎、俺は……下に潜るよ」

「え？」

「奴が現れたすきを狙って一緒に地面に潜る。炭治郎は禰豆子と一緒に二人を守って

くれ……禰豆子に任せるんだ！」

「でも、浩二さん……！」

迷い、また野獣を案じる炭治郎。

その時、野獣の真下に黒い染みが現れたかと思つたら、あつという間に彼を飲み込むように地面に広がっていく。

だがむしろこれはチャンスだ。

野獣は迷うことなく飛び込んだ。野獣の体が一気に沈んでいく。

「浩二さん……！」

「炭治郎、仲間を、家族を信じるんだ！そしてやるべきことをやれ！」

「……！」

炭治郎がはつとしたように目を見開く。禰豆子と目を合わせる。禰豆子がうなずいた。炭治郎も頷く。

そうだ、仲間を、そして家族を信じないでどうする。それに自分にはやらねばならないことがある。やらねばならないのだ。何としても、和巳たちを守り、そしてあの鬼を倒すのだ。

炭治郎も腹を決め、日輪刀を握るその手に力がこもる。

「禰豆子……いこう！二人を頼んだ！」

影の中に飛び込んだ野獣が目にしたのは地面も、上下左右もない漆黒の空間だった。殆ど空気もなく、息ができない。体を動かそうにも抵抗を感じる。まるで水か沼の中だ。

そして、その中を無数の着物や物品が浮かんでいた。おそらく攫われた女たちの着物や持ち物だろう。その数から多くの人間が殺されたことはすぐに推察できた。何の罪もない人間をこれだけ殺戮するのは。野獣に怒りが湧く。

「くくく、苦しいかステハゲ！この沼の中には殆ど空気もない！さらにこの沼の闇は体に纏わりついて重いだろう、ハハハ！」

「地上のようにには動けん！さまあ見ろ！浅はかにも自ら飛び込んできた愚か者め！」  
暗闇の中から二体の鬼が迫り、罵倒してくる。

野獣の怒りがさらに湧く。

この野郎、俺がステハゲだと？俺はステロイドなんてやってねえし、ハゲじゃねえ！  
風評被害を勝手にばらまきやがって。

それに俺たちが一体どこで鍛錬してきたと思ってるんだ？狭霧山の頂上はここよりもっと空気が薄かった。それに俺は迫真空手部だけじゃなく水泳部も掛け持ちしてた



んだぞ。こういうところはむしろ得意だ、舐めるんじゃないぞ——

二体の鬼が前後から挟み撃ちするように凄まじい勢いで野獣に迫る。

だが野獣は臆することなく自分から突っ込んでいった。

まず前方の鬼向かって勢いよく泳いでいく。もともと水泳部で鍛え上げた泳ぎに加え、呼吸法による体力増強効果も相まって常人を遙かに上回るスピードで前方から迫る鬼に迫る。あつという間に刀の間合いに入る。ぎよつとする顔の鬼に躊躇することなく横に刀を一閃。その首を一気に切り飛ばす。

それから後ろから迫る鬼が野獣に襲い掛かる直前、野獣はプールの壁を蹴って反転する要領で、斬ったばかりの鬼の体を蹴り上げ、その勢いで即座に後ろから迫る鬼の真上に回る。

——野獣の呼吸、式ノ型、金睡冷伏（昏睡レ〇プ）!!

一気に下の鬼の首めがけて真下に日輪刀を振り下ろす。

強力な、真下への一閃は大きな衝撃波を生み、鬼の首を切断するだけでなく、体も大きく損傷させ破壊していく。

やがて二体の鬼が消滅するのを確認すると同時に、野獣は強い息苦しさを感じた。長時間激しく沼の中で動いたのだ。水泳部に所属していた野獣でもこれはきつい。

地上で戦っているであろう炭治郎と禰豆子、和巳たちの無事を祈りながら、野獣は必

至に地上めがけて泳ぎだした。

「ヌンツ、ハア、アツ、アツ、アツ……炭治郎、大丈夫か？大丈夫か？」

影の中から這い出た野獣がまず目にしたのは道の扉に寄りかかるようにして崩れる鬼だった。手足を切られ、身動きが取れなくなっている。三体に分裂していたことと、二体を野獣に切られた影響からか回復は非常に遅かった。しばらくはまともに動けない。

その鬼を取り囲むように炭治郎と禰豆子が立っている。炭治郎は日輪刀を鬼に向けている。

その後ろに和巳と彼に抱きかかえられた女性がいる。傷一つなく、無事だ。炭治郎と禰豆子が守り切ったのだろう。

「浩二さん、良かった……無事だったんですね」

野獣の姿を見て、炭治郎の目に一瞬安堵の表情が浮かぶ。が、すぐに厳しい視線を鬼に向ける。

「炭治郎も大丈夫か？」

「はい……禰豆子が二人を守って、隙を作ってくれました。浩二さんも……みんな

のおかげです。あとはこいつだけ。でもその前に聞くことがある」  
そういうと炭治郎は目の前の鬼に向き直る。

「お前たちは腐った油のような匂いがする……酷い悪臭だ！ いったいどれだけの人を殺した!!」

「女共はな!! あれ以上生きていると醜く不味くなるんだよ!! だから喰ってやったんだ!! 俺たちに感謝し……ギヤツ!!」

この期に及んで身勝手なことこの上ないことを言う鬼の言葉が最後まで続くことはなかった。その前に炭治郎が鬼の口を切り裂いたからだ。

般若のような眼をじろりと向ける炭治郎。

「もういい。鬼の屑がこの野郎……鬼舞辻無惨について知っていることを話してもらおう」

切る前に、自分の仇について情報を得ようとする炭治郎。だがその名を口にしたとたん、不意に鬼の様子がおかしくなった。目が見開かれ、大量の冷や汗が噴出し、がくがく震えだす。

わざわざ匂いを嗅がなくても、その鬼が強烈な恐怖とおびえに襲われているのは明らかだった。

「言えない……言えない……言えない言えない!」

そういつて首を振る鬼。

骨の奥まで震えるような恐怖の匂いを炭治郎は嗅ぎ取った。

強制的に口止めでもされているのか。

いったい何がそこまでの恐怖を彼に植え付けているのか。

何にせよ、鬼はただただ尋常でないほどに震えるばかりで言えない言えないというばかり。これでは何も聞き出せまい。

もはや、用済み。こんな屑、生かす理由はない。

炭治郎は似つかわしくない、凄絶なゾツとするような微笑を浮かべた。

「じゃあ、死のうか（暗黒微笑）」

横に一閃。

鬼の頸は飛び、宙を転がる。やがて首も体もあつという間に消えていった。

彌豆子を見る。

激しい戦いで体力を消耗していたのだろう。壁に寄りかかり眠っている。

「ごめんな．．．もう少し待ってくれ。兄ちゃんがきつと人間に戻してやるから．．．」

野獣と一緒に彌豆子を箱の中に入れると、二人は和巳と女性のもとへ駆け寄った。

女性を意識を失ったままだが、それ以外は別条はない。和巳のほうは茫然自失とし、

ぼろぼろと涙を流していた。婚約者を殺されたのだ。無理もない。

「和巳さん、大丈夫ですか」

「……婚約者を失って、大丈夫だと思うか」

「……和巳さん。失っても、失っても……生きていくしかありません。どんなに打ちのめされようと」

和巳の目に怒りの色が浮かぶ。

炭治郎の手を掴み叫ぶ。

「お前に何がわかるんだ!?!お前みたいなお子供に……!」

和巳の腕を炭治郎の手がそっと掴む。その眼は怒るでもなく、優しくかった。掴む手に、見つめる瞳に和巳がはっとする。

そっと和巳の手を放す炭治郎。

その和巳のもとに殺された女たちの遺品を差し出す手があった。野獣だ。

野獣と少年、両者の目も手も、優しく、痛ましく、鍛え抜かれていた。

「この中に、里子さんの持ち物があるとおもうんですけど……」

そう言つて野獣も口を開く。

「……失うのはお前ひとりじゃない。みんな何かを失いながら生きている。俺たちもそうさ。でも前に進まなきゃ、失うばかりだ……前に進まなきゃ、失ったままでまた新たに何かを得たり取り戻すことはできない、前に進んで、心のなかで生かし続けるこ

とが残された人間の使命だって、それ一番言われてるから」

「……」

「和巳さんひとりじゃない。俺たちも……失つて、それでも前に進んで……そうやって生きているんです。里子さんの分も……どうか、心の中で生かし続けてください。……強く生きて」

野獣と炭治郎はそういつてペこりと礼をするとそのまま踵を返し去っていく。

和巳も悟った。

自分だけではない。彼らも……

去り行く背中に和巳は叫ぶ。

「……すまない！酷いことを言った！どうか許してくれ!!すまなかつた……っ」  
声に反応し野獣と炭治郎が振り返り、手を振る。そしてまたゆっくりと歩いて去っていく。

炭治郎や野獣だけではない。彼だけではない。

どれだけの人が殺され痛めつけられ、苦しめられたらう。

歩きながら、野獣と炭治郎は全ての元凶、家族の仇を思い浮かべる。

鬼舞辻無惨……絶対に、お前を許さない。何があつても仇を取り、罪を償わせる。

決意を新たに、彼らは再び前に進むのだった。

## 第11話 野獣の眼光と耳飾り

「次ハ東京府浅草ア！鬼ガ潜ンデイルトノ噂アリイ！！カアアア！！」

「……」（右手を挙げて指令書を渡す淫夢くん）

沼鬼を倒してから翌々日、野獣と炭治郎は鏝鴉と淫夢くんから伝えられた指令に従って浅草に辿り着いていた。

到着した時にはすでに夜になっており、炭治郎は背負っていた箱から襴豆子を出して三人で一緒に街の中を歩いていた。

令和の東京とは違いレンガや木造建築が所狭しと並んでいるが、ガス灯などの明かりが街並みを昼のように照らし、通りには人が所狭しと並んだり、歩いている。その発展ぶり、賑やかさは現代の東京のそれとほとんど変わらない。

「はえ、すつこい発展してる……大正時代ってこんなに賑やかだったのか……これもう（現代との違いが）分かんねえな」

野獣が浅草の街並みの賑やかさに感嘆している一方炭治郎はというと

「アーイク、アーイクソ……」

呼吸を乱し、目が見開かれ、ふらふらしていた。顔はげっそりとしている。

「おつ、大丈夫か？大丈夫か？」

「あ、すみません．．．こんなにたくさん人がいて明るい場所は初めてで．．．人が多すぎるし目がチカチカしますよ．．．眩暈がする．．．」

どうやらあまりに発展し、人で溢れかえっている都市の環境を前にして混乱しているらしい。田舎暮らしの炭治郎にとってこれほど発展している環境は初めての、慣れないものであるはずだから、このような反応を見せるのも無理はないだろう。それに長いこと歩いた疲れもあるのだろう。一旦この人の多い場所から離れて休む必要があると野獣は判断した。

「このままこの場所に居続けるのは、ダメみたいですね．．．そうだ、さつき見かけたんだけど、この辺にいい、美味しいラーメン屋の屋台、来てもらいたいっすよ」

「あつ、そつかあ．．．」

「行きませんか？」

「あつ、行きてえなあ」

「行きましょうよ。じゃけんそこで休みましょうねえ」

「おつ、そうだな．．．」

ふらふら歩く炭治郎とまだ眠そうにしている禰豆子を支えながら、野獣は群衆から離れ、郊外のラーメン屋の屋台へと向かった。



「豚骨ラーメン三つください．．．」

「かしこまり！」

店主に注文をし、三人は屋台の椅子にゆっくりと腰掛ける。

「都会があんなに発展していて、あんなに人がいるなんて．．．こんなところ、初めてですよ．．．」

「都会だし．．．ま、多少はね？」

「だとしても人が多すぎイ！慣れるまで時間がかかりそう．．．で．．．」

お茶をすすりながらくつろいでいた三人。だが不意に炭治郎がお茶を飲む動きを止め、ガタツと立ち上がる。その眼は大きく見開かれ、動悸が激しく、額にはいくつもの冷や汗が浮かんでいる。明らかに尋常な様子ではない。

鼻が大きく引くついており、何かの匂いを感じ取ったようだ。

「ど、どうしたんだよ、炭治郎．．．まさか、鬼か!？」

「．．．鬼舞辻、無惨．．．!」

驚く野獣に炭治郎はそれだけ言うのと、脇目も振らずに駆け出した。禰豆子も鬼特有の凄まじい速度で炭治郎を追いかける。

「お、おい、炭治郎、待てよ！」

野獣も彼らを放っておくわけにはいかず駆け出した。

「はい、ラーメン三つ……って、あれ……？お客さんは……どこ……どこ？」  
後には作り立てのラーメン片手に呆然と立ち尽くす店主が残された。

(この匂い……家に残っていた匂いだ……間違いない。鬼舞辻無惨の……！)

炭治郎は駆け出す理由になった、突然嗅ぎ取った匂いについて鱗滝たちから聞いた情報も合わせて記憶を探り出す。覚えがあつた。あの日、家族が皆殺しにされ禰豆子を鬼にされたあの忌まわしい日、家に残されていた鬼の匂い。家族を殺し妹を鬼にした鬼——鬼舞辻無惨、何としても討たねばならない敵の匂いだ。間違いない。

鋭い嗅覚を頼りに、憎き仇の匂いのある方へとひたすらに走る。そう遠くない。

さつきまで群衆や都会の喧騒に調子を悪くしていたのがウソのように群衆をかき分け、駆ける。匂いが強くなる。

やがて、最も強い匂いのある黒いスーツに白い帽子の男——つまり匂いの根源、鬼舞辻無惨と思しき人物——の背中を見つけ、炭治郎はその男の肩に手をかけようとする。仇を見つけた怒りと憎しみと興奮で、すでに炭治郎の額だけでなく手にも青筋が浮かんでいる。だが、炭治郎がその男の肩に手をかける前に、誰かが炭治郎の肩に手を置いた。

「っ!?……あ、浩二さん……」

「炭治郎……いきなりどうしたんだよ、突然走り出して？」

驚いて振り返るとそこにいたのは見知った人間の顔——野獣だった。炭治郎たちを追いかけ、ようやく追いついた野獣は息を若干切らしながら、炭治郎に問いかける。

「……無惨です。家に残っていたあの鬼の匂い……鬼舞辻無惨の匂いがしたんです。あの男です、間違いない！あいつが、俺の家族と禰豆子を……！」

男の背中を指差しながら言う炭治郎。その言葉に野獣も察する。炭治郎が仇である無惨の匂いを嗅ぎ出したのだ。そして匂いの根源であるあの男がつまりは鬼舞辻無惨、野獣と炭治郎の倒すべき敵なのだろう。まさかこうもあっさりと目標を見つけ出すことになるとは。

憎き仇を前にして無惨を指差す炭治郎の目は怒りで満ち溢れ、動悸は上がったままで、興奮冷めやらぬ様子だった。日輪刀を握りしめる手も強く、今にも駆け出して抜刀しかねない。無理もなかったが。

野獣としても今すぐ無惨のもとへ駆け出し、切り捨てたいところだったが、彼の場合には冷静さの方が上回った。

炭治郎の肩にそつと手を置き、野獣が口を開く。

「炭治郎……まずは一旦落ち着いて待つんだ」

「落ち着く……!? 待てですって!? 何を言ってるんですか!? 見つけたのに放っておけっ

ていうんですか!? 浩二さんだつて……」

野獣の思わぬ言葉に驚き、憤りを隠せない炭治郎。

だが野獣は少なくとも表面上は落ち着いた様子で炭治郎を諭す。

「……俺だつて今すぐにあいつに切りかかつて仇を討ちたい……けど周りを見てみる。この群衆だ。騒ぎになるし、たとえ相手が鬼だとしても今この場で切り捨てたら俺たちはただの殺人犯になってしまう」

「……!」

野獣の言葉に炭治郎が目を見開く。確かにその通りだった。

ここは田舎や普通の街とは違い、喧騒の激しい都会なのだ。周囲を見れば所狭しと人だかりができ、歩き回っている。既に、ただならぬ様子の炭治郎達に通り返る幾人かが視線をやり、何かを言い合う。こんな所で抜刀して斬りかかれれば間違ひなく大騒ぎになるし、たとえ鬼が相手だとしても炭治郎は殺人犯、殺人未遂犯になってしまう。場合によつては騒ぎを利用して逃げ出す可能性が十分ある。正直言つて、今の状況は野獣たちには不利なのだ。

「……相手が本当に無惨なのかまだ確実じゃないし、ここで騒ぎを起こすわけにはいかない。それに相手がどんな能力を持っているのか分からない。今この場で下手に襲うのは得策じゃないつてはつきり分かんかね。幸いまだ気づつかれていない様子だから、

ここはあいつを尾行することにしよう。そのうち隙を見せるかもしれないし、無惨について情報を集めた方がいいかもしれない……」

野獣の言葉ももつともだった。冷静な言葉に炭治郎の昂っていた心身も少しではあるが治まった。

「……そうですね。一旦尾行しましょう……」

炭治郎が頷く。

二人はゆつくりと、白い帽子に黒いペイズリー柄のスーツの男の背中を追う。

人ごみの中、二人とも相手を決して見逃すまいと強くその背中を睨んでいた。

強い視線に相手も多少何かしらの気配を感じたのだろうか。ふと男が立ち止まり、ゆつくりと振り返りその顔を露にする。

「……!」

「こいつが鬼舞辻無惨……」

振り返った男——鬼舞辻無惨と目が合う。

白い帽子にペイズリー柄のスーツを上品に着こなしている。顔立ちは青白く、しかし非常に整っており、何も知らない人間が見れば何処かの名家の貴公子、御曹司だと思うだろう。

しかし実際には（炭治郎の嗅覚が確かなら）この男は間違いない鬼であり、仇敵の鬼

舞辻無惨なのだ。全く、完璧な擬態だった。

さらに驚くべきことには無惨の胸にはまだ幼い少女が抱かれていたことだった。少女も不思議そうな様子でこちらと無惨の顔を見ている。

その隣には少女の母親と思しき、これまた上品そうな身なりのいい女性が立っている。

「・・・人間だ。女の子と女の人は人間の匂いだ。こいつら知らないのか・・・？あいつが鬼だつて、人を喰うつて・・・!?!」

炭治郎が目を見開いて呟く。

何も知らない人間が見ればどこにでもいる普通の三大家族に見えるだろう。つまり、

無惨は

わざわざ人間と暮らし、人間のふりをして、人間社会に完全に溶け込んで生活をしているのだ。

なんとという徹底した擬態だ。

衝撃の事実には驚きながらも、野獣と炭治郎は仇敵の顔をしっかりと記憶に刻み込むべく、無惨の顔を見つめた。

炭治郎は怒りに満ち溢れた目で。

野獣は獲物を狙うかのような、野獣の眼光を思わせる目で。

二人はこれでもかと無惨の顔を睨みつけていた。

そして無惨もまた、少女を抱きかかえながら、目を見開きこちらを見つめていたのだった。

鬼の始祖、唯一人を鬼にする能力を持つ鬼、鬼舞辻無惨は人間の母娘と共に浅草の繁華街を歩いていった。

鬼である無惨は普段は貿易会社の社長として活動し、わざわざ人間の母娘を傍に置き、完全に普通の人間に擬態し、普段は人間として活動して隠れて生活していた。自身を狙う鬼狩りから身を隠すため、鬼の弱点である日光を避けるため、そしてとある目的を達成するためである。

他愛ない話をしながら娘を抱きかかえて歩く無惨。だが不意に、無惨は自身の背中に何か強い気配、視線のようなものを感じた。

何だ、気のせいだろうか。そう思い振り返ると、二人の人間が無惨を強く睨みつけていた。一人は額にあざのある、特徴的な花札のような耳飾りの少年。もう一人は日焼けした青年。少年は怒りをたたえた目と表情で、青年は野獣を思わせる眼光を光らせながらこちらを睨んでいる。

「……」

無惨は羽織から除く黒い服装や腰に差している刀、気配等からこの二人が自分の命を狙っている者……鬼狩り、鬼殺隊だと察した。思わず目を見開き、無惨も二人を睨み返す。心がぞわりとする。この人ごみの中でいきなり襲い掛かることはないだろうがすぐにこの場から離れる必要がある。

だが無惨の心が波立っている理由はそれだけではなかった。

(あの耳飾り……そしてあの野獣の眼光……あれは……)

無惨は少年お身に着けている花札と青年の眼光に見覚えがあった。

無惨の脳裏に遙か昔の記憶がフラッシュバックする。そう、あれは確か——

——なぜ命を踏みつけにする？何が楽しい？何が面白い？命を何だと思っているんだ——

——お前命なかなか絶たねえなあ？じゃあ俺がその命、絶たしてやるか！——  
脳裏に響く言葉。忌まわしい記憶。そう、あれは、あれは——

すぐに離れねばならない。そして彼らを始末せねばならない。

そう判断した無惨はついさつき、彼のそばを通りかかったばかりの青年の首めがけて、凄まじい速度で爪を突き立てた——



「グアアアアアッ!？」

「!!」

「フアッ!？」

野獣と炭治郎は驚嘆した。

睨みあつていた無惨が突然、人間離れた速度ですれ違った和装の青年の首に爪を突き立てたかと思うと、青年は突然人間とは思えない叫び声をあげ、変貌した。

体中に血管が浮き上がり、瞳の色が変わる。爪が人間とは思えないほど鋭くなる。間違はなくその特徴、気配は鬼のそれだった。

「グオオオオオッ!!」

「キヤアアアアア!？」

鬼と化した青年は突然隣にいた彼の妻と思しき女性の首に噛みついた。だからだとよだれをたらし、目が赤く変色している。

気付けば野獣も、炭治郎も禰豆子も青年めがけて駆け出していた。

野獣と炭治郎が青年を抑え、禰豆子が噛みつかれていた女性を庇う。

「あんだ・・・!」

禰豆子に庇われながら青年の妻と思しき女性が叫ぶ。幸い、傷自体は命にかかわるも

のではないようだが、突然の事態に混乱していることは明らかだった。

「暴れるなよ……暴れるなよ……」

人間とはかけ離れた、鬼の凄まじい力で暴れる青年を何とか二人掛かりで押さえながら、野獣は丸めた布を青年の口に押し込む。これ以上人をかまないよう、口枷にするためだ。

少し離れたところを見れば、青年に爪を突き立てた無惨と連れ添っていた母娘がいた。顔を青くする母に無惨は一言二言声をかけ一緒に離れていく。

間違いない。あの男は青年を鬼に変えた。あの男は間違はなく鬼舞辻無惨だ。

野獣も炭治郎も離れていく仇敵を睨みつける。心が悔しさと怒りで溢れていく。

何という奴だ。

この場から逃げるためだけに、何の罪もない無関係の一般人を躊躇なく鬼に変え巻き込むとは。

炭治郎が周囲の目も憚らず、怒りの形相で叫ぶ。

「鬼舞辻無惨!!俺はお前を逃がさない!!どこへ行くこうと!!」

無惨が怒りを込めた目でこちらを睨む。だが、状況が悪いと判断したのかそのまま群衆や野次馬から離れ路地裏へと姿を隠す。

「地獄の果てまで追いかけて!!必ずお前の首に刃を振るう!!絶対に、お前を許さない

!!

単なる怒りの叫びではない。必ず仇を討つという誓いの叫びだ。

「貴様ら何をしている！下がれ！」

「酔っ払いか!? 離れろ！」

「怪しい二人組が青年を押しさえつけているぞ！引きはがして取り押さえろ！」

野獣と炭治郎が鬼と化した青年を取り押さえっていると、こちらに向かう二人の足音と声が消えてきた。黒い帽子に制服、警察だ。青年を取り抑えている二人の姿を見るや、こちらにすぐさま駆け寄り二人を引きはがして拘束しようとした。

「警察だ!! (インパルス板倉) 大人しくしろ!!」

「すいやせん！お願いします！拘束具を持ってきてくれ！俺以外はこの人を抑えられない！」

「何が目的だ!! シモノか!? 金か!? …おい、こいつの顔、正気を失ってるぞ！」

「やめてくれ!! 俺はこの人に誰も殺させたくないんだ!! 邪魔をしないでくれ、お願いだから……！」

野獣と炭治郎を引きはがし拘束しようとする警官達。このままではさらに被害が拡大してしまう。

—— 惑血 視覚夢幻の香

「・・・ファツ!?!」

「なんだこの香りは・・・花?!」

突然、野獣たちの周囲に無数の花が咲き乱れ、花の紋様が視界を埋め尽くした。優雅な花の匂いが野獣たちの鼻腔をくすぐる。状況が状況でなければ絶景と言つて差し支えない光景。

「な、なんだ!?!この紋様は?!」

「周りが見えないぞ!!」

視界を塞がれ警官達が混乱する。

何かの攻撃かと身構える野獣と炭治郎の耳に、新たに女性の声が響いた。

「・・・あなたたちは、鬼となつた者にも「人」という言葉を使つてくださるのですね・・・  
そして、助けようとしている」

声のした方を見る。

幻想的な光景の中、紺色の赤い花柄の粋服姿の女性が現れる。続いて、グレーのシャツに袴姿の青年、180センチはあるだろう長身の黒い着物に身を包んだ整った顔立ちの男、そして白いシャツに黒いズボンに身を包み刀を持ったがっしりした体格の男が現れた。

突然現れた人々に困惑する野獣と炭治郎。炭治郎が匂いから現れた四人の人物の正

体を察した。刀を持った男を除けば、後の三人は……

野獣が刀を持つ男の顔を見て驚いた表情をする。何故なら……それは彼のよく知る人物だったからだ。

「葛城さん!?!なんでこんな所にいるんすか!?!」

野獣が目を見開き、驚いた様子で叫んだ。目線の先には刀を持った男もまた驚いた表情をしている。

「浩二!?!お前こそなんでこんなところにいるんだ!?!お前、鬼殺隊だったのか!?!」

「知り合いなのか?」

傍らに立つ黒衣着物姿の男が聞いた。葛城と呼ばれた男が頷く。

「ああ……稽古で知り合ってたな。安心しろ平野、こいつは信用できる」

「あの……あなた達は、いったい……?あなた達の匂いは……目的は……」  
混乱する炭治郎と野獣に女性がゆっくりと口を開く。

「……はい。私は……私達は鬼ですが。医者でもあり、あの男鬼舞辻を抹殺したい  
と思っている。……あなた達を手助けしましょう。さあ、早くこちらへ」

そう言って女性は野獣たちに手招きした。

鬼舞辻無惨は騒動の場から離れると、商談がある、警察にもさっきのことを言っておかないといけなからと言って母娘を車に乗せて送ると、自らは一人、暗い裏路地を歩いていた。

誰もいない裏道を歩いてみると、向こうから三人組の男が歩いてくる。それぞれ黒、赤、青の服に身を包み内二人、黒と赤の服の男たちは黒メガネをかけている。髪を長く伸ばし、ある者は白く染め、正直ガラが悪そうな男たちだった。

黒い男が無惨を指差す。

「あそこ」

「なんだよあれ？」

「おいちよつとあれどうする？」

男たちが青白い顔の無惨を見てにやついた。

「おいやつちまおうぜ！オラ！」

「やつちまうか？」

「やつちやいますか!？」

「やつちやいましょうよ！」

「その為の右手？あとその為の拳？金！暴力！S○X！金、暴力、S○X！」

要するに彼らは無惨にちよつかいを出し、乱暴を働こうとしていた。はたから見れば

無残は青白い、弱そうな人間に見えるため、金をせびつたりするのはちよいどいいと思つたのだろう。だが彼らは知らなかった。無惨が弱い人間どころか、全ての鬼の始祖であることを……

黒い男が無惨に声をかける。

「おい何やってんだ？ おい何やってんだおい？ 楽しそうだね？」

ほかの二人も混ざる。

「おいおい俺らも混ぜろよお前」

「おい楽しそうじゃねえかオラア」

そんな三人に無惨は釣れない様子で手を振る。

「申し訳ないが、急いでおりますので」

そういつて三人のそばを通り過ぎる無惨。

その態度にカチンときたのか黒い服に黒メガネの男が無惨の肩に手をかけいちやもんをつける。

「何だよ兄ちゃん、その態度はよお……おつ随分良い服着てんじゃくん。気に入らねえぜ、青白い顔しやがつてよお、今にも死にそうじゃねえか」

黒い男がそう言った次の瞬間。

ピキツという音と共に額に血管を浮き上がらせ無惨が振り向いたかと思うと、無惨は

目にも止まらぬ人間離れした勢いでその黒い男の顔を振り払う。

男の首があり得ない角度に回り、路地の壁にグシャツと嫌な音を立てて頭を打ち付け、ずるずると倒れた。黒メガネが折れ、鼻から勢いよく血が流れ、目がグルんと回っている。

「おい、てめえ、何しやがんだ！」

血相を変え、無惨に詰め寄る赤い服に黒メガネの男。もう一人の青い服に長髪の男が倒れた男に駆け寄り血相を変えて叫ぶ。

「お、おい……いつ死んでるぞ！い、息してねえ!!」

さらに惨劇は続く。

無惨が詰め寄って来た赤服の男を蹴り上げる。鬼の脚力で蹴り上げられた赤服の男は屋根を飛び越えんとする勢いで空中高く舞い上げられる。ごぼつと血を吐き出し、ビシャビシャと青服に降りかかる。そのまま赤服は勢いよく地面に落ち、どしやりと打ち付けられる。生死など確認する必要はない。

「何だよ……これ」

「私の顔色は悪く見えるか」

ガタガタと震え、失禁さえする青服の男。無惨は彼に近寄り顔をゆつくりと近づけるとそう口を開いた。



「私の顔は青白いか？ 病弱に見えるか？ 長く生きられないように見えるか？ 死にそうに見えるか？ ……違う、違う、違う、違う。私は限りなく完璧に近い生物だ」

そういつて無惨はゆっくりと震える男の額に人差し指を突き立てる。

次の瞬間。

ずぶり、と豆腐のように無惨の指が男の額にめり込んだ。

「私の血を大量に与え続けられるとどうなると思う？ 人間の体は変貌の速度に耐え切れず、細胞が壊れる」

「ギャアアアアアア!」

血を与えられた青服の男の体が、ドロドロに溶け、あつという間に崩壊していく。跡形もなく男が崩れ去り消えたのを確認すると、無惨はぱちんと指を鳴らした。

何もない空間から首を垂れた三人の男女の鬼が現れる。

「何なりとお申し付けを」

「耳に花札のような耳飾りをつけた鬼狩りの頸と、一緒にいる日焼けした鬼狩りの頸を持つて来い。 ……いいいな」

無惨は恐ろしいほど冷たい口調で命じた。

夜空では惨劇におびえるかのように月明かりが輝いていた。 ……

## 第12話 医師と店長

「ラーメン大事に作ったんだよなあ!?これえ!お前ら見ろよこれなあ!この無残な麺が伸び切った姿よおなあ!?お前、小麦から育ててたんだぞお!」

繁華街の騒動からしばらくして、野獣たちは少し離れた郊外でラーメン屋の屋台の店主に怒られていた。屋台には麺が伸び切り、スープがほとんど残っていないラーメンが三人分乗っている。

突然野獣たちの目の間に現れた鬼たちについていく前に、炭治郎が「あつ、そうだ(唐突)」とつい先ほどまでラーメン屋の屋台に立ち寄り注文していたことを思い出し、食事取つてないしこのままじゃ食い逃げになっちやう、やばいやばい・・となり、野獣たちは一旦屋台のところまで戻ることにしたのだ。案の定、店主は怒っていた。どうやら店主が一番起こっているのは金のことよりも、心を込めて作った料理を放つておいてたことのようなのだ。

「俺はな!俺が言いたいののはな、金じゃねえんだ!お前らが俺のラーメンを喰わずに放つておいた心づもりが許せねえのさ!」

「すいません、許してください何でもしますから!」

「オナシヤス、センセンシャル！」

怒る店主に深々と頭を下げる炭治郎と野獣。

「ん？今何でもするって言ったな？じゃあこの伸び切ったラーメン完食するんだよ、あくしろよ」

「やれば許していただけるんですか」

「おう、考えてやるよ（許すとは言つてない）」

即座に箸を手取る野獣と炭治郎。そのまま伸び切った麺を一気にすする。数分もたたないうちに、三人分のラーメンの椀は空になった。

「ごちそうさまでした！」

「おいしかったです、ありがとナス！」

「・・・分かればいいんだよ、分かれば！」

完食し、おいしかったと感謝の言葉を述べた野獣と炭治郎に店主も多少は納得した様子を見せた。

そのまま野獣と炭治郎が糲豆子を連れてその場を後にしようとする、目の前にシャツに袴姿の青年が立っていた。

「待っててくれたんですか？俺は匂いを辿れるのに・・・」

炭治郎の言葉に青年が鼻を鳴らす。どうやら野獣たちの存在が気に入らない様子だ。

「目くらましの術をかけている場所に居るんだ。辿れるものか。それより、鬼じやないかその女は。しかも醜女だ」

そう言つて禰豆子を指差す青年。

「……しこめ？醜い女つてことだよな？」

「誰のことなんですかね……？」

突然の青年の罵倒の言葉に一瞬考えこむ野獣と炭治郎だったがすぐに意味を理解し、次の瞬間には二人そろつて激高した。

「ふざけんな！（声だけ迫真）どう見たつて美人だろ、いい加減にしろ！もう許さねえからなあ〜！」

「しこめ←だと？ふざけんじゃねえよオラア!!美人だろお!?よく見てみろよ、町でも評判の美人だったぞ禰豆子は！」

「行くぞ」

だが二人の抗議の声に少しも反応することなく青年はそのまま振り返る歩き出す。珠代たちのところへ連れて行くのだろう。

「いや、行くけれども、醜女は違うだろう、絶対！もう少し明るいところで見てくれ！」  
とりあえず着いていきながらなおも抗議の声を上げる炭治郎達。そのまま四人はあの和服の女たちの居場所を目指して騒がしく街中を歩くのだった。

夜道を三人の鬼が歩いている。一人はなぜか裸の大柄な少年（大嘘）の鬼で、もう一人は毬を持った着物姿の少女の鬼。最後の少年の鬼は着物姿に首に数珠を巻き、その手のひらには矢印の入った目があり、それが彼が異形の存在であることを示していた。着物姿の少年の鬼は何かを辿るように地に伏せながら歩いている。

「見えるかえ？」

毬を跳ねながら問いかける少女。

地を這いながら鬼が答える。

「見える、見えるぞ、足跡が……これじゃこれじゃ。あちらをぐるりと大回りして四人になっておる。何か大きな箱も持つておる……あと臭い匂いも」

「どうやって殺そうかのう、うふふふ、力がみなぎる。今しがたあのお方に血を分けていただいたからじゃ」

「早く行つて殺さなきや」

けらけらと笑いながら恐ろしいことを口走る少女鬼。裸の少年（大嘘）も氣狂いのように笑いながら言う。

「それはもう残酷に殺してやろうぞ……それはそうと、お前服ぐらい着ろ。この氣狂

いめ。ひでしね」

「鬼舞辻様の配下としての自覚はないのか、鬼の屑じゃな．．．ひでしね」

これから待つていいるであろう愉悅の時を心待ちにする一方で、裸の少年（大嘘）の鬼を罵倒する二人の鬼。

いずれにせよ、脅威は確かに迫っていた．．．

「ただいま戻りました、珠代様」

「おかえりなさい」

「帰って来たか」

「遅かったじゃねえか、浩二」

郊外に立つ一軒家の建物の中に入ると、中にはあの時の和服姿の女や黒衣着物の男たちが座って待つていた。女の方は医者が切るような白い割烹着に身を包んでいる。刀を持つた男もいる。傍らにはさきほど鬼にされた青年の妻がベッドの中で静かに眠つていた。和服姿の女が静かに眠る彼女の頭をさする。

「この方は大丈夫ですよ．．．残念ながら、ご主人の方は気の毒ですが拘束して地下牢に入れていますが」

「あの……あなた達は一体、何者なんですか？鬼のようですが……その人も、浩二さんのことを知っているみたいですよ」

炭治郎の疑問に女性が頷いた。

「まだ名乗っていませんでしたね……私は珠世と申します。その子は愈史郎。そしてこちらが……」

「平野という。そして彼が葛城だ。……君が田所浩二君だな。彼から話は聞いていたよ」

珠代が紹介する前に黒衣着物姿の男が平野と自らの名を名乗った。傍らの刀を持つ男は葛城というらしい。平野の言葉から察するに、彼は野獣のことを知っていたようだった。野獣が頷く。

「あつ、はい。田所浩二っていいです。オツス、お願いしまーす……ていうか、なんで葛城さんがこんな所にいるんですか？その平野さんは俺のこと知ってるみたいだし、鬼はいるし……これもう（状況が）分かんねえな……」

「俺だって信じられねえよ。お前本当に浩二なのか？」

野獣の言葉に葛城も疑問を呈す。

平野が口を開いた。

「……皆突然のことで混乱しているだろう。ここはまず私たちが誰なのか、何をして

いるのか、少しずつ順番に説明しよう」

こうして珠代や愈史郎、平野や葛城が何者なのか、何をしていて何が目的なのか等々について語った。

珠代と愈史郎、平野の三人は鬼であること。また葛城は人間であること。珠代たちは普段は医師として活動しており、また彼女たちは鬼だが人間を食べることは決してなく、人の血液を少量飲むだけで事足りること。その血は普段の医療活動の際金銭の余裕のない者から輸血と称して支障がない程度に血を購入することで得ていること。平野と葛城はこの時代の人間ではなく○羽の時代からタイムスリップしてきた人間であり、もともと知人であること、それから葛城と野獣もまた知り合いで稽古や指導をしてもらう仲であること等々……

「はえ、浩二さんと葛城さんって知り合いだったんですか？」

「うん。葛城さんは、葛城流っていう剣術の師範をやっている剣道の達人でさ。ついでに言うと、俺たち迫真空手部の秋吉師匠の友人なんだ。それで、時々秋吉師匠が葛城さん連れてきて異種格闘の訓練をしたり、個人指導をしてもらったり、相談に乗ってもらったりしてさ……その縁で俺と葛城さんは知り合いなんだ。でもまさか、葛城さんもこの時代にタイムスリップしているなんてなあ……」

「俺も驚いたよ、まさかお前もタイムスリップして鬼殺隊として活動してるなんて



な・・・まさかとは思うが他の連中もタイムスリップしたりしてないだろうか？」

「はい。木村に三浦・・・部活の仲間たちもタイムスリップして隊士として活動していますし。秋吉師匠も育手として活動してますよ」

「何だつて!?!秋吉の奴もいるのか?」

野獣の言葉に驚く葛城。同じ武術家として深い仲だった葛城と秋吉だったが、親友や、指導相手が自分と同じ世界にいるとは驚きだった。

「おい、秋吉の奴は元気にやってるのか?狭霧山で行方不明になってたけどよ・・・鬼に喰われたりしてねえだろうな」

「大丈夫つすよ、元気にやってきました。第一、秋吉師匠がクツソ強いのは葛城さんもよく知ってるでしょ?」

「おお、そうか・・・早く会いてえなあ・・・」

「今度機会があつたら俺の方から伝えますよ。・・・あつ、そうだ(唐突)、ひではないんすか?確か一緒にいたはずですけど・・・」

野獣の言うひで、とは葛城と一緒に暮らしている少年のことである。このひでという名の少年は訳あつて葛城の養子となり彼と一緒に暮らしていた。正直野獣は彼とはあまり面識がなく、せいぜい生意気なガキンチョ、ぐらいの認識しか持つていなかったが、葛城と一緒に暮らしていた以上彼もここにいるのか少し気になったのだ。

「いや、実を言うとなひでは……あいつはいないんだ。俺がこの時代に來るつい最近に行方不明になっちまってな」

「そうなんすか？」

「ああ……正直、手掛かりが全くなくてな。心配するばつかだよ」

ため息をつき、心配そうな表情で首を振る葛城。彼によれば野獸たちがタイムスリップした頃、ひでが帰宅途中で行方不明になり、以來消息不明、まったく手掛かりなしだという。

「それで……葛城さんもタイムスリップしてこの時代に來たみたいですけど、どうしてこんなところにいるんです？」

「それについては私が説明しよう」

野獸の疑問に平野が口を開き、葛城と、そして平野がこの時代にタイムスリップし、珠代たちと出会った経緯について語った。

「あれは数年前のことだった……」

平野の説明によればこうだ。

もともと友人関係だった平野と葛城はある日の晩一緒に飲みに行った帰り、突然赤い服を着た老人が乗る自転車に二人して一緒に突き飛ばされた。気づいたら見知らぬ街並みの中におり、しばらくして彼らはそこが大正時代であり、自分たちがタイムスリッ

プしたことに気づいた。途方に暮れ夜道をさまよっていると突然、異形の存在——鬼に襲われた。葛城は所持していた刀で応戦し、持ち前の剣技で何とか朝までしのぎ鬼を撃退したが平野は瀕死の重傷を負った——

「・・・本来ならそのまま私は死に、この場にいるはずではなかった。だが幸運にも珠代——彼女と出会い治療を受けることが出来た」

「はい。ですが傷が深く、駆け付けた時には彼はすでに虫の音でいつ死んでもおかしくない状態でした。そこで私は・・・彼を、鬼にしたのです」

「フアッ!?!」

「鬼にしたって・・・あなたがですか!?!え、でも・・・」

鬼にした。

その言葉に炭治郎と野獣の二人は驚愕する。鱗滝や秋吉の言葉によれば人を鬼にできる能力を持つのはただ一人、あの浅草の繁華街で出会った仇敵、鬼舞辻無惨ただ一人のみならず。だが彼女は平野を鬼にしたと言った。

「驚くのも無理はありませんね。鬼舞辻以外は鬼を増やすことができないとされていますから・・・それは概ね正しいです。二百年以上かかって鬼にできたのは平野と愈史郎の二人だけですから」

「二百年以上かかって鬼にできたのは二人って・・・珠代さんは何歳ですか!?!」

「女性に歳を聞くな、無礼者!!」

炭治郎の言葉に愈史郎が怒り、殴りかかる。愈史郎を珠世が叱る。

「よしなさい、愈史郎!なぜ暴力をふるうの」

「はい、すみません!!(怒った顔も美しいぞ、珠代様は……)」

「まあ、とにかく……こうして彼女の手によつて私は鬼になり生き永らえ、以来、私たちは彼女と行動を共にしているというわけだ」

平野が最後に締めくくる。

話をまとめれば平野と葛城がタイムスリップした際、二人が鬼に襲われ平野が重傷を負ったこと、死にかけて平野を珠世が鬼にすることで救ったこと。以来、平野と葛城は珠世たちと活動を共にしていること。そして、鬼である珠世は長い年月をかけ平野と愈史郎の二人だけとはいえ、鬼舞辻以外で人間を鬼にし増やすことが出来るということになる。

珠代が口を開く。

「二つ、誤解をしないでほしいのですが……私は鬼を増やそうとしているわけではありません。不治の病や平野さんのように重傷を負い、余命幾許もない、そういった人しかその処置はしません。その時は必ず本人に鬼となつても生き永らえたいか尋ねてからします」

「勿論私も同意したうえでそうしてもらった。何しろ状況が状況だったからな……」  
「そうですか……」

二人の話を聞きながら炭治郎は彼女たちの匂いを嗅いだ。

珠代からも、平野からも、嘘の匂いは全くしない。つまり彼らの言っていることは事実ということになる。それに野獣の話によれば彼らと行動を共にしている人間である葛城は彼と深い仲だという。

もとより人を疑うということをおあまりしない、お人好しの性根である炭治郎である。炭治郎は彼らを信用できると判断した。もちろんそれは野獣も同じだった。

話を聞くうちに野獣が不意に思い出したように言った。

「……ん？ 待てよ、人を鬼にしたってことは……その逆はどうなんですかね？」

「……そうだ、珠世さん……実は一つ聞きたいことがあるんです。……鬼になつてしまった人を人に戻す方法がありますか……？」

野獣の言葉に炭治郎も新たに口を開く。

鬼を、人間に戻すことの是非。すなわち禰豆子を人間に戻すことが出来るのか否かの問題であり、炭治郎にとっては最も重要な問題の一つだった。それは敵討ちと並び、野獣と炭治郎が鬼狩りの旅に出ることの目的の一つだからだ。

目の前の珠世はわずか二名とはいえ鬼舞辻以外で唯一人間を鬼にした鬼である。そ

の逆、人間に戻す方法でなくとも手掛かりを知っている可能性は高い。

「鬼を人に戻す方法は．．．あります」

はたして炭治郎の問いに対する彼女の答えは、肯定であった。

「!!救いはあるんですか!?!」

「お、教えてください!!」

「寄ろうとするな、珠世様に!」

珠代の答えに思わず身を乗り出す野獣と炭治郎。

その二人を愈史郎が投げ飛ばす。

「愈史郎!次暴力をふるったら許しませんよ」

「手前何してんだこの野郎!」

愈史郎を叱る珠世。

葛城も刀を手にして愈史郎を睨む。

「投げたのです、珠世様。暴力ではありません」

「変わらないでしょう。どちらも駄目です」

愈史郎をなだめ、珠世は再び炭治郎達に向き直り口を開く。

「どんな傷にも病にも必ず薬や治療法があります。ただ、今の時点では鬼を人に戻すことはできない」

「・・・」

珠世の言葉にわずかに落胆する炭治郎。鬼を人に戻す方法がそう簡単に見つかるものでも、あつたとしても簡単なものではないことも分かつてはいたが、やはり出来ない、という事実は炭治郎達にとっては残念なものであつた。しかし、彼女は「今の時点では」という前置きを置いたし、その前に方法があると断言した。可能性や希望は十分あるのだ。

「私たちはその治療法を確立させたいと思つています。そして・・・あの男、鬼舞辻を抹殺したいと」

「そもそも私たちはそのために動いている。鬼を人間に戻す方法を確立することと、鬼舞辻無惨を倒すこと。この二つの目的のために」

珠世の言葉を再び平野が継いだ。

「ここだけの話、私たちはこの四人だけで動いているわけではない。この時代にきて以降、私は様々な事業を起こし、多角経営を行っている。バーや病院、旅館・・・生活のためでもあるが、より社会や人と接する機会や人脈等を広げ、鬼舞辻や鬼達、鬼を人間に戻す方法を探るためだ」

平野によれば彼は医療活動等を行う珠世とは別に、様々な事業の多角経営を通じて様々な社会の人間に接したり、人脈を広げることで鬼に関する情報を集めたり費用を調

達するなどして、情報面や財政面で珠代たちの活動を支えているとのことだった。それにしても大きく異なる時代にタイムスリップしながらも、事業の多角経営に乗り出し軌道に乗せるとは、この平野という男は相当商才があるようだ。

「多角経営って・・・平野さん、すごいですね・・・」

平野の言葉に感心する野獸。珠世も頷く。

「もともと商才があつたのか、すぐに事業は軌道に乗って・・・おかげで生活は安定しています」

「まあ、事業を起こしたり広げるのに色々苦勞をしたのだが・・・それは今は関係ないな。とにかく、今の私たちは鬼舞辻や鬼に関する情報を集めるために様々な活動をしているというわけだ」

「それで・・・今のところ、何か成果はあつたんですか?」

炭治郎の言葉に平野は首を横に振った。

「・・・残念ながら、鬼舞辻に関して今のところめばしい情報は得られていない。何しろ、相手は千年以上も生きている鬼の始祖だ。人間社会に相当溶け込んでいることだろう。対してこっちは活動を始めて数年・・・恥ずかしながら、まだ大きな情報は得られていない。・・・炭治郎君、浩二君、君たちも鬼舞辻無惨の行方を追っているんだからね?」



「はい」

領く野獸と炭治郎。鬼舞辻無慘を見つけ仇を討ち、禰豆子を人間に戻す。それが二人の目的だ。同じく鬼舞辻の抹殺を考えている珠代や平野たちと目的は同じといえる。

「君たちと私たちは目的を同じにしている・・・協力を、お願いできないだろうか」  
「協力・・・具体的に何をすれば？」

炭治郎の問いに珠世が答える。

「あなた達にお願いしたいことは二つです。一つはあなたの妹さんの血を調べさせていただくこと。そしてもう一つは、できる限り鬼舞辻の血が濃い鬼から血液を採取してきてほしいということです」

そう言つて珠世は禰豆子の方を見た。

箱から出てきた禰豆子は床の上に転がり、天井を見たり、ゴロゴロ床を転がりまわつたりしていた。彼女が鬼でさえなければ、よくある微笑ましい、無邪気な光景だ。

「禰豆子さんは今、極めて稀で特殊な状態です。二年間、眠り続けたとのお話でしたが、おそらくはその際体に変化している。通常それほど長い間人の血肉や獣の肉を口にできなければ、まず間違いなく凶暴化します」

確かに珠世の言うとおりだった。鬼は本来、人を喰らう存在。禰豆子もまた鬼である以上例に漏れず人の血肉を欲するはずであり、本来であれば禰豆子が鬼となつたあの

日、野獸と炭治郎は餌として彼女に貪り食われていたはずだった。だが彼女は彼らを喰らうことはなくむしろ富岡から二人を守るしぐさをし、沼鬼と戦った時には人間を守るためにその力をふるった。人を喰らうどころか、人と行動を共にし、時には守る。禰豆子は鬼としては極めて異例な存在といえる。

「しかし驚くべきことに禰豆子さんにはその症状がない。この奇跡は今後の鍵になるでしょう」

珠世の言うとおりに、禰豆子の存在は奇跡といえた。よくここまで来てくれた。炭治郎はそつと床に転がる禰豆子の額に手を触れた。

「もう一つのお願いは……非常に過酷なものになります。鬼舞辻の血が濃い鬼とはすなわち、鬼舞辻により近い強さを持つ鬼ということですね。そのような鬼から血を採るのは容易ではありません。場合によっては、命を落とすことにもなるでしょう……それでもあなた達はこの願いを聞いてくださいますか？」

「命にかかわることだ、無理にとは言わない。どうしようと君たちの自由だ」

「浩二……お前ら、無理することはねえぞ。俺たちの勝手な頼みだからな」

「……やりますよ、俺は」

「俺もやりますよ。いや、やらないといけないってはっきり分かんかね」

珠代たちの言葉に炭治郎も野獸もはつきりと肯定の言葉を返し、頷いた。

禰豆子の頭をなでながら炭治郎は言う。

「それ以外に道がなければ、俺はやりませう。珠世さんたちがたくさんの鬼の血を調べて薬を作ってくれるなら。何があっても、必ず禰豆子を守るって決めたんです。それに、薬が出来れば禰豆子だけじゃなくもっとたくさんの人が助かりますよね？」

「そうだよ（肯定）。俺たちは守るために鬼狩りになったんだ、禰豆子やたくさんの人を救えるならこれぐらいするのは当たり前前つてはつきり分かんかね」

「あなた達……」

なお家族や人々を思いやり、覚悟を見せる野獣たちの言葉にふつと微笑む珠世。その笑顔に一瞬炭治郎達が見惚れ、それを愈史郎がギロツと睨んだその時だった。

「……!?!まじい！伏せろ！」

「バン！バン！バン！バン！」（大破）

愈史郎が何かの気配に気づいたかのような表情をし叫んだ瞬間、何かが壁を突き破り、部屋の中を跳ねまわった。その速度と威力は凄まじく、あつという間に壁や床、天井を跳ねまわり、穴や陥没を生じさせ破壊していく。

咄嗟に愈史郎が珠代を庇い、葛城と平野が身構え、野獣と炭治郎が禰豆子を庇う。

破壊の嵐が終わった時、てん、と何かが床に跳ね、転がる音がした。見れば毬が転がっていた。これが部屋に突っ込んできて破壊して回ったのだ。

一体なんだ。何が起こった、誰がこんなことを。

野獣たちは毬で突き破られ外の庭とつながる大きな穴が開いた壁を向く。その穴の向こう、庭に何者かの存在を見やる。

そこには毬を持った着物姿の少女に裸の少年（大嘘）がいた。

「キャハハッ、見つけた見つけた」

「ワッオ！大人の鬼狩りはじめて見たあ〜！」

野獣たちの姿を見てはしゃぐ二人。雰囲気や匂いなどからすぐに分かった。これは……鬼だ

この少女……否、鬼達が、この毬を使って野獣たちを襲撃し部屋を破壊したのだ。おそらく、鬼舞辻の手下だろう。何らかの方法でこの隠れ家を見つけ襲撃したのだ。

「お、おい……嘘だろ?」

葛城が少年の姿を見て驚く。なぜなら、それは彼の知っている、そして探している人物だったからだ。

「ひで……なんでひでがここに居るんだ!? 鬼になっちまったのか!」

そう……この鬼の少年こそ、行方不明になっていた葛城の養子、家族……ひでだった。長い間行方知れずになっていた人物との再会。しかしそれは、感動どころか全く最悪の形で起こった。

「さあ、遊び続けよう、朝になるまで命尽きるまで！」  
「ぼくもしゆるく」

野獣や葛城たちの動揺を意に介さず、少年少女の鬼はさらに攻撃を仕掛けようとする。

何にせよ躊躇したりしている暇はない。

野獣は日輪刀を抜刀し構えた。

## 第13話 鬼と平野の血鬼術

突如として襲つてきた鬼舞辻の手下と思しき鬼達。

日輪刀を構える野獣と炭治郎はそれぞれ彼らに今までの鬼と明らかに違う気配や匂いを感じていた。肺の中に入ってくる匂いと空気は重く、感じられる気配が大きな身の危険を伝える。

彼らは強い。それも、今まで対峙してきた鬼より遥かに、桁違いに。その場にいる全員がそう悟った。

今対峙している鬼二人の内一人は毬を使って、今いる家屋をぼろぼろに破壊しつつした。到底あり得る所業ではない、いわゆる血鬼術というものだろう。

その隣、なぜか裸の少年の鬼もただならぬ気配を感じる。この鬼もおそらく格別の強さを持ち血鬼術を扱うのだろう。

そして何より。

「ひで……ひでじゃねえか!」

野獣たちと共に、珠世達を守らんと刀を構えていた葛城が驚愕の表情で言う。その視線の先にいるのは、少年の鬼。葛城にはその鬼に見覚えがあった。そう、その少年の鬼

こそは葛城が探していた行方不明の養子、ひでだった。

野獣も驚いた表情で葛城とひでを交互に見る。

「え!?あの鬼がひでなんすか!」

「・・・間違いねえ。行方知れずになってた俺の養子だ・・・ひでだ。なんで、なんで鬼になつてんだよ・・・!」

葛城が声も、そして体も震わせて言う。そこに怒りや悲しみ、動揺があることは鼻の利く炭治郎でなくともその場にいる全員が容易に察せられた。

葛城のみならず野獣たちも瞬時に理解していた。これが最悪の再会であることを。行方知れずになっていった養子と、家族と再会した。だが肝心の相手は人を喰らう存在である鬼になり果てていた。それはつまり、家族が敵であり、殺さねばならないことを意味していた。

頭では分かっているけど、受け入れられるはずがない。当の本人である葛城は特にそうだろう。葛城が叫ぶ。

「おい、ひで!ぎげんじやねえよオイ!誰が鬼になっていいつつったオイオラア!なんで鬼になつてんだよお!」

だが肝心の少年鬼・・・もとい、ひでは首を傾げ小馬鹿にしたような様子を見せる。

「ん〜?誰だこのおじさん、急に大声出して・・・この人おかしい」

「……くそつ！俺のこと忘れちまったのか……！」

鬼にされれば人間としての理性は勿論のこと、今までの人間だったころの記憶も忘れ。ひでももちろん例外ではなかった。もはや呼びかけるだけ無駄だろう。

「くそつ、やらなきやなんねえのか……！」

完全に葛城のことなど忘れている。

そうこうしている間にも少女の鬼が再び手にしていた毬を投げつけた。鬼の腕力で投擲された毬は砲弾を思わせる速度と威力で飛翔、ただでさえ破壊しつくされている家屋内をさらに粉碎しながら跳ね回っていく。ただ跳ね回り飛ぶだけでなく、物理的にあり得ない軌道を描き、獲物を追うように飛ぶ。そして、珠世をかばっていた愈史郎の頭を直撃し、丸ごと消し飛ばす。

「愈史郎さん！」

「キャハハツ、一人殺した」

炭治郎が叫び、鬼が笑う。同時に珠世もろとも首を失った愈史郎の体が倒れる。

「彌豆子！奥で眠っている女の人を外の安全な所へ運んでくれ！浩二さん、葛城さん、珠世さんたちのことを……」

「馬鹿野郎、俺も一緒に戦うに決まってるだろ！炭治郎、お前はあの少女の鬼を頼んだ！俺と葛城さんはひでのほうをやる！」



「おかのした!」

野獣の言葉に炭治郎がうなずいた。

一方の葛城は鬼とはいえ自分の養子、家族を相手にすることにまだ戸惑いを感じているようだった。刀を握る手が震えている。

「くそつやるしかねえのか・・・!」

「葛城さん・・・今は戦うしかないっすよ。でなきや他の皆がやられてしまう」

「分かってるよ。でもよ・・・」

「どうしてもっていうんなら、気絶させて拘束しましょう」

「・・・分かった」

野獣の言葉に葛城も肚を決めた。

「野獣、俺の刀は普通の刀だ。鬼にダメージを与えることはできねえ。俺は援護に回るから、お前が決定打を与えてくれ」

「分かりました・・・オッス、お願いしまーす!」

刀を構え、鬼達と対峙する野獣と炭治郎、葛城。

対する鬼たちは、野獣と炭治郎の姿を確認して目を細める。

「耳に飾りの鬼狩りに、日焼けした鬼狩りはお前らじゃのう」

「どうやら野獣と炭治郎が狙いのようだ。」

彌豆子や珠世たちを巻き込んで危害を与えるわけにはいかない。

炭治郎が叫ぶ。

「珠世さん、身を隠せる場所まで下がってください！」

炭治郎の言葉に珠世と平野は首を横に振った。

「炭治郎さん、私たちのことは気にせず戦ってください！」

「私たちのことを守る必要はない……鬼だからな」

少女鬼が炭治郎に向けて再び毬を投擲した。

あの毬は物理的にあり得ない軌道を描き、追うように飛んでくる。そしてあたりを跳ね回り破壊の限りを尽くす。避けたところでまず無駄だろう。ならば――

炭治郎は全く臆することなく真正面から毬のほうへ突っ込んだ。

水の呼吸、漆ノ型、雫波紋突き・曲――

水の呼吸、その拾ノ型の中で最速の突き技。

その名の通り、静かな水面に波面を広げるように素早く、斜めから曲線で毬を刺し貫く。瞬間、毬の動きがぴたりと止まる。これで毬の威力が和らいだ。

やった――

そう思った次の瞬間。

「!？」

団子のように串刺しにされたはずの毬がぶるぶる震えたと思つたら突然日輪刀ごと炭治郎の頭に勢いよくぶつかつてきた。

馬鹿な、なぜ動いた？ 投擲された時も愈史郎に当たつた時も、不自然な曲がり方をした。特別な投げ方や回り方をしているわけではないのに。これがあの少女鬼の血鬼術だということか。

破壊された屋内では毬によつて首をなくした愈史郎を珠世と平野が抱きかかえていた。

普通の人間ならもう死んでいる。だが、彼らは鬼だ。メキメキと音を立てて、骨が、血管が生え、先ほどまで存在した頭部を再現するように新たな血肉が生えていく。

頭の半分、口の部分まで再生したところで唇が動き、愈史郎が叫んだ。

「珠世様!! 俺は言いましたよね?! 鬼狩りに関わるのは止めましょうと最初から! 俺、目隠し」の術も完璧ではないんだ。貴女もそれは分かっていますよね! 建物や人の気配や匂いを消せるが存在自体を消せるわけじゃないんだ、人数が増えるほど痕跡が残り鬼舞辻に見つかる確率も上がる!」

その言葉に炭治郎は鬼がこれだけ近くに来ていながら攻撃されるまで匂いがしなかったのを思い出した。愈史郎の血鬼術だったのだ。

愈史郎がさらに怒りを込めた声で叫ぶ。

「貴女と二人で過ごす時を邪魔するものが俺は嫌いだ、大嫌いだ!!許せない!」

「キャハハツ何か言うておる、面白いのう楽しいのう。十二鬼月である私に殺されることを光栄に思うがいい!」

「十二鬼月?」

「鬼舞辻直属の配下です!」

少女鬼の言葉に炭治郎が疑問の声を上げる。

疑問に答えたのは珠世だった。

「遊び続けよう、朝になるまで、命尽きるまで!!」

少女の鬼が羽織を脱ぐ。そして腕をメキメキと新たに脇の下から左右二本ずつ生やす。合計六本になった腕から一斉に六つの毬を放つ。ただでさえ、一つだけでもすさまじい威力の毬の嵐が炭治郎たちを襲った――

炭治郎が少女の鬼と戦っている一方で、野獣と葛城も鬼と化したひでと戦いを繰り広げていた。そして、苦戦していた。まず、相手が葛城の家族故一旦拘束しようとしているのと、葛城の持っている刀が日輪刀ではないこと、そしてなによりひでの使う血鬼術が原因だった。

結論から言うと、ひでの使う血鬼術は「分裂」あるいは「分身」だった。よくドラマやアニメなどフィクションの忍者が使う分身の術のように自らの分身を何体、何十体も出現させ一斉に襲い掛かるのだ。自らの指をかみ切り血を出したかと思うと、あつという間に何十体にも分裂・分身し一斉に襲い掛かってきたのだ。想像してみてもほしい。何十体もの裸の少年（大嘘）が暴れまわり襲い掛かってくる光景を。おぞましいというほかない。

「動くと当たらないだろ？動くも当たらないだろオ!？」

葛城が刀を振り回しながら叫ぶ。葛城は葛城流という剣術の指導者だ。当然その腕前は並大抵のものではない。むしろ、常人どころか一般の有段者よりも遥かに強力で高度な、常人離れた威力と技を扱う実力の持ち主である。

だがその刀の切っ先がひでになかなか当たらない。あたってもかすり傷程度だ。それは野獣も同じだった。何しろ、分裂した影響かとにかく素早いのだ。それも、常人を遥かに上回る体力や身体能力を持つ鬼殺隊士や葛城が対応できないほどの速度で動くのだ。それ故日輪刀や刀を当てることできない。攻撃が当たっても、致命傷にならない。何とか日輪刀で首を切り落としても、すぐに再生してしまう。普通の鬼なら即死するはずなのに。分裂することで、受けるダメージを極最小に抑えているのだ。

こちらが攻めあぐねている間にひでは四方八方から野獣と葛城に襲い掛かる。攻撃

力自体はそれほど大きくないが、相手の速度と耐久力が大きく、対応しきれず決定打を与えられない。

このままではダメージや疲労が蓄積し、捌り殺しにされるか、あるいはその隙をついて一転攻勢されてしまう。

ひでの攻撃を避けても、別のひでが襲い掛かってくる。ある時は避けてもまるで動きが分かっているかのように、追うようにこちらに迫ってくる。それも一度に複数で。

「いくら何でも相手が多スギイ！しかも攻撃が当たっても決定打にならないし……どうすりゃいいんだよ……！」

一斉に襲い掛かるひでたちに対し、野獣はそう叫ぶほかなかった。

炭治郎と野獣たちがそれぞれの鬼を相手にし、苦戦している中鬼である珠世達は何もしていない・あるいはしようとしなかったわけではなかった。だが、こうしている間にも家屋を複数の毬が暴力的な速さで飛び交い、なかなか身動きが取れずにいた。また、珠世の術を使えば炭治郎や野獣にもかかってしまう。

こうしている間にも炭治郎は複数迫る、その上軌道を変える毬の攻撃を避けるのに精いっぱい、野獣たちも分身し一斉攻撃を仕掛けるひでの大群に防御するので手いっば

いだった。

すでに攻撃を受け血まみれの愈史郎が野獣と炭治郎に叫んだ。

「おい、間抜けの鬼狩り共！「矢印」を見れば方向が分かるんだよ！矢印を避けるんだ！そうしたら毬女とその露出魔のクソガキの首くらい切れるだろう！俺の「視覚」をお前らに貸してやる！」

「!?」

「フアツ!」

その言葉と共に愈史郎が何かの紙のようなものをそれぞれ野獣と炭治郎、葛城の頭に向かつて投げつける。紙は額ほどの大きさで何か呪術で使うかのような不思議な模様が描かれている。それぞれの紙にびたりと張り付く紙。瞬間、野獣や炭治郎たちの視界に変化が現れる。それまで見えなかった、空中や地面を走る無数の黒い矢印が現れたのだ。よくよく見れば毬やひでの動きはその無数の黒い矢印に乗り、それに導かれるかのように動いている。この矢印で、毬やひでの軌道を動かし、誘導していたのだ。

ネタが分かれば先ほどよりはある程度楽に戦える。

そしてひでと少女鬼の二人だと思っていた鬼が、実は三人にすることも分かった。

炭治郎が叫ぶ。

「愈史郎さん、ありがとう！俺にも矢印が見えました！禰豆子！木だ！あそこの木の

上だ！」

禰豆子が頷き、庭の隅の木の上まで一気にかけ跳躍。踵落としを加える。と、同時に禰豆子の攻撃をくらい、枝や葉の間から首に数珠をまいた着物姿の少年鬼が現れた。この鬼があの木の中に潜みながら、矢印を操っていたのだ。

動いたのは愈史郎だけではなかった。

「あの矢印の鬼は浩二君と葛城に任せた！あの毬の鬼は私たちがひきつける！」

平野はそう言うと、服の内側から人差し指ほどの大きさの小瓶を何本も取り出した。よくよく見れば、中には赤いもの——血が入っている。そのまま小瓶をひでや鬼たちにそれぞれ投擲。パリン、と瓶の割れる音とともに彼らの服や肌、地面に複数の血の染みを作る。

「浩二君、炭治郎君！あの鬼たちはおそらく鬼舞辻に近い！奴らから血を取ってくれ！」

「分かりました！」

「かしこまり！」

平野の呼びかけに炭治郎も野獣もうなずいた。

少しでも早く薬を完成させると、禰豆子を人間に戻すと固く誓ったのだ。そのためにはどんな鬼とも戦い、勝って見せる。



野獸は矢印の鬼へ、炭治郎や禰豆子、葛城は毬の鬼とひでへと突撃していった――

矢印を操り、それを通してひでや毬を誘導していた鬼――矢琶葉は不機嫌だった。禰豆子に蹴り落された、隠れていたのがばれた、というのもあるが何より不機嫌だったのは突然黒い着物を着た男の鬼に小瓶を投げつけられ服に血の染みや汚れができたことだった。この矢琶葉という鬼はどうも潔癖症というか神経質なところがあり、ここに来る道中も服が土で汚れた、汚れていないかなどと気にしていた。

服をはたいている間にも目の前には日焼けした鬼狩りの男が迫ってくる。だがどうということはない、前述したように彼の血鬼術は矢印を操ること。これによって足跡をたどる、人や物の動きを操る、といったことができる。応用の仕方によつては人体をあり得ない方向に動かしねじ切つたり損傷させることができる。たかが鬼狩り一人来たところでどうということはない。

矢印を操るために手をかざす。その手のひらには矢印の入った目玉がある。

「まったく、なんとというクツソ汚い男じゃ。濃の傍に寄るな・・・？」  
そこで彼は首を傾げた。

どうにも、体がよく言うことを聞かない気がしたのだ。動きが遅い気がする。術の利

きも少し悪くなったというか、発動が遅くなった気がする。

「うわっ」

「・・・!?!」

地面を走る矢印が突進してきた鬼狩りの男——野獣の足元に到達し、彼を転ばし後ろに投げ飛ばした。更に野獣に攻撃を加えるべく術を発動しようとしたところで矢琶葉は明確な異変に気付いた。

体の動きが、そして矢印の動きや利きが遅くなっている。体が重い。術が思うように操れない、利が悪い。まるで何かに体を拘束されているかのように——

そこで彼は先ほど投げつけられた血の入った小瓶がその異変の原因だと気づいた。おそらくあの黒い着物姿の鬼の血鬼術だろう。相手も鬼である以上、血鬼術を使える可能性を頭に入れるべきだった。

ぬかったか——そう思うと同時に体勢を立て直した野獣が再びこちらに向かってくる。

幸い、術自体は、矢印を操ること自体はできる。一本の矢印の利が悪いのならば、複数で——

そう考え矢琶葉は一気に矢印を地面に、空中に出現させ野獣に向けた——

野獸は矢印の鬼、矢琶葉の首を切らんと突撃する。真正面から無数の矢印が空中を、地面を伝つて向かつてくる。初めて視認した時よりどういふわけか勢いが無いが、それでも十分脅威だった。まず数が多いし、先ほどより減つたとはいへ速さがある。そして、矢印は野獸に当たるまで消えないし、刀でも切れない。毬やひでの動きを操り誘導していたことを考えれば、あの矢印を使つて人やモノの動きを操るのがあの鬼の血鬼術なのだろう。下手をすれば体をいいように操られ粉碎される恐れがある。

避けることがならば――

矢印が野獸のもとに到達する。

野獸の呼吸、伍ノ型、夜捕怒（やんほぬ）――

自身を中心に円を描くように刀を振るう、本来ならば防御や複数の周囲の敵の迎撃に使う劍技。野獸はそれを盾に（縦）振るつた。ただ降るのではなく、無数の矢印をその刀身に一気に巻き付けるようにして。巻き付いた矢印の動きとその勢い、型の足運びを使つて跳躍。一気に距離を詰め、矢琶葉の頭上真上まで飛ぶ。

よし、このまま――

野獸の呼吸、弍ノ型 金睡冷伏。

真上から、一気に日輪刀を振り落ろす。もともと数ある型の中でも時と場合によつては対象を粉碎するほどの威力を持つ型だ。そこに衰えているとはいへ刀身に巻き付い

た矢印の動きや勢いが加わり、その勢いは更に増している。

「!?——」

次の瞬間、振り下ろされた刀身は矢琶葉の首をたたき切り、そして粉碎した。悲鳴を上げる間もなく、彼の胴体から首が消え、どさりと地面に倒れる。日輪刀で首を失った鬼の体はあつという間に崩れ去り服だけを残し消えていった。

「ふう……何とかやったな」

野獣は炭治郎たちの支援に赴くべく身を翻した。

野獣が矢琶葉と戦い討ち取った頃、炭治郎たちもひでと毬を操る鬼——朱紗丸との戦いも佳境を迎えようとしていた。朱紗丸、そしてひでもまた矢琶葉と同様違和感を感じていた。何かに縛られたかのように体の動きが重く遅くなり、術の利きが悪くなっている。毬の威力や速度が遅くなっている。それは時間が経過することによって大きくなっていく。

おかげで慣れたのもあって炭治郎は毬にうまく対応できるようになり、共に戦う彌豆子も毬を蹴り返すようになった。

「ああ、痛いんだよオオオオ!! (マジギレ)」

「刀痛いのはわかってんだよオイオラアアア!! YO!! (日頭)」

ひでも分裂・分身を繰り返して体力を消耗したのに加え、同様の違和感によってそれまでと違って葛城の攻撃が当たり、押されるようになっていいる。

一転攻勢、今押しているのが炭治郎たちであることは明らかだった。

(くそつ、なぜこうも体が、術の利きが遅い?)

毬を蹴り返され、時には腕や体を切られながら朱紗丸はいら立ちを募らせていく。彼女のいら立ちを察したのか様子を見ていた平野が口を開いた。

「体が重いだろう?それが私の血鬼術だ……」

「何じゃと……?」

平野は先ほど投げつけた血の入った小瓶を取り出して見せた。

「『緊縛』……それが私の血鬼術だ。この小瓶には私の血が入っていてね。この血が当たったり、匂いを嗅いだりすれば相手は緊縛されたように身動きが全く取れなくなり、私の思うがままになる……」

「……!」

平野の言葉に彼女は眼を見開いた。

思えば違和感を感じ始めたのは平野が鬼たちにあの小瓶を投げつけた時からだった。野獣が矢琶葉と戦っていた時彼の動きや術が鈍ったのもこれが原因だったのだ。

やはり、あの時に原因があったのだ。完全に侮っていた。

「もつとも、こう相手の数が多いと、その分術の利きや効果が小さくなっていくがね……それでもだいたい動きを鈍らせるぐらいの効果はあったようだ」

「小癩な……！」

「あがいても、無駄だよ。その血鬼術は、私のどうぞという声にしか反応しないのだ」  
そうこうしている間にも比例するように彼女の動きや毬は鈍くなり、同時に炭治郎たちの攻勢も強くなる。そして。

彌豆子が毬を朱紗丸の顔面目掛けて蹴飛ばした瞬間、炭治郎はそこに一瞬の隙を見出した。慰安が好機を言わんばかりに一気に駆ける。

水の呼吸、参ノ型、流流舞い——

その様はまるで複雑に、しかし滑らかに流れていく水流の如く。回避と攻撃を合わせたその技で、一気に距離を詰め毬を躲し、あるいは切り落とし、そしてついにその日輪刀の切っ先を首に向ける。

「——！」

次の瞬間、朱紗丸の首と胴体は切り離されていた。ぼとり、と毬よりも重く鈍い音が地面に響き続いてどさりと体が倒れる音が響く。やがてその体がゆつくりと崩れ始めはじめた。

彼女を倒したのだ。

残る鬼はひで一人。

「おーい、炭治郎、大丈夫か！」

声のしたほうを見れば野獣が炭治郎たちのもとに向かっていた。

彼も矢琶葉を倒し加勢のため戻ってきたようだ。

「大丈夫です、こつちもちょうど毬の鬼をたおしたところですよ！あとは一人だけ！」

野獣と炭治郎が目を向けるとそこには対峙する葛城とひでの姿があった。分身しようとしても平野の血鬼術によって身動きがうまく取れず、体力も消耗したのかひでは一人で地面にへたり込み息切れしていた。その彼に葛城は刀の切っ先を向けている。

もはや形成は完全に逆転していた。

「ア、ア、ーッ！ぎげんじゃねえよオイ！誰が鬼になつていいつつたオイオラア！」

(大声)

「やーだやめてタタカナイデ！タタカナイデヨ！」

消耗したひでを拘束しようとする葛城。本来なら切るべきなのだろうが、前述したようにひでは葛城の養子、家族であるので殺すのに躊躇があるのだろう。もちろん拘束は容易でなくひではなおも鬼の体力で持つて暴れまわる。

「なにするんだ、痛いんだよオオオオ！！(マジギレ)」

「うるせえ、暴れんじやねえ！ いうこと聞けこの野郎！」

取っ組み合いはとうとう両者の言い争いに発展する。

その激しさは危険な領域にまで突入する。

「ええ！ 何鬼になんかなつてんだよ！ ぶざけんじやねえよおい、本気で怒らしちやつたねー、俺のことねー？ おじさんのこと本気で怒らせちやつたねえ！」

「おじさんやめちくり〜（挑発）」

「洗いざらい話してもらうからなあ？ 鬼のことや鬼舞辻のことまで全部よお」

「やだ、そんなことはなせるわけないだろ！」

「鬼舞辻とかいうわけのわけの分からねえ奴にたぶらかされやがつてよお、もう許さねえからなあ？ あの臆病者の下種野郎のこと洗いざらい話してもうぞ！」

ひでを拘束しながら鬼舞辻を罵る葛城。

その言葉にひでの額に青筋が浮かび、彼もガチギレし叫ぶ。

「鬼舞辻様をばかにするな！ そんなことしたら鬼舞辻様に怒られちゃうだろ！（迫真）・・・あ」

ひでが鬼舞辻の名を叫んだその瞬間。それまで暴れまわっていたひでがその動きをびたりと止め、まどつていた雰囲気を一変させた。瞬時に恐怖の表情が顔に浮かぶ。

その様子に何かがおかしいと葛城も、野獣たちも動きを止める。





## 第14話 鬼舞辻の呪い

その後続いたのは筆舌に尽くしがたい惨劇だった。

突然ひでの肉体を突き破って現れた複数の太い腕は一瞬の静止の後、ひでの頭や体のあちこちを鷲掴みにし、そのまま握り潰し或いは引きちぎりバラバラに解体・粉碎、ひでの肉体をこれでもかかと破壊していった。

口からも腕が生えているため、ひでは悲鳴一つ上げることさえ許されず、なすすべなくその体を惨たらしく破壊されていった。

グシャツ、ベギリ、ベキベキツと嫌な音を立てて血肉が、骨が折れ千切られ粉碎されていく。

突然起こった惨劇に野獣も炭治郎も、その場にいた全員が目を見開き呆然と立ち尽くしていた。思わず手にしていた日輪刀を落とす。葛城も突然の凄惨な光景に思わず固まっていた。

「ひ、ひで……?」

バシヤツと返り血を浴びる葛城。

やがて全てが終わった後、地面には原形を留めないほどバラバラにされた細かい肉片

や人体のパーツが、ひでだったものがあちらこちらに転がっていた。

「……」

ふらふらと葛城は惨劇の中心地まで歩きへたり込む。バラバラになった肉片を手に掴んで何回か手を開いたり閉じたりを繰り返して、見比べる。

突然の養子の、家族に降りかかった更なる不幸。

その目は信じられないというように呆然としていた。

同じく呆然としていた炭治郎がようやく口を開いた。

「……珠世さん、これは？死んでしまったんですか？」

「まもなく死にます。鬼舞辻の『呪い』です」

答える珠世。その様子はほかの者と比べれば比較的冷静だった。ゆっくりとひでもといひでだったものところへ歩く。

「鬼舞辻は……あの男は臆病者です。鬼が群れず共食いをする理由をご存じですか？鬼たちが束になって自分を襲うのを防ぐためです。それを防ぐために、鬼舞辻は鬼たちを操作し呪いをかけています」

「呪い……じゃあれも……？」

「はい。先ほど葛城さんに罵られて思わず鬼舞辻の名を口にしたでしょう。あれもその一つです。その名を口にするとかけられていた呪いが発動し、体内に残留する鬼舞辻

の細胞に肉体を破壊される：・基本的に鬼同士の戦いは不毛で意味のないものです。陽光と日輪等以外では致命傷を与えることができせんから。ただ鬼舞辻は鬼の細胞の破壊ができるようです」

珠世はバラバラになったひでの肉片を観察する。

すつと地面に転がっていたひでの眼球を指さす。

「炭治郎さん、浩二さん、見てください。この方は十二鬼月ではありません」

「え!？」

「そうなんすか!？」

驚く野獣と炭治郎。珠世は頷く。

「十二鬼月は眼球に数字が刻まれています。この方にはない・・・」

確かに珠世の指さす先、地面に転がっているひでの眼球は鬼特有の猫のような鋭い瞳孔であるが、それ以外さしたる特徴はなく、勿論数字も刻まれていない。

「もう二方も恐らく十二鬼月ではないでしょう。弱すぎる」

珠世の言葉に野獣と炭治郎はさらに驚愕を受ける。ひでも、その他の鬼も凄まじい血鬼術や鬼の力で野獣たちを翻弄し追い詰めた。今まで対峙してきた中で最も手ごわい鬼だった。しかし珠世はあれでも弱すぎるといふのだ。ならば十二鬼月や鬼舞辻はどれほどの強さや能力を持つというのだろうか。

珠世は注射器を取り出してひでの肉片に刺しその血を採取する。

「血は採りました。私は禰豆子さんや平野さんを診ます。血鬼術や薬を使いましたし、怪我もしましたから念のため・・・炭治郎さんと浩二さんは葛城さんを見てやってくれませんか。何しろ、鬼とはいえ突然家族が死んだのですから・・・」

珠世の視線の先にはいまだ呆然として座り込む葛城の姿があった。

愈史郎も目つきこそ悪いが何も言わずにいる。「鬼舞辻の名を口にするとは頭の悪い奴だ」「珠世様の御体を傷付けた当然の報いだ」とか普段の彼なら言いそうなものだが、流石に家族が死んだばかりの本人の目の前で口にするのは憚られたのだろう。

珠世たちが建物に戻った後、庭には野獣と炭治郎、葛城だけが残った。

二人は葛城のもとに歩み寄る。

「葛城さん・・・」

行方不明になった養子。長い時間を経てようやく再開した家族は鬼になっていた。そして呪いによって惨たらしく殺された。

あまりにも悲惨な形で家族を喪った葛城のその胸中は察するに余りあるものがあった。

「・・・ひではな、俺が施設から引き取った養子だったんだ」

ぼつりと言葉を漏らす葛城。

「もともと酷い虐待を受けてな。施設で保護されていたのを、俺が引き取って養子にしたんだ。とんでもねえクソガキだったよ。わがままで言うことは聞かねえし、態度も舐め腐ってるしよお」

その言葉とは裏腹に、葛城の目には信じられないという呆然や驚きの色が宿っていた。やがてそれはあつという間に悲しみの色に染められ涙が浮かび溢れてゆく。

嗚咽の声を漏らす葛城。その手に握るひでの肉片は何も言わず、その上に彼の涙がぼたりぼたりと落ちる。

「それでも・・・俺の、家族だったんだ。血は繋がってねえけど・・・俺の・・・俺の、大切な家族で」

やがて東の空がオレンジ色に染まる。日の出の時間だ。ゆっくりと太陽が昇り、庭に陽光がうつすらとさしあたりを照らしやがてそれは強くなっていく。

陽光は鬼にとって弱点だ。日光を浴び、散らばっていたひでの肉片は燃えるようにボロボロに崩れ去っていく。

「やつと会えたと思つたら・・・鬼になんかかなりやがってよお・・・このクソガキが・・・」  
葛城の手のひらの肉片もあつという間に消滅する。もともと裸だったから残るものはない。日光によりひでの肉片はもちろん血さえも完全に消え去り、後には何事もなかったかのように何もないう地面が広がっているだけだった。ひでがこの世にいたこと



診療を終えた禰豆子がとてとてとこちらに歩いてきて炭治郎にハグをする。それから振り返ると奥にいる珠世や平野たちのもとへ歩き彼女たちに同様にハグをしたり頭を撫でたりする。愈史郎はそれを見て顔を引きつらせるが気にせず禰豆子は彼にも抱擁をし頭を撫でる。

「先程から禰豆子さんがこのような状態なのですが・・・」  
困惑する珠世。

そんな彼女に炭治郎は笑いながら言う。

「大丈夫です。多分三人のことを家族のだけかだと思っっているんです」

「?しかし禰豆子さんのかかっている暗示は人間が家族に見えるものでは?それに私たちは鬼ですよ・・・?」

野獣と炭治郎が禰豆子と共に旅立つ直前、鱗滝と秋吉は念のため禰豆子に人間を家族と思いつくように暗示をかけていた。珠世も愈史郎も、平野も皆鬼である。人と似て大きく異なる鬼を家族と、良き存在と思うだろうか。

「確かに禰豆子は人間だと判断しました。だから守ろうと・・・いや、もしかするとそういうのは関係ないのかもしれない」

「多分純粋に皆を仲間と思っただけか守ろうとしただけかもしれないと思うんですけど(名推理)。大切な人や誰かを守るのに人間とか、鬼とかそういうのは関係ないって



はつきり分かんだね」

「俺、念のためとはいえ彌豆子に暗示かかっているの嫌だったけど……本人の意味があるみたいで良かったです」

「……」

炭治郎と野獣の言葉に珠世は静かに涙を流した。

「すみません!! 彌豆子、彌豆子、はなつ、離れるんだ失礼だろ!」

何か失礼なことを言ったのか、無礼なことをしたのかと思つた炭治郎が謝り彌豆子に珠世から離れるように言う。しかし珠世は逆に彌豆子を強く抱きしめ彼女の肩に顔をうずめる。

「……ありがとう、彌豆子さん……皆さん……ありがとう……」

「……」

その様子を愈史郎も平野も静かに見つめていた。珠世に鬼にされた時かけられた言葉を思い出す。

——生きたいと思えますか? 本当に、人でなくなつても生きたいと思えますか? ——

——このままではあなたは命を落とすでしょう。鬼になれば助かるでしょう。死ななくなるのは魅力的なことに見えるかもしれませんが……ですが ——

——人でなくなるとは……つらく、苦しい ——

愈史郎も平野も、かつては確かに人だった。珠世もそうだったのだろう。しかし今や彼らは鬼、人ならざる存在だ。人を喰わねば生きていけぬ、業の深い存在。人から憎まれ恐れられ、この世に打ち捨てられた存在。そんな彼ら彼女らを禰豆子たちはそんなこととは関係なしに人だと、守るべき大切な存在だと見てくれた。その行動は、言葉はどれだけ珠世の心に響いたことだろう。

「私たちはこの土地を去る」

平野が野獣たちに言った。

「はつきり言つて鬼舞辻に近づきすぎた。早く身を隠さなければ危険な状況だ。それになうまく隠しているつもりでも珠世は医者として、また私は多角経営者として決して決して少くない人間と関わりを持っている。つまり鬼だと気づかれる時があるということだ。特に子供や年配は鋭くてな……それで浩二君、炭治郎君、提案があるのだが」

平野が禰豆子を見る。

「禰豆子を……彼女を私達が預かるといふのはどうだろうか」

「え」

思いがけない平野の提案。

驚く炭治郎と野獣に平野は続ける。

「珠世や愈史郎と相談して決めたいんだ。これから君たちは鬼狩りとしてさらに過酷な

戦いの場に立つことになるだろう。当然今のまま彼女と旅を共にすれば彼女も危険に巻き込まれる。私たちのところで預かれれば絶対に安全とは言い切れないが、戦いの場に連れていくよりは危険が少ないと思う。それに隠れ家は各地にたくさんある。どうだろう、二人とも」

「確かに……」

「んいやび……このまま連れていくよりは預けたほうが安全かもしれませんね……」  
炭治郎も野獣も平野の提案に考え込む。

確かに平野の言うとおり、これからともに旅を続けるということは禰豆子も戦いに巻き込むということだ。唯一の大切な家族を無用に危険にさらすわけにはいかない。そもそも炭治郎たちは禰豆子のために鬼狩りとして戦うことを決意したのだ。相手には野獣の知り合いの葛城もいるし、彼らは信用できる。預けたほうが禰豆子のためにも良いのではないか……

「……」

野獣たちがそう考える中、間に立ち時と黙っていた禰豆子が二人の手をぎゅつと握りしめた。

「！」

驚く二人。

禰豆子の顔を見る。

彼女はそれぞれの顔をじっと見つめる。

その目に弱さや恐怖は感じられない。まっすぐとした、強い意志の宿った目。

何も戦っているのは野獣と炭治郎だけではない。禰豆子もまた覚悟を決めているのだ。

炭治郎は微笑み、まっすぐとしたまなざしで珠世たちを見る。

禰豆子の手を握り返す。

「……ありがとうございます。でも、俺たちは一緒に行きます。離れ離れにはなりません……もう二度と」

彼らの脳裏に浮かぶのは在りし日の家族の光景。

そうだ、大切な家族ではないか。何があっても離れないと、共に生き守ると決めたではないか。それは禰豆子も同じはずではないか。

「……どうやら決意は固いらしいな。分かった。君たちを信じよう」

「では、武運長久を祈ります」

「じゃあな。俺たちは痕跡を消してから行く。お前らももう行け……炭治郎、さつきは悪かったな。お前の妹は美人だよ」

決意を新たにする野獣と炭治郎たちに平野と珠世は微笑みながら言い、愈史郎も態度

こそ悪そうだが彼なりの激励の言葉をかける。

野獣と炭治郎も笑う。

「はい。あつ、そうだ（唐突）」

野獣は傍らに立つ葛城を見る。

ひでを喪つた直後激しく慟哭した葛城だったが、今では目元こそ赤くはれているものの平静を取り戻していた。

そんな彼に野獣はゆっくりと話しかける。

「あの・・・葛城さん。お気持ち、お察しします・・・」

心配と励ましし言葉の言葉をかける野獣に葛城は首を振りながら言う。

「いいんだ。方法も薬もない今、鬼になっちまった上に呪いをかけられた以上はああなるしかなかったんだろう・・・泣いてもひでが戻るわけじゃねえからな・・・おい浩

二、炭治郎」

「はっ、はい」

突然強い口調で炭治郎たちや禰豆子を見る葛城に思わず炭治郎が姿勢を正す。

「禰豆子、だったか？お前の家族なんだつてな？」

「はい。たった一人の・・・とつても、大切な家族です」

「そうか。炭治郎。浩二。何があつても、必ず守り切れよ。お互い、かけがえのない存

在なんだからな。俺みたいには決してなるんじゃないぞ。何があっても……必ず守るんだ。いいな？」

叱咤激励の言葉をかける葛城。今しがた家族を喪ったばかりであるだけにその言葉は野獣にとつても炭治郎にとつても重いものがあつた。

「……はい！必ず守ります！」

「おかのした！」

二人は強く頷く。

「それと一つ頼みがあるんだが……」

葛城は思い出したように二人の持つ日輪刀に目を向けた。

「出来たらの話でいいんだが……日輪刀を俺にも調達できないか？ただでとは言わねえ。ほら、俺の刀はただの刀だからよ。このままじゃ鬼とは戦えないんだ。鬼殺隊士のお前ならなんとか調達できないかと思うんだが……」

葛城の言わんとすることも当然といえば当然だった。彼の持つ刀が普通の刀である以上、今のままでは鬼との戦いは一方的に不利なままであり、鬼殺隊士の野獣たちに刀を融通してもらえないか頼むのは当然と言えた。

「分かりました。何とかやってみます」

「そうだ、私からも」

頷く野獸たちに平野が紙を渡した。紙には住所らしきものがいくつか書かれている。

「平野さん、これは？」

「私が経営している店の住所だ。何かあつたらここに駆け込むといい。それに君たちは鬼狩りという立場にありながら、鬼である私たちに理解を示し、目的も共にしている。関係や連絡手段を持っていて悪いことはないだろう」

「平野さん……ありがとうございます」

「ありがとナス！」

新たな人脈、共闘者を手に入れた野獸と炭治郎そして禰豆子は決意を新たにし再び旅立つのだった。

## 第15話 木村と善逸との再会

「南南東、南南東、南南東!!次ノ才場所ハア南南東!!」

「……」(右手を挙げて指令所を渡す淫夢くん)

クツソうるさい鋳鴉と淫夢くんの指令に従い、次の任務が待っている場所へ向かう野獣と炭治郎。もちろん炭治郎の背中には禰豆子の入った箱が背負われている。

舗装されていない静かな道を歩く二人。周囲には田んぼが広がっている。

場所が場所だけに人が少なく静かだったが、突然歩く二人の耳に叫び声が響いてきた。

「頼むよ!頼む、頼む、頼む!!結婚してくれ!!」

「な、何だ……?」

「鬼が現れたわけじゃないみたいですね……?」

「カアアーツ!」

声のしたほうを見れば二人の前方、少し離れた道の真ん中で黄色い羽織を着た金髪の少年が泣き叫びながら少女に縋り付いている。さらによく見れば、縋り付く男より年上らしい男が彼を少女から離そうとしていた。



「いつ死ぬかわからないんだ俺は!!だから結婚してほしいというわけで!!なあゝ頼むよ!!」

「何めちやくちなこと言ってるんですか!彼女、嫌がつてますよ!」

「あつ、あいつらは・・・」

野獸は彼らの声、そして姿に見覚えがあつた。

タンポポのような金髪の髪型の少年、端正な顔立ちをした青年、あの二人は確か・・・野獸と炭治郎はすぐさま三人のもとに駆け付けると、野獸は少女から少年を引きはがし、炭治郎が少女を守るように支える。炭治郎が少年に向かつて叫んだ。

「何してるんだ、道の真ん中で!この子が嫌がつているだろう!」

「な、何だよ・・・あつ隊服・・・お、お前らは最終選別の時の・・・」

「あつ、すみません・・・つて先輩?!それに炭治郎君!」

少年と青年は突然の闖入者に一瞬驚き、その正体を見てさらに驚いた。彼らも野獸と炭治郎に見覚えがあつたからだ。それもそのはず、互いに最終選別で出会い、それ以前にも深いかわりのある人間だつたからだ。何を隠そう、青年と金髪の少年は野獸の後輩木村ナオキと我妻善逸だつた。

互いに深い関りがあるか、認知している関係、しかし炭治郎はなおも怒つた様子で善逸に言う。

「お前みたいなやつは知人に存在しない！知らん！！」

「えーっ！！会っただろうが会っただろうが！お前の問題だよ記憶力のさ！！」

一方の野獣と木村は突然の再会に選別以来久しぶりに会ったこともあって、驚きと喜びを交えながら話していた。

「先輩、久しぶりですね！無事それで何よりです」

「俺もまた会えて嬉しいんだよな。それにしてもこんな道のど真ん中で一体何があったんだよ？」

「はい、まあちよつと色々あつてですね・・・」

木村が言うには任務を受け取って以来、善逸が俺は死ぬ、怖い、守ってくれと度々クツソうるさく泣き喚き、つい先程ももう嫌だと道端に蹲ったのだという。そこへ偶然通りかかった少女が、具合が悪いのかと思つたのか善逸に声をかけてきたのだという。すると善逸は何を勘違いしたのかその少女に抱き着き結婚してくれとせがみだし今に至るのだった。

木村が事情を話す間にも、善逸はいまだに泣き喚いている。

「さあ、もう家に帰ってください」

「ありがとうございます」

「おいーっ！！その子は俺と結婚するんだ！俺のこと好きなんだから！！なっっ！！」

少女を帰そうとする炭治郎、彼に礼をする少女。そんな彼女になおも求婚しようとする善逸に帰ってきたのは少女の痛烈なビンタだった。

「いつあなたを好きだと言いましたか！具合が悪そうに道端でうずくまっていたから声をかけただけでしよう!!」

「俺のこと好きだから声かけてくれたんじゃないの!?!」

「私には結婚を約束した人がいますので絶対あり得ません！それだけ元気なら大丈夫ですね、さようなら!!」

「まっ待ってよー!」

そのまま少女は踵を返してまっすぐどこかへと歩き去っていった。

「なんで邪魔するんだよ!」

やがて善逸は振り返り炭治郎や野獣たちに文句を言う。だが彼に向けられたのはアンニユイ顔で善逸を見つめる野獣の顔や木村だった。炭治郎に至っては別の生き物を見るような目で善逸を見ている。

「やめろーっ!!なんだよそのアンニユイ顔!なんでそんな別の生き物見るような目で俺を見てんだ!お前責任とれよ!!お前のせいで結婚できなかったんだから!!」

「.....」

「.....」

「ええ・・・(困惑)」

ギヤーギヤー泣き喚く善逸に炭治郎は軽蔑と信じ難いものを見る視線を強め、野獣は更にアンニユイ顔になる。木村も困惑の表情を見せる。

「なんか喋れよ!!俺ももうすぐ死ぬ!!次の仕事でだ!!俺はな!!俺はものすごく弱いんだぜ舐めるなよ!俺が結婚できるまではお前ら俺を守れよな!!助けてくれよ!!」

「何で? (殺意)」

「は? (威圧)」

「何で守る必要なんかあるんですか? (正論)」

「ソウダヨ (便乗)」

炭治郎が殺意のこもった声で言い、野獣が威圧し、木村が正論を言い、炭治郎の鋌鴉までもが彼らに便乗する。

自分は弱い、守ってくれと選別で会って以来全く変わらない善逸の臆病で軟弱な性格にとうとう流石の木村もキレだし、どすの利いた声で善逸に口を開く。

「舐めてんじゃねえぞ鬼殺隊士のくせによお、何が守ってくれだあ、自分の身くらい自分で守れるだろ」

「そうだよ(便乗)。助けてくれって何だ、何で善逸は剣士になったんだ。なんでそんなに恥をさらすんだ」



「まさか先輩と僕たちの指示された場所が同じだったなんて・・・偶然ですかね？」

「てことは俺たち共同で仕事することになるな・・・炭治郎どう？匂う？匂わない？」  
「血の匂いがしますね・・・でもこの匂いはちよつと今まで嗅いだことがない・・・」  
「匂い？何か匂いするの？それより何か音しないか？」

「音？・・・！」

任務を前にして話し合う野獣たち。

そこへ不意に近くの草むらから音がした。

何事かと驚きながら音のした草むらを見るとそこには小さい少年少女が怯えた表情で抱きしめあいながらこちらの音を見ていた。顔立ちが似ていることから兄妹かと思われた。それにしても何故こんな人里離れた静かな屋敷のそばに子供が、それも怯えた表情でいるのだろうか。

「子供だ・・・」

「何でこんなところに・・・どうしたんだ？」

炭治郎が二人に近づく。

「・・・」

だが二人は表情一つ変えることなく炭治郎たちを見つめている。かなり怯えている。警戒しているのかもしれない。何とかして宥め、緊張を解きほぐす必要がある。

しばらく考えると炭治郎はその場にしゃがみ込む。そして不意に笑顔とともに手のひらを二人に差し出して見せた。

その掌の上には雀が乗っていた。最終選別の時連絡用の鎧鴉……の代わりとして善逸に支給されたものだ。確かチユン太郎という名前だった。

チユン太郎は炭治郎の掌の上でチユンチユン鳴きながら飛び跳ねている。

「じゃじゃーん！手乗り雀だ！可愛いだろ？」

「……」

突然雀を見せられ一瞬困惑した色を見せる兄妹。だが可愛らしい雀は二人の緊張や警戒を解きほぐすのには役に立ったようだ。緊張の糸がぶつぷりと切れたようにへたへたと兄妹は地面にへたり込み、そして涙を流し始めた。

「何かあったのか？そこは二人の家？」

質問をする炭治郎に少年は妹を抱きしめたまま首を横に振った。

「ちがう……ちがう……ばっ、化け物の家だ……」

少年は泣きながら炭治郎と野獣たちに事情を説明した。

彼らには兄がいたこと。

兄と夜道を歩いていたら、彼らには目もくれないで兄だけが突然何者かに連れ去られたこと。夜道の中、連れ去られた際兄は怪我をし、その血の跡を辿りながら、二人で後

をつけたこと。やがて目の前の家にたどり着いたこと……

「二人で後をつけたんだな……頑張ったな。大丈夫だ、俺たちが悪い奴を倒して兄ちゃんを助けてやるからな」

「ほ、ほんと……？ほんとに……？」

「うん、きつと……いや、必ず」

炭治郎が兄妹から事情を聴きだしていると不意に善逸が耳を塞ぎながら口を開いた。その目と声色には恐怖と不審が浮かんでいる。

「なあ……この音、何なんだ？気持ち悪い音……ずっと聞こえる。鼓か？これ……」

「音？」

「音なんて聞こえないぞ……？」

善逸の言葉に不思議がる炭治郎と野獣。善逸は何か音がするといっているが、野獣たちの耳には何も聞こえない。そういえば善逸は人より聴覚が鋭いと言っていたような気がするな……と野獣たちが思っていると。

「ンアツー!!」

「!？」

「ファツ!!」

屋敷の窓から人の叫び声が響く。悲鳴というべきか、すさまじい音量だ。それと同時に



にポン、ポン、という音が響いてくる。善逸が言った鼓のような音が。

鼓のような音がだんだん大きくなり、ひととき大きなポンという音とともに何かが一階の二階の窓から何か勢いよく飛び出してきた。

それは人間だった。血まみれの青年だ。よく見ればなぜか下半身が裸だった。血まみれの青年が勢いよく窓から飛び出してきたかと思うとしばらく宙を舞った後、そのまま勢いよく地面に叩きつけられた。

「キヤーツー！」

「見るな!!」

突然の凄惨な出来事に兄妹が悲鳴を上げ、炭治郎が彼らの視界を塞ぎ、善逸は顔を引きつらせて固まる。

「おつ、だ、大丈夫か!? 大丈夫か!?!」

野獣と木村が叩きつけられた血まみれの青年のもとに駆け付ける。頭や口など体のあちこちから出血し傷だらけの青年は息も絶え絶えの様子で最早長くないことは野獣たちの目にも明らかだった。

木村が青年の体を抱きかかえながら首を振る。

「先輩、この人傷が深いですよ……これはもう……」

「……駄目みたいですな（諦め）」

しかしこのまま放っておくわけにもいかない。せめて応急手当でもして少しでも楽にしようとしたところで青年が震える口調で口を開いた。

「出ら……あ……あ……せつ、かく……出られそうだったのに……掘られた……」  
「え？」

「出られそう、だったのに……掘られた……尻を掘られた……痛かった……それでまた逃げて……何とか、出られ……た、のに……外に、出られたのに……死ぬ、のか……？俺……死ぬ、の……か？」

「……」

どうやら青年は鬼に連れ去られた挙句、ケツを掘られたらしい。青年の顔には死相が浮かび、目は絶望の色で染まっている。

やがて青年のもとも弱かった呼吸がさらに弱まり、やがて呼吸が止まり、目から光が消えた。死んだのだ。

「……」

炭治郎が地面に横たわる青年のもとに歩き、ゆつくりと目を閉じ手を合わせる。野獣と木村もそれに倣った。

せつかく外に出られたのに死んでしまった。

鬼に突然連れ去られた挙句、尻を犯され、最後には死んでしまった。

苦しかったろう痛かったろう。

敵は取りますから、と冥福祈る野獣たち。

一方、兄妹は目を背けながらも震えた声で言う。

「に、兄ちゃんじゃない．．．兄ちゃんは柿色の着物着てる．．．」

「！」

兄妹の言葉は鬼によって捕まえられた人が何人もいることを示唆するものだった。

こうなつてはぐずぐずしてはいられない。これ以上被害を広げないためにも、そして彼らの兄を助けるためにも一刻も早く屋敷の中にいるであろう鬼を討伐しなければならぬ。

「浩二さん、ナオキさん、善逸、行こう！」

「そうですね．．．行きましょう」

「敵を取らないといけないってのはつきり分かんだね」

炭治郎の言葉に頷く野獣と木村。一方善逸は顔を青くしながら首をぶんぶん横に振る。

こんな状況になつても臆病な様子を見せる善逸に炭治郎は般若のような顔を見せた。善逸の顔がさらに恐怖に染まる。

「そうか．．．分かった」

「ヒヤーツ何なんだよおー!!なんでそんな般若みたいな顔すんだよおー!」

「無理強いするつもりはない・・・あつ、そうだ(唐突)おい、善逸」

「え、何」

「お前さつき俺ら冥福祈つてるとき時(逃げる隙を窺うために)チラチラ見てただろ(因縁)」

突然いちゃもん、因縁をつける炭治郎に善逸の表情に困惑の色が加わる。

「いや、俺見てないよ。逃げようなんてしてないよ」

「嘘つけ絶対逃げようとしていたぞ」

般若の表情で因縁をつける炭治郎。そこに野獣も参戦する。

「あつお前さ善逸さ、さつきヌツ、祈つてた時にさ、なかなか(草陰から)出てこなかったよな?」

「そうだよ(便乗)」

「い、いやそんなこと・・・」

「は?(威圧)逃げてんじゃねーぞ、鬼殺隊士のくせによお」

震える善逸に木村がどすの利いた声で言う。

野獣と木村は溜息を吐くと、善逸の両脇を固めその腕をがっちりとかかむ。

「じゃあ俺が歩かせてやるか!しよ→うがねえなあ・・・(悟空)ほらいくどー」

「あーっ!!分かった、分かった!!行けばいいんだろ、行くよおーっ!!」

二人に両脇を固められながら屋敷へと歩き出す善逸。

炭治郎は三人の後を追う前に、震える兄妹の前に背負っていた禰豆子の入っている木箱を置いた。

「もしもの時のためにこの箱を置いていく。何かあっても二人を守ってくれるから」  
そう言うのと炭治郎は踵を返し野獣たちの跡を追った。

こうして野獣と炭治郎、木村と善逸の四人は鬼を討つべく屋敷の中へと入っていった。果たして中にはどのような鬼がいるのだろうか。生きている人はいるのだろうか。

少なくともこれまで対峙してきたよりも更に強い鬼がいるであろうということだけは予想された。

## 第16話 鼓の鬼

鬼を討つべく屋敷の中へと入る野獸と炭治郎、木村と善逸の四人。

野獸に無理やり歩かされる形で中に入ることになった善逸は震えた様子で口を開く。

「なあナオキさん、浩二さん、なあ炭治郎、守つてくれるよな？俺のこと守つてくれるよな」

善逸に嘆願に炭治郎と野獸は冷たく返す。

「は？（威圧）なんで？（殺意）」

「（守るつもりは特に）ないです」

木村も呆れた様子で善逸に言う。

「そうですよ、仮にも鬼殺の剣士なんだから自分のことくらい自分で守れるでしょ。

第一善逸君強いじゃないですか」

「はあ!?!何言つてんの、俺弱いよ!?!簡単に死ぬよ俺は!!多分の次の瞬間にも鬼が襲ってきて真つ先に俺が「駄目だ!!」ファッ!?!」

突然炭治郎のダメ出しの声が響き驚く善逸。

後ろを見ると、屋敷の外で待機するように言っていたはずの兄妹が野獸たちのもとに

慌てたように向かつていた。

「入ってきたらダメだ！」

「で、でもお兄ちゃん、あの箱カリカリ変な音がして……」

注意し急いで屋敷の外に戻るよう指示する炭治郎に対し、兄妹たちは震えた様子で返す。もしものためにと炭治郎は禰豆子の入った箱を彼らのために置いたが、何も知らない兄妹たちはどうやら箱の中で禰豆子が動く様子に怯えて、それなら炭治郎たちについていったほうがまだいいと判断したらしい。まあ無理もないと言えるが妹を溺愛する炭治郎にとっては禰豆子が置き去りにされたことにショックを感じた。

「ええ……(困惑)だから置いてこられたら切ないぞ……あれは俺の命より大切なものなのに……」

その時うめき声のようなものが屋敷全体に響き渡った。

突然響き渡った得体のしれない音に炭治郎たちは驚き、善逸に至ってはさらに恐怖に表情を染め悲鳴を上げる。

それからポン！と鼓をたたく音がひときわ大きく響く。

次の瞬間、部屋の縁を隔てるようにして立っていた野獣と炭治郎、少女の周囲の光景が一変した。

先ほどまで部屋の戸の向こうにいた木村や善逸たちの姿が消え、野獣たちがいたはず

の部屋が別の部屋に変わった。

鼓の音はさらに響き、ポン、と一回響くたびに部屋の光景が変わっていく。やがて鼓の音が止まる。

見たこともない部屋。ついさっきまで一緒にいたはずの木村たちの姿はない。いるのは野獣と炭治郎、少女の三人のみ。

まったく見知らぬ部屋に野獣たちは飛ばされたのだ。

恐らく、あの鼓の音に合わせて部屋が変わり、移動させられたのだろう。

「うう…」

少女が泣き出しそうになり炭治郎に縋り付く。無理もない、兄を攫われた上に不気味な鼓の音、部屋が変わるといった不可解な出来事が続き、さらに兄弟や木村たちと別れてしまったのだから。

「大丈夫か？お兄ちゃんと離れ離れにして、怖い思いさせてしまつてごめん。でも必ず守るから」

怯える少女を宥める炭治郎。

「善逸が必ず守ってくれるよ、大丈夫。名前は？」

「…てる子」

「そうか、いい名前を付けてもらったな…」



炭治郎がてる子を宥めている一方、野獣はあたりの様子を観察していた。

部屋そのものは普通の和室で特にこれといって変わったところはない。だがつい先ほどまでいた部屋とは全く別の部屋だ。あの鼓の音が響くたびに自分たちのいる部屋が次から次へと変わった。やはりこの家屋はただの建物ではない。鬼の巣窟だ。

ここからどう動くべきか野獣が考えていると、ただならぬ気配を感じた。何か人ならざるものが近づいてきている……

日輪刀の柄をかける野獣。

炭治郎も匂いと気配を感じ取ったのか、声を出さぬようにとてる子の口を押える。

それはすぐに正体を現した。

ズン、ズン……

床が震え、戸の向こうからゆっくりと巨体が現れる。

人の形こそしていたが、半裸で、筋肉質の体のあちこちから鼓が生えており、人ならざる者——鬼であることは一目瞭然であった。

炭治郎はてる子の口を抑えながらその異形の鬼を観察する。

いくつかの匂いの中でも、この屋敷に特に染みついた、きつい匂いがする。かなり人を喰っていることは間違いない。そしておそらくこいつがこの屋敷の主だ。

野獣はゆっくりと日輪刀を抜き構える。

どうする、真っ先に切りかかるべきか？

逡巡する野獸。脳裏に浅草でのひでをはじめとした血鬼術を操る鬼たちとの戦いが浮かぶ。

だが相当人を食っているであろう鬼だ、強力な血鬼術を操ることは間違いあるまい。そしてそれがどんなものであるか不明である以上、このまま突撃するのが上策とは限らない。

体に生えている鼓から察するに、あの時響いていた鼓の音はこの鬼のものだろう。もしかするとこの鼓で部屋を変えていたのだ。この鬼の血鬼術もそれに関連するものである可能性が高い。

野獸は炭治郎のほうを見た。

うなづく炭治郎。小声でてる子にささやきかける。

「てる子、叫ぶのは我慢だ。部屋は動くから廊下に出るな。柵の後ろに隠れるんだ。いいね？」

そう言つて炭治郎も日輪刀を構える。

鬼と対峙する野獸と炭治郎。

見れば鬼の顔は怒りや苛立ちで染まっており、何かをぶつぶつとしゃべっていた。

「何故だ……どいつもこいつも余所様の家につかづかど入り込み……腹立たしい……」

小生の獲物だぞ、小生の縄張りで見つけた小生の獲物だ……」  
どうやら鬼はこちらの存在に気づいていないようだ。

不意打ちをかけるチャンスだ。野獣はそう判断した。炭治郎も同じように考えているだろう。

野獣は茶色い日輪刀を構えなおし、一気に鬼に詰め寄ろうとし

「俺は鬼殺隊、階級・癸!!竈門炭治郎だ!今からお前を切る!!」

「フアツ!」

炭治郎が大声尾を上げて、鬼に向かって堂々と宣言したのだ。口上を挙げたつもりなのか、礼儀のつもりか。炭治郎は優しい、誠実で全く嘘の付けない性格の人間だった。つまり……不意打ちが全くできない男だった。恐らくそんな発想自体彼にはあるまい。某笑笑動画なら「不意打ちをせず堂々と立ち向かう剣士の鑑」か、「不意打ちができない鬼殺隊士の屑」とコメントが出るだろう。

野獣の困惑も余所に、炭治郎は一気に距離を詰める。

だが炭治郎の日輪刀が鬼に振られようとした瞬間。

鬼は右肩の鼓をポンと叩いた。

ぐるん、と空気が、空間が歪み回るような感覚。

「うおっ!」

「・・・!？」

「キヤアツ」

鼓の音と同時に野獣や炭治郎たちがそれまで立っていた畳張りの床が消え、三人はバランスを崩す。

日ごろから鍛錬を積んでいる野獣と炭治郎はそれぞれ素早くバランスを取り戻したり、着地したが、柵の陰に隠れていた子が悲鳴を上げて転倒する。

「てる子！」

駆け寄ろうとする炭治郎。そこで野獣と炭治郎は何が起きたのかを目の当たりにした。

先ほどまで立っていた畳張りの床は野獣たちから見て側面、壁の位置にあり、逆に壁だったものは野獣たちの下、床の位置になりその上に野獣たちが立つ形になっている。その一方、部屋の家具は一切滑り落ちたりすることはなく重力や位置関係がおかしいことになっている。

部屋が、空間が回転したのだ。これがこの鬼の血鬼術なのだ。そしてそれは、屋敷全体が鬼の縄張りであることを示していた。

このままでは思うように攻撃ができない。

状況はさらに目まぐるしく変わる。

「!」

炭治郎は己の嗅覚に何かの存在を感じた。

何かの匂いがこの部屋に迫っている。

これは・・・獣のような匂い。そして、どこかで嗅いだことのある匂いだ。どこで嗅いだだろうか。たしか・・・

次の瞬間、バアン！（大破）と何かがふすまを突き破り猛スピードで飛び込んできた。それは人の姿をしており、頭には猪の被り物を被っている。両手には日輪刀。野獣と炭治郎はこの人物に見覚えがあった。

「伊之助!!」

「ワハハハハハ！猪突猛進!!猪突猛進!!」

新たな乱入者の正体は藤襲山での最終試験で出会った野生児の少年、嘴平伊之助だった。彼もいつの間にか任務でこの屋敷に召集されていたのか。

「ん？ポジ治郎に鈴木じゃねえか」

「いや、炭治郎です」

「（鈴木じゃ）ないです。田所です」

見るからに鬪志を丸出しにしていた伊之助もこちらの存在に気付いたようでこちらを向く。名前は間違っていたが。

「何でもいいだろ、そんなことより……」

伊之助は目の前の異形の鬼に向き直る。

「さあ、化け物!! 屍をさらして、俺がより強くなるための、より高くいくための踏み台となれえ!!」

駆け出す伊之助。

「待て、伊之助! その鬼は——」

それを止める炭治郎。

再び鬼が鼓を鳴らす。

再び部屋が回転。てる子が転んでしまう。

「ギャツ」

その上に、背中を踏みつけるようにして着地する。

「アハハハ、部屋がぐるぐる回ったぞ! 面白いぜ、面白いぜえええ!!」

呻き声をあげるてる子をよそに高笑いする伊之助。

「人を踏みつけにするな!!」

炭治郎が怒りの形相で駆け寄り伊之助に頭突きを食らわせ、投げ飛ばす。そのままてる子を抱き寄せた。

「何すんだ、ホモ治郎!!」

「こんな小さい子を踏むなんてどういうつもりだ!!人間の屑がこの野郎!!あと俺はホモじゃない!!」

見つけた獲物と戦う邪魔をされた伊之助と、人を踏みつけにしたことを怒る炭治郎が対峙し、言い争いを始める。

「二人とも、鬼がいるのに喧嘩してる場合じゃないだろ!いい加減にしろ!」

「虫め・・・消えろ、死ね・・・」

野獣がそんな風に二人に叫びながら、一方で、今度こそとばかりに鬼に接近する野獣。鬼は忌々しそうに鼓を叩く。

今度ほどの方向に、どのように部屋が回るのかと身構える野獣。

だが部屋が回ることはなかった。その代わり、何かがすさまじい速度で部屋を駆け巡った。

「!」

「いいねいいね!!アハハハ!!」

咄嗟に横に飛び回避行動をとる野獣。伊之助や、炭治郎もてる子を抱えたまま、飛び上がり避ける。

避けた後の床には巨大な肉食獣に引き裂かれたかのように大きく無残に避けた畳があった。しかもそのあと是一本だけではなく二本にも三本にもわたって続いている。

何かが、獣の爪が肉を引き裂くように、鼓の音が鳴ると同時にすさまじい速度で部屋の中を駆け巡り、切り裂いたのだ。まともに食らっていたら輪切りにされ、ばらまかれていただろう。

再び鼓を叩く。

今度は壁が裂ける。

さらに鼓を叩き続ける鬼。

ポン、ポンと響くたびに部屋が回転し、あるいは部屋が裂ける。

回避、防戦一方でなかなか野獣たちは反撃の機会を掴めずにいる。

一方で野獣たちは鬼が鼓を叩く様子を観察して何かに気付き始めていた。鬼の体にいくつも生えた鼓、どの鼓を叩いているか、どのように叩いているか。叩くたびに部屋がどう回転しているか。右回転、左回転・・・だんだん分かってきたぞ。

何度もよけ、着地するうちに野獣も炭治郎もそこに規則性があることに感じている。た。

部屋が回転し伊之助が部屋の外に放り出される。

鬼が鼓を叩こうとした瞬間。

ポン。

鼓の音が、別の部屋から響いた。



「!?」

まだ鬼の手は鼓に触れていない。しかも別の部屋から響いてきた。これは一体？野獸たちが疑問に思う一方で、再び部屋が変わる。

鬼の姿が消え、気付けば傷のない、静かな部屋の中にいた。

「炭治郎……大丈夫か？」

「はい……何とか。てる子、大丈夫か？ケガはないか？」

「うん……」

抱きかかえていたてる子をいったん下ろし部屋を見渡す炭治郎。野獸に向き直り話し合う。

「また部屋が変わりましたね……」

「でもさっきあの鬼は鼓を打ってなかったぞ……別の部屋から鼓の音がした」

「この屋敷には複数の鬼の匂いがする……もしかすると、別の鬼が同じような鼓を持っているのかもしれませんが……！」

瞬間、何かに気付き鼻を押える炭治郎。

「どうした？」

「……血の匂いだ。てる子、俺の後ろにいるんだよ」

てる子を後ろにかばうように野獸と炭治郎は部屋の戸を開け、外の様子をうかがう。

「!!」

廊下に何かが倒れていた。  
人だ。

尻を丸出しにされ、血まみれの人間が倒れていた。ちぎれた手が転がっている。出血の量やピクリとも動かない様子からしてももう生きてはいまい。丸出しにされた尻から、その男がただで殺されたわけではないことは明らかだった。

——また人が、(二重の意味で) 食い散らかされている——

凄惨な光景に思わず歯噛みし、目を逸らす炭治郎たち。

「どうしたの……?」

ただならぬ様子に思わず心配そうに声を上げるてる子。

「……大丈夫だよ。鬼はいないから。さあ、向こうに行こう。振り返らずに、まっすぐ前を向いて」

てる子を守るように、そして死体を見せないように部屋を後にする野獣たち。歩きながら炭治郎は鼻を引くつかせ、野獣にささやきかける。

「もう一つ、今まで嗅いだことのない匂いがします……独特な血の匂いが……出血量は少ないみたいだ」

「鬼か……?」

「んにやび・・・鬼の感じはあんまり、よく分からないです」

「そう・・・でも油断しないほうがいいってのはつきり分かんだね」

警戒しながら歩く野獣たち。

やがて、匂いの元らしき部屋の前につく。

静かにするようてる子に示し、頷き合う野獣と炭治郎。

勢いよく襖を開ける。

三人の視界に床に座る少年の姿が映った。よく見ればその手には鼓を抱えている。

「・・・」

少年は襖があいたのを見るや怯えた表情を見せ、咄嗟に腕を上げる。そのまま鼓を叩

こうと手を振り下ろす。そして――

## 第17話 恐怖と向き合って、己を鼓舞、しよう！（提案）

「清兄ちゃん！」

部屋にてる子の声が響いた。

彼女の言葉に少年は一瞬びくりと震え、はつとしたような表情を見せた。抱えた鼓に向かつて振り下ろされた手が寸前でびたりと止まる。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……」

「てる子……！」

清と呼ばれた少年に駆け寄るてる子。少年こそ、鬼に連れ去られたてる子ら兄妹たちの兄だった。無事に、生きて再会出来た。駆け寄った二人は抱きしめ合い、涙を流す。それから清は警戒や怯えがこもった眼で野獣と炭治郎を見た。

「その人は……？」

「俺は竈門炭治郎。それからこの人は田所浩二さん。大丈夫、俺たちは悪い鬼を退治しに来た。さあ、傷を見せて。一人でよく頑張ったな……」

見れば清の右脚には鬼にやられたのか、切られた跡があった。ある程度出血は止まったようだが、今でも血がにじみ出て服に染みついている。

珠世からもらった薬を傷に塗りながら二人は清にここで何があつたのかを問う。しばらく黙っていた彼だったが、やがて声を震わせながらゆっくりと話し始めた。

「化け物に攫われて……、喰われそうになった。そしたら、どこからか別の化け物が、鬼が出てきたんだ。それで言い合いを始めたんだ。喰うよりもまず犯すのが先だろう、じゃあ誰から俺を掘るのか、誰が俺を食うのか……それからすぐにそいつらはなぜか服を脱いで地下足袋だけになって殺し合いと盛り合いを始めた……誰が俺を……、喰うのか……とても恐ろしくて、汚い光景だった……」

青ざめた顔を両手で多い首を振る清。相当トラウマ物のおぞましい、そして汚い光景が繰り返されたようだ。

「ええ……三人で地下足袋だけになって盛りあつたのか……(困惑)」

「鬼にはホモしくないのか(困惑)」

野獣も炭治郎も困惑とドン引きの表情を見せた。

清はさらに続ける。

「それで、体中から鼓の生えている鬼が……あいつが他の奴に浣腸されてるときこの鼓を落としたから、それを拾って叩いたら部屋が変わって……それで何とか今までしのいできたんだ。……あ、そうだ(唐突)、それからあいつら俺のことマレチとかなんとかって呼んでたんだ」

「マレチ…?」

「カアーツ!! 稀血トハ! 珍シキ血ノ持チ主デアル!!」

野獸たちがききなれない単語に首をかしげると突然炭治郎の鎧鴉が声を張り上げた。

「うわっ!」「きゃあ!」

カラスがしやべったことに突然驚く清とてる子。当然の反応だろう。

「グワハハハ!! ガキ共!! ツツキ回グエーツ!!」

驚く兄妹に高笑いし、稀血の説明をしようとする鎧鴉だったが、野獸の所有する鎧鴉代わりのスローロリス、淫夢くんが躍り出てその右手で鎧鴉を殴り飛ばした。鬼が近くにいるのかもしれないのに突然大声を張り上げるな、と彼を黙らせようとして殴ったのだ。鎧鴉が気絶して沈黙したのを確認すると、鎧鴉に完全勝利した淫夢くんはしばらくの間、その右手を高らかに上げていた。それからどこからか紙とペンを引つ張り出すとそこに稀血についての説明を書き出し、野獸たちに見せる。

「なになに…」

書いてある説明によれば、稀血はその名の通り珍しい血、その持ち主のことで生物の血には種類系統、質の良さがなどがある。珍しい稀血にもその中にさらに数少ない珍しいものがあり、その稀血一人で普通の人間の五十人、百人の人を喰ったのと同じくらいの栄養があるのだという。故に、稀血は鬼の好物であるという。

「で、清君がその稀血だと……確かに鬼たちが争い合うわけだ」

「待てよ……てことは浩二さん、まずくないですか？これだけ珍しいうえに鬼の好物なんだ、鬼たちが逃がさないわけがない。そのうちすぐに鬼が嗅ぎ付けてやってくるかも……！」

野獸と炭治郎が話し合っていると不意に炭治郎が鼻を引くつかせ顔をこわばらせた。

その様子に野獸も察し、神経を集中させる。

例の鼓の鬼の匂いが、足音が、かすかに野獸たちの耳や鼻に入ってくる。二人は顔を見合わせて頷いた。

炭治郎が兄妹に向き直り口を開いた。

「じゃあ俺、鬼を退治しにこの部屋を出るから（棒読み）」

「えっ」

「大丈夫だつて安心しろよ、ヘーキヘーキ。鬼なんて俺たちにかかればパパパツと殺つて、オワリッ！それが仕事だからな」

戸惑う兄妹を笑つてなだめ、安心させようとする野獸。だがすぐに真剣な表情になり兄妹に言い聞かせる。

「いいか、てる子。兄ちゃんは今本当に疲れているうえに怪我をしている。いざとなつたらてる子が助けてやるんだ。俺と浩二さんが部屋を出たらすぐに鼓を打って移

動するんだ。今まで清君がしてきたように、誰かが戸を開けようとしたり物音がしたら間髪入れずに鼓を打って逃げろ」

「安心しろ、必ず鬼どもを倒して迎えに行つてやるからな。その時は炭治郎に二人の匂いを辿ってもらつて、名前を読んでから戸を開けるから。淫夢くんは二人の傍にいてやつてくれ。…二人とも、もう少し頑張つてくれよ」

うなずく清とてる子、淫夢くんも野獣の指示に領き敬礼を返す。

「（二人ともその覚悟）いいねえ…じゃあ、俺行つてくるから」

戸に向き直り、野獣と炭治郎は日輪刀を構える。

迫りくる鬼の匂いが、足音が強くなる。もうすぐそこだ。

残されたわずかな時間、野獣は炭治郎に小声で話しかける。

「なあ、炭治郎…あの鬼体にいくつも生えた鼓で部屋を変えたり方向を変えたりしていたよな。俺の予想なんだけど…もしかすると鼓ごとに役割とか変わる方向とかの法則があるかもしれない。俺がしばらくの間あいつを引き付けているから、炭治郎はそいつを読み取つて、隙を見て首を切つてくれ」

「分かりました」

頷く炭治郎。直後視線の先、廊下の扉から鼓の鬼の頭がちらりと見えた。瞬間、飛び出す野獣と炭治郎。炭治郎が叫んだ。



「叩け！」

清とてる子が鼓を叩く。瞬間、二人の姿が、二人のいた部屋ごと消えてなくなった。獲物が、大好物の稀血が消えたのを目にしたからか、鼓の鬼——響凱もとも歪んでいた顔をさらに歪ませ忌々しそうに言う。

「虫けらが……忌々しい……」

体に生えた鼓を叩く響凱。

瞬間、野獣と炭治郎の視界がぐるりと回転。響凱が逆さに立っているように見えた。すかさず床——正確には床の位置に回転した天井に着地し体勢を立て直そうとする二人。だがもちろん、響凱はそんな隙を与えようとはしない。更に何度も鼓を叩く。その度に部屋が、空間が回転し上下左右の間隔が狂い、床や壁に爪痕が走って二人に襲い掛かる。

コロコロと回転する空間、間髪入れられる爪による攻撃。その中で何とか事前に話し合ったように炭治郎は、そして野獣も彼の攻撃のパターンと法則を読み取ろうとする。

（右肩の鼓は右回転、左は左回転、右脚は前回転、左足は後ろ回転、腹の鼓は爪の攻撃——何とか読み取れてきた、でも——）

何度も攻撃を受けるうちに少しずつ、鼓による攻撃のパターン、法則を読み取る二人。だが相手の動きを読み取れたからと言って相手に攻撃を仕掛けられるわけではない。

（速すぎィー！）

攻撃の速度も、回転の速度も速すぎる。何しろ響凱はかつては十二鬼月に所属していた鬼だ。そこらの雑魚鬼とは格が違う。戦闘慣れもしているようで、間髪入れず鼓を叩き、恐ろしい側で空間を回転させて野獣たちの感覚を狂わせ、間髪入れず隙を見るように爪による攻撃を壁や床に走らせる。

炭治郎の額に汗が流れる。

野獣に自分が攻撃を引き付けるから首を切れ、とは言われたが正直あの鬼の爪のような攻撃が怖くて向こうに近づけない。そのうえ、炭治郎は以前の珠世邸での戦いで負った傷が完治していない。そんな万全でない状態で下手に突っ込んで足がもつれたりでもしたら、炭治郎はあつという間に輪切りにされるだろう。

見たところ野獣も攻撃を引き付ける、と言ったものの、相手の攻撃の素早さに、よけたり対処するのが精いっぱいな様子だ。下手をすればそのうち野獣が先に輪切りにされてしまうのでは――

怪我の痛みもあり、恐怖から思わず悪い想像ばかりしてしまう

（今の俺は体だけでなく心も折れている――）

――折れてる炭治郎じゃだめだよ

――そうだよ（便乗）

不意になぜか炭治郎の脳裏に泣きわめく善逸とそれに便乗する間抜け面のMURの顔が思い浮かんだ。

「はい、ちよつと静かにしてください！うるさいんじゃないー！」

思わずそしてなぜか腹が立ち叫ぶ炭治郎。そうだ、折れている場合ではない。折れてはいけない。立ち向かわねばならないのだ。まっすぐに前を向け、己を鼓舞しろ。

炭治郎は日輪刀を構えなおし己に向かつて叫ぶ。

「頑張れ炭治郎、頑張れ!!俺は今までよくやってきた!!俺はできる奴だ!!そして今日も!!これからも!!折れていても!!俺が挫けることは絶対に無い!!」

響凱は鼓を叩きながらその脳裏にある一つの記憶を浮かべていた。かつて、この屋敷に書生として潜んでいた時の記憶。

彼は小説家として大成せんと、後世に残り続ける傑作を書き上げようという大望を抱いていた。

物書きを、小説家を志し必死に作品を練り執筆する日々。

だが傑作は出来上がらない。それでも必死に書き続けていたが、周囲はそれを理解せず、ただ嘲るばかり。

「つまらないですね」

一人の男が、屋敷の主人が響凱の作品を持ち上げ、そして床にばらまく。

「何が面白いのか私には理解に苦しむね」

響凱の頭をぺちぺち叩きながら男は罵倒を続ける。

「はつきり言つて君の作品はゴミなんですよ。書生なのに？こんなゴミみたいな作品持ち込んで？ね？しかも内容は男色ですか！これが傑作？バカにしてんのか？もう書くのはよしたらどうだい？紙と万年筆の無駄だよ。最近は昼間全く外に出てこないし……このままだと貴方の場合書生も首になるんじゃないんですか？貴方も少し自分の立場弁えた方がいいですよ？もう少し賢くなることをお勧めします。もうなんならこの家に閉じこもつて趣味の鼓でも叩くんだよ！このゴミ小説に出てくる登場人物みたいによお！それもまあ、人に教えられる腕前のもんじゃないんですけどね」

一通り罵倒し立ち去る男。その間際、男はゴミのように、響凱の作品を、原稿用紙を踏みつける。それは夢に向かって必死にあがき、罵倒された響凱の怒りの爆発させるには十分だった。

瞬間、彼は体の中にひそめていた鼓を叩き、男を輪切りにした――

「消えろ虫けらども!!」

脳裏に浮かんだ屈辱と怒りの記憶は響凱の力を瞬間的に増大させた。その腕が以前よりも素早く凄まじい速度でその鼓を打とうとする。

「！」

「フアツ!?!」

瞬間、同時に打ったのかと見まがう速度で響凱は全身の鼓を一気に叩いた。以前よりも速く、恐ろしい速度で目まぐるしく一気に部屋が、空間が回転し、何本もの爪の攻撃が野獣と炭治郎に襲い掛かる。

何とか避けるもわずかに首元や腕に掠る。

そのまま着地しようとした瞬間、何かが床に舞い落ちるのが二人の目に入った。

それは紙だった。何かの、誰かの手書きの文字が入った原稿用紙だった。それこそは響凱がかつて執筆した小説の原稿用紙だった。炭治郎は何か大切なもののように感じて、野獣は反射的にそれを避けるように足をすばやく移動させ着地した。

「！」

その瞬間を見て息をのむ響凱。

そしてこのことは野獣と炭治郎に攻撃のためのヒントを与えた。

(紙を踏まないように避けたおかげで、怪我が痛まない、効率のいい体の動かし方、呼吸の仕方が分かったぞ……呼吸は浅く速く……この状況では足回りの筋肉を中心に強化す

ること……そして奴の爪の攻撃の前にはカビのような匂いがする。はつきり分かんかね）  
日輪刀を構える野獣。

不意に野獣の脳裏に直前の炭治郎の言葉が浮かぶ。

——頑張れ炭治郎、頑張れ!!俺は今までよくやってきた!!俺はできる奴だ!!そして今日も!!これからも!!折れていても!!俺が挫けることは絶対に無い!!

全くその通りだ。本当は彼だつて怖いだらう。それに目の前で家族を失い妹は鬼にされ、様々な悲しみや苦しみを経験してきた。だが彼はそれを乗り越え今日まで来たのだ。今この瞬間も己を鼓舞し立ち向かおうとしている。自分はどうか。今度こそ、守る、守らねばならないと誓つたではないか。先輩である自分がこういう時こそ立ち向かわずしてどうする。

（恐怖に立ち向かわざるは迫真に非ず——はつきり分かんかね）

迫真空手部の教えの一文を思い浮かべ日輪刀を強く握りしめる野獣。炭治郎を見る。瞳があつた瞬間二人は頷いた。

次の瞬間、野獣が雄たけびを上げながら響凱に突つ込む。

その野獣の背中をまっすぐに応用に炭治郎が続く。

間合いに入ろうとする二人に、鼓を叩いて攻撃を集中させる響凱。だが攻撃が二人に向かつて集中した瞬間、二人は跳躍しその場を一気に飛び出す。

「!!」

攻撃をかわされ、一気に二手に別れられたことで一瞬混乱する響凱。その瞬間を、隙を二人は見逃さなかった。最初に仕掛けたのは野獣だった。一気に跳躍し天井を駆け、響凱の背後に回る野獣。野獣の呼吸、肆ノ型 法螺法螺法螺法螺で無数の斬撃を一気に、彼の腕めがけて繰り出す。次の瞬間には響凱の体から両腕が切り離されていた。これでこの一瞬、鼓による攻撃はできなくなった。

そこへ前方から炭治郎が水の呼吸、玖ノ型 水流飛沫・乱を仕掛けながら一気に迫る。動作中の着地時間と面積を最小限にするこの型は縦横無尽に動くことが可能であり、足場の悪い場所での戦いに有利である。この回転する部屋にまさに相応しい技と言えた。攻撃が使えなくなったその瞬間、その隙を炭治郎は見逃さなかった。

—— 見えた。隙の糸 ——

日輪刀をその首めがけて振る。その動きは正確に鬼の首を捕え、切断した。

「君の血鬼術は凄かった!」

首が切断された瞬間、炭治郎は叫んだ。

響凱のその目が見開かれる。次の瞬間にはその首が落ち、体が崩れ落ち、血が噴き出た。

着地する野獣と炭治郎。

二人が振り返ると、首が切断されたことで響凱の体は見る間に崩れ消失しようとしていた。

急がねば。

炭治郎は懐から小刀を取り出すとそれを鬼の体に刺した。この小刀は愈史郎の作ったもので刺したもののからその血液を採取する機能を持っている。小刀を抜き取り鬼の血液を取り出したことを確認する野獣と炭治郎。その二人に後ろから声をかけるものがあった。

「答えろ…小僧」

「！」

振り返るとまだ完全に消滅していない響凱の首が口を開いていた。

「小生の…血鬼術は凄かったか…？」

「…ああ。凄かった」

でも、と炭治郎は続ける。

「人を殺したことを掘ったことは…許さない」

「…そうか」

そう言つて。響凱の首は完全に消滅した。

その瞬間、響凱の目に一筋の涙が流れたことを二人は見逃さなかった。



「…」

はたして彼は鬼になる以前はどのような人物だったのだろうか。どんな思いでこの世を生き、なぜ鬼になってしまったのか。あの涙にはどんな意味があったのだろうか。彼の成仏を、そして来世では鬼にならぬことを祈り野獣と炭治郎は目を閉じるのだった。

こうして、鬼との戦いがまた一つ終わったのだった。

## 第18話 空手部、再開再び

愈史郎の作った道具で血を採取した後、野獣と炭治郎は鬼が消滅したことを確認すると二人は清とてる子を回収して家屋から出ることにした。採取した血はいつの間にか部屋の中にいた珠世の使い猫に預けた。この猫は愈史郎の血鬼術により、鳴くまで見えないようになっており、姿を隠したまま動くことができる。ちなみにこの珠世の使い猫だが顔や姿勢が三浦の池沼顔に似ていたため、野獣と炭治郎は勝手にMUR猫と名付けていた。

部屋を出て清とてる子を探しに出る野獣と炭治郎。炭治郎がおいを辿ったのですぐに二人がいると思しき部屋にたどり着くことができた。

「清！てる子！」

「キャアアア！」

「うわーっ！」

二人のことが心配でいてもたってもいられなかった炭治郎が勢いよく扉を開けた途端、炭治郎の顔に次々と本や急須が投げ付けられた。

投げ付けたのは、探していた清とてる子本人だった。

「痛っ！なんで物を投げつけるんだ！」

「ご、ごめんなさい炭治郎さん、急に鼓が消えて混乱しちゃって……」

どうやらあの鼓の鬼を倒したことで急に血鬼術が消え正常に戻ったことで色々混乱してしまっていたようだ。とはいえ二人は特に怪我もなさそうで無事な様子である。そのことに野獣と炭治郎は胸をなでおろし一緒に外に出ることにした。

野獣が脚を怪我している清を背負い、炭治郎がてる子の手を引いて匂いを辿りながら出口を目指す野獣たち。炭治郎が自然と急ぎ足になる。頑丈な箱の中に入っているとはいえ、外に置いてきた妹、禰豆子のことが心配だった。

「炭治郎、どうだなんか匂いはするか？」

「んにゃび……善逸と正一の匂いが……いや、それだけじゃない。ほかの匂いもするぞ。嗅いだことのある匂いだ……もしかして……」

匂いの正体を思い出そうとしていると二人はさらにもう一人、誰かが近づいてくるのを感じた。その正体はすぐに分かった。向こうから誰かが走ってやってきている。

短髪に端正な顔立ち、手には黒い槍を持った青年——木村だ。思わぬ再開に互いの顔に驚きの顔が浮かぶ。

木村が叫んだ。

「先輩！炭治郎君！みんな無事だったんですね！」

「おつ、木村！大丈夫か？大丈夫か？」

「木村さんこそ無事だったんですね、良かった…あれ、善逸は？」

炭治郎は木村と一緒に行動していた善逸の姿がないことに気付き疑問の声を上げた。

木村が顔をしかめる。

「はい、実はそのことなんですが…善逸君も、みんなも無事なんですけど少し面倒なことになっていて…」

「どういうことだ？」

「はい。三浦先輩と、伊之助君のことは覚えてますよね？あの猪の被り物をした…」

野獣と炭治郎の脳裏に三浦と伊之助の姿が浮かぶ。廊下を辿るときにした嗅いだことのある匂いと彼らの姿がつながる。あの匂いの正体は彼らのものだったのだ。

「え、三浦先輩も来てるのか！」

野獣が驚きの声を上げると木村がうなずいた。

「はい。実は今外で善逸君と伊之助君が喧嘩になりそう。今三浦先輩が何とか伊之助君をなだめているんですが…正確には善逸君が木箱を守っていて、伊之助君がそれを寄越せと言ってるみたいなんです。とにかく早く来てください！」

木箱。

それを聞いて炭治郎は一瞬背筋が震えた。この屋敷に入る際、炭治郎は木箱に入れた禰豆子を置いてきた。命より大切なものだからと善逸に預けて。結局善逸たちもついてきて置き去りになる形になったのだが……それをめぐって善逸と伊之助が争っている。あの伊之助のことだ、おそらくあの中に鬼が、禰豆子がいることを察して倒そうとしているのだろう。今のところ血の匂いがしないことから大惨事にはなっていないとは思うが早くしなければ禰豆子が危ない。

野獣もそれを察し一同は駆け足で外に向かう。

玄関が見え、外の様子が垣間見える。ますます足を駆ける速度が速くなる。

やがて玄関を飛び出した先に炭治郎たちが見たのは――

我妻善逸は散々な思いだった。木村とともに正一を守りながら行動していたが、善逸がクソゾコナメクジな態度を見せるたびに木村にどすの利いた声ですごまれたり、正一にはお前の刀は何のためにあるんだと言われたり、時には突然現れた鬼に尻を掘られそうになる（気付いたその鬼は首が取れて死んでいたが。木村と正一によれば気絶した善逸が切り落としたらしい）などなど。そこへさらに突然部屋が変わり勢いよく家屋の外に飛ばされ頭を怪我した。とにかく散々だった。まあ、木村と正一も無事で、とにかく

みんな揃って外に出られたのでそこは良かったかもしれないが。

これからどうしようかと木村たちと話し合っていると勢いよく何か蹴り飛ばされる音がした。

「フハハハハハ！猪突猛進、猪突猛進!!鬼の気配がするぜ!どこだどこだあ!!」

見ればいつか見たあの猪頭：最終戦別の合格者、三浦とともに行動していたせつちち野郎の嘴平伊之助が両手に日輪刀を携えて扉を蹴飛ばして外に飛び出してきているではないか。

「見つけたぞおお!!」

伊之助は草陰においてある、炭治郎が背負っていた木箱を見咎めるとそれに向かって駆け出し——そして阻まれた。

「やめろーっ!!」

「!!」

「善逸君!」

気付けば善逸は反射的に動き、その木箱を庇っていた。

恐怖に震えながらも善逸は必死に声を張り上げた。

「この箱に手出しはさせない!炭治郎の大事なものだ!」

「オイオイオイ、何言ってるんだ!その中には鬼がいるぞお分からねえのか?」

「そんなことは最初から分かつてる！」

実のところ、感情や体調が分かるほど常人離れた聴覚の持ち主である善逸には、炭治郎と野獣がその木箱で鬼を連れていることが分かっていた。鬼の音は人間の音とは全く違うのだ。

でも——

善逸は思い出す。

炭治郎からは泣きたくなるような優しい音がしていたことを。それも今まで聞いたこともないぐらい優しい音だった。(ちなみに野獣は優しい音とともに排便音のような、泣きたくなるぐらいクツソ汚い音が時折した)

思えば善逸はよく人に騙されていた。常人離れた聴覚を使えば相手が何を考えているのかもわかるのだが、それでも善逸は信じたいと思う人をいつも信じてきた。

鬼を殺す鬼殺隊に所属しながら鬼を連れている炭治郎と野獣。しかも炭治郎は命より大事なものと言った。そこには事情があるはずだ、と善逸は信じていた。納得できる事情があるのだと。だから——

「俺が、直接炭治郎たちに話を聞く。だから、お前は引つ込んでろ！」

信じるが故に恐怖を押し殺し怒りの形相で叫ぶ善逸に伊之助も怒りで返す

「威勢のいいこと言ったくせに刀も抜かねえ愚図が！同じ鬼殺隊なら戦ってみろ！お

前を箱ごと串刺しにしてやる！」

「善逸君！」

襲いかかる伊之助、駆け出す木村。箱を庇うように身構える善逸。

しかし、流血が起ることはなかった。

新たな闖入者が現れたからである。

「あつ、おい、待てい」

殺気立ったこの場には不似合いな間の抜けた声とともに何者かが伊之助の肩をつかんだ。

一斉の声の主に視線が集中する。伊之助が殺気立った様子で振り返るが声の主を見ると、あつという間に殺気が消え間の抜けた声を上げた。

「あつ、兄弟……」

声の主、伊之助の肩を掴んだのは坊主頭にガタイのいい体格、どこか間の抜けた顔。野獣と木村の先輩、三浦智将だった。

木村が驚きの声を上げる。

「三浦先輩……!?なんでこんなところにいるんです!?!」

新たな闖入者に皆が驚く中、三浦は相変わらず抜けた様子で口を開いた。

「いや、指令を受けて伊之助と一緒にここに来たんだけど、伊之助が我先にとこの館



の中を進んでしまつて、気付いたら迷つてしまつたんだゾ。相変わらず伊之助はせっかちで困るんだゾ：それにしても木村たちも一緒に来てたなんて驚いたんだゾ：ようやく外に出たらなんか喧嘩が起きてるし：いったい何が起きてるんだ？」

そう言うのと三浦は伊之助の方に向き直つた。

「とりあえず刀を収めるんだゾ。隊員同士で徒に争うのは御法度のはずだゾ」

「でもよ兄弟、この箱の中鬼がいるんだぜ？しかもこの弱味憎野郎が庇うしよお」

三浦の言葉に不満そうに答える伊之助。だがそこに先ほどまでの殺気は感じない。そういえば、最終戦別の時も伊之助と三浦の中は割と良さそうだった。話によれば初めて出会つた時から一緒に過ごしていたという。それもあつて、三浦の言うことな少しは聞く耳を持つのだろう。

「先輩、実はですね…」

三浦先輩ならしばらくこの場を抑えられるかもしれない…

そう思つた木村はそれまでの経緯を簡単に説明した。

「…そういうわけなんです」

説明を受け腕組みをする三浦。

「うーん、なんかよく分からないけど取りあえず野獣たちもつれてきてくれ。とりあえず伊之助の奴は俺がなだめてるから」

「はい、分かりました」

そう言うと、木村はまだ中にいるであろう野獣や炭治郎たちを探して屋敷の中へと駆け出して行つた。

木村や野獣たちを見つけ、再び一同が合流するのに思いのほかそう時間はかからなかつた。

炭治郎たちが外に出たとき、危惧していたようなことは起きておらず、清やてる子、正一は抱き合つて生きて再会できたことを泣いて喜んでいたし、相変わらず善逸は彌豆子の入つた木箱を抱きかかえていた。木箱に異常はなく、三浦は伊之助をなだめていた。

一同が集まつたところで炭治郎や善逸が事情を話す。

その箱の中には命より大切なものが入っていること、館の中で起きたことや、鬼を倒したこと、突然現れた伊之助のことなどなど…

暫く話を聞いていた三浦は腕を組んでい領いた。

「とりあえず込み入つた事情があることは分かつたゾ…」

そして再び伊之助の方を向き直り口を開く。

「とりあえず伊之助、刀を収めて欲しいんだゾ…あの箱の中には確かに鬼がいるみた

いだけど、炭治郎が言うには命より大事なモノなんだゾ、いつも持ち運びしてることとはきつと複雑な事情があるんだゾ」

「でもよお兄弟…」

不満そうな伊之助に三浦は続ける。

「じゃあ聞くけど、もし伊之助の目の前で俺が殺されそうになったり、本当に殺されたらどうするゾ？」

「そりゃあ助けるし、殺されたら…とりあえず殺した奴は許せねえな、ぶつ殺す」

「そういうことだゾ。炭治郎にとつてはきつと同じようなモノなんだゾ。野獣の連れの言うことだから俺は信じるんだゾ…とりあえず事情を聴いてからことを起こしても遅くはないと思うゾ。とりあえず俺の顔を立てると思つて…」

「兄弟がそこまで言うなら…」

渋々といった様子ではあったが、日輪刀を収める伊之助。とりあえずこの場で事を起こすこととは思いとどまってくれたようだ。

「それに」

三浦が視線を移す。

「とりあえず先にやることがあると思うゾ」

三浦の視線の先には清たちや、鬼にケツを掘られて死んだ青年の死体があった。

野獣が頷く。

「ですよねえ…殺された人が屋敷の中にいるし、その埋葬とか、処理をしないといけませんよね…」

「清君たちを無事に帰す必要もありますよ、先輩」

木村も口を開く。

死体の埋葬や処理、清たちの見送り…鬼を倒したとはいえ、それで終わりではない。事後処理が残っている。

こうして一同は協力して事後処理を行うことになった。

事後処理自体はそう難しくなかった。

鏝鴉を報告に行かせた後、野獣と炭治郎たちは協力して遺体埋葬した。それから一同で山を下ることになったが、何故か善逸は正一を連れて行くことになった。何とか善逸を引き離し一緒に山を下りた。

それから淫夢くんが藤の花の香袋を清に渡した。鬼除けになるので今後稀血である清は常時持ち歩くようにとのことだった。

清たちの住む村の近くまで一緒に歩くと、そこで野獣たちと清たちは別れとお礼の言

葉を告げて別れた。

それから野獣と炭治郎たち一同は改めて自己紹介をし合ったところで、淫夢くんが指令の書かれた紙を手渡した。

「えーと、何々…：負傷を完治させ、休息せよ、だつてさ」

「そういえば鬼と戦つて怪我しましたね俺たち…」

「あんまりろくに休んでいない気もしますね…」

鬼と戦う鬼殺隊、体が資本である以上休息や治療も任務の一つだ。

同封されていた地図に従い、一同は目的地へと向かった。

野獣と炭治郎たち一同六人が地図に従つて着いたのは一見大きな屋敷だった。

見た目は普通の日本家屋だが、その門には大きな藤の花の家紋がついている。その隣には何故か「COAT」と英字がでかどか書かれていた。門に掛けられている大きな木札には「皇都一神教」と書かれているし、門には「ゴウハカミ」「GO is GOD」といったことが書かれている。

正直言つてなんか怪しかった。

「…」で合ってるんだよな、休息場所？」

「でもなんか見るからに怪しいですよ」

「何だよGO is GODって…GO is not GODの間違いだろ」

野獸と炭治郎が不安そうに言い、善逸が壁の言葉に突っ込む。

しかし地図はこの場所を指している。

入ろうか入るまいか戸惑っていた野獸たち。

そこへ待ちかねたように、門の扉が開いた。

「大丈夫大丈夫、ここで合ってるからさ」

若い男の声が響く。

扉が開くとともに一人の人物の姿が現れた。

そこにいたのは一人の若い男。真っ黒な肌には伸ばした茶髪。白シャツにジーンズ。

その姿は古風な日本家屋にはあまりにも不似合いで、明らかに現代日本の都会の若者の

服装である。でなきゃホモビに出てきそうな格好だ。

「あの、あなたは…」

突然の若者の出現に一同が唾然としてみるとチャラそうなその男は軽く笑って口を開く。

「あ、ごめんごめんいきなり登場しちゃって、驚くよな。とりあえず自己紹介しとくね。俺の名前は豪、桜井豪。まあとりあえずGOって呼んでくれ。ハイ、ヨロシクウ！」

こうして再び集結した空手部は新たな出会いを共にしたのだった。

## 第19話 空手部の休息

結局野獣たちは桜井豪ことGOと名乗った謎のチャラ男に導かれるままに藤の花の家紋の屋敷の中に入った。

屋敷の中に入ると今度は背の低い、高齢の老婆がすごすごと現れる。屋敷の主人だろ  
うか。

「あ、婆さん、悪いけどさ、こいつらの世話頼んだわ」

「はい、鬼狩り様でございますね。どうぞこちらへ……」

GOの言葉に静かに頭を下げると老婆は野獣たちを部屋の中へと案内する。

案内された部屋の中には既に人数分の食事が用意されており、さらには布団も丁寧に敷かれていた。

淫夢くんの解説やGOによれば、この藤の花の家紋がある家は昔鬼狩りに命を救われた、あるいは縁のある一族や団体であり鬼狩りであれば無償で支援をしてくれるのと  
と。

またGO自身も鬼殺隊の関係者とのことだった。なんでも屋敷の門の立て札に書いてあった「皇都一神教」なる新興宗教を運営しており、表向きはその教祖として活動し



ているとのことだった。壁に書いてあった「G O i s G O D」や「ゴウハカミ」は皇都一神教の教義らしい。

「宗教って意外と人とお金が集まるのよ。それも結構広くさ。だからそうして信者とかを通して情報集めたり、たまに鬼殺隊の運営資金稼がせてもらってるわけ。この屋敷は拠点の一つなの」

G Oは笑ってそう言った。

他にもG Oは教祖として鬼殺隊士のメンタルカウンセリングや相談にも乗っているとのことだった。

「何か困ったたらいつでも、俺か婆さんに言ってくれ。いつでも相談に乗るからさ。とりあえず今日は風呂入って食事とって、医者に診てもらって、しばらくゆっくり休めよ。そう指令が出てんだろ？そういうことで、はい、ヨロシクう！」

G Oはそう言って老婆とともにどこかへと去っていった。

正直言って少し怪しかったが、かといって特段悪そうな感じはなかったこと（実際炭治郎や善逸はG Oから怪しい匂いや音は特に感じなかった）、連日の戦闘や移動で負傷し疲労が溜まっていたこともあり、そのまま野獣たちは、用意された食事をとり、老婆が呼んできた医者の治療を受け、風呂に入り、そして用意された布団で寝ることにした。

野獣たちが食事をしている間、伊之助は山育ちの野生児だったこともあり、その食べ

方は手づかみでがつがつ食べるめっぼう汚いもので、野獣や炭治郎たちに食事のマナーについて熱心な指導を受けられた。その上伊之助は元の性格が好戦的で、何か強いものと戦うのが生きがいの男なので何かにつけて野獣や炭治郎たちを挑発した。例えば食事の最中に炭治郎たちのおかずを横取りしてにやにや笑う……といった具合に。

が、そんな伊之助に炭治郎や野獣、三浦たちは元がお人好しだったり、先輩、善人なので

「そんなにお腹が空いているならこれも食べていいぞ」

「あつ、おい、待てい（江戸っ子）、この煮つけも美味しくていいゾ〜これ」

「あ、先輩こいつ玉（子の天ぶら）とか舐めだしましたよ。やつぱ好きなんすねえ」といった様子で全く挑発できなかった。

そんなこんなで野獣たちは食事を済ませると、今までの疲れや怪我を癒すべく風呂に入りさっぱりした。

バン！ババン！バン！（迫真）

「ふお〜あつ〜」

「ビール！ビール！」

「おい、冷えてるか〜？」

「んあ、大丈夫つすよ、バッチェ冷えますよ」

風呂場の戸を勢い良く開け野獣と炭治郎たちは部屋へと戻る。

部屋の中で座り込んだり、雑誌を見たり思い思いに過ごす野獣たち。

日々の疲れや任務から解放されたこともあり、野獣たちはすっかり脱力しくつろいでいた。

和やかな空気の中野獣が口を開く。

「炭治郎、夜中腹減んないすか？」

「腹減ったなあ」

「俺も腹がまだ減ってるぜ…」

野獣の言葉に肯定する炭治郎と便乗する伊之助。さつき夕飯食ったばかりだろホモガキ、と思うかもしれないがまだまだ育ち盛りの年齢だ、夜食が欲しくなってもおかしくない。

「ですよねえ。さつき婆さんに聞いたんだけど、この辺にい、美味しいラーメン屋の屋台、来てるらしいつすよ」

「あつ…そつかあ…」

「行きませんか？」

「行ってえなあ」

「夜食かあ、いいゾ〜これ」

野獣の言葉に便乗もとい賛同する炭治郎や三浦。

「じゃけん夜行きましようねえ〜」

「おつ、そうだな。あつ、そうだ（唐突）おい善逸ウ！」

「えっ何？（タメ口）」

唐突に話を振ってきた炭治郎に思わずびくりとする善逸。

そんな善逸に炭治郎はまるで因縁を吹っ掛けるように言う。

「お前さつき俺らが話してた時チラチラ（あの木箱を）見てただろ」

炭治郎の視線の先には妹・禰豆子が入っている木箱が。

「い、いや見てないよ」

「嘘つけ絶対見てたゾ」

「な、何で見る必要なんかあるんだよ」

必死そうに否定の言葉を告げる善逸だがそこに野獣もさらに便乗する。

「あつお前さZ N I T さ、さつきヌツ…飯食つてた時にさ、なかなか（呼んでも）こつ

ち見なかったよな？（鈴〇福）」

「そうだよ（便乗）」

「そ、それは…」

某笑笑動画なら某有名子役の名の赤文字コメが大量に出現すること間違いなしの顔

で指摘する野獣とそれに便乗する炭治郎、そして窮地に陥る善逸。

そんな彼を見かねたのかどうか、木村が助け舟を出すように会話に加わる。

「そういえば、炭治郎君がいつも背負っていた箱、鬼が入っているみたいですけど……  
いったいどういう事情があるんですか？ 鬼殺隊は鬼をかばったりするのはご法度だったはずじゃ……」

「確かに俺も気になるんだゾ……何か大事なものが入っているみたいだけど、鬼を連れているなんて、いったいどういう事情なんだゾ……」

三浦も疑問の声を上げる。

彼らの疑問はもつともだろう。鬼を殺すことが任務である以上、鬼殺隊において鬼をかばうことやそれに類する行動がご法度であることは素人目でも容易に考えられることだ。

そんな彼らに野獣は口を開く。

「そういえば三浦先輩たちには、まだ事情を話していませんでしたね……確かに鬼を連れてくるのは間違いないけど……正確には家族を連れてくるって言った方が正しいですね」

「家族……？」

「炭治郎、先輩たちに事情を話して差し上げろ」

「はい、実は……」

炭治郎と野獸はゆっくりと彼らが経験したことを話す。

かつて炭治郎が山中で家族と静かに暮らしていたこと、しかしある日突然鬼に襲われ妹の禰豆子一人を残して家族が皆殺しにされてしまったこと、生き残った禰豆子も鬼にされてしまったこと、家族の仇を取り、禰豆子を人間に戻すことを二人で決意したこと、等々……

「……そんな事情があつたんですね。お二人とも、つらい思いをされて……」

「……悪かつたな、あん時殺そうとして……」

凄惨な、悲しい過去、そして悲壮で力強い決意を語つた野獸と炭治郎に木村をはじめとした面々が慰めの言葉をかけ、部屋がしんみりとした空気に包まれる。伊之助も、あの屋敷での出来事を謝罪した。

「それにしても人を襲わない鬼か……」

「きつと、家族を想う気持ちだが、勝つたんですよ、鬼にされたとき……とてもいい子だったんでしょね」

「いったいどんな妹なんだゾ？せつかくだし俺たちにも顔を見せて紹介して欲しいんだゾ」

相も変わらず抜けた、のんきそうな様子で言う三浦。だがそれが彼の良さなのかもし

れない。

「あ、いいつすよ（快諾）。ほら彌豆子、出ておいで」

そんな三浦に苦笑しながらも炭治郎は快諾し木箱の方まで寄る。

「見たけりや見せてやるよ（震え声）」

素晴らしいながら木箱を開ける炭治郎。

小さい木箱から、ゆつくりとしなやかで滑らかな白い手が出てくる。やがて黒い髪、肩をゆつくりと出し、彌豆子が中から這い出てその姿を見せる。

ちよこんと、不思議そうに部屋を、三浦たちを見渡す彌豆子、口にくわえた竹筒が何とも言えない可愛らしさを出している。

「はえ〜…すつこい美人…」

三浦をはじめとした面々はしばらくの間彼女の姿に見とれていた。当然の反応だろう、彼女は町でも評判の、美少女だったのだから。

皆が見とれている中、一人だけ違う反応を見せている者がいた。  
善逸だ。

彼も最初は他の者と同様、彌豆子に見とれていたが、やがてフルフルと震え出し、一瞬間が青ざめたかと思うとやがて急激に顔を真っ赤にし、目を血走らせ、炭治郎の方をじろりと見た。

「ど、どうしたんだ善逸」

突然の豹変に困惑する炭治郎。

善逸のその眼には怒りが浮かんでいる。ついでに悔し涙も。

「お前……いいご身分だなあ……?こんなかわいい子連れて、毎日うきうきいちやづき三味!お前らのために流した俺の血と汗と涙を返せー!」

一同は善逸が女好きだったことを思い出した。瞬間、善逸が日輪刀を抜刀し炭治郎に襲い掛かる。

「粛清だーっ!女にうつつ抜かすホモガキ隊士は粛清だーっ!ケツ穴に日輪刀突うずるっこんでやるーっ!」

「うわーっ落ちて善逸!それに俺はホモじゃない!」

「炭治郎、お前ノンケかよお!? (驚愕)」

突然大乱闘を始めた善逸と炭治郎、それを止めようとする野獣たち。

空手部とかまぼこ隊は今までの疲れも忘れて真夜中に再び大暴れするのであった。

善逸による炭治郎への熱心な指導(大嘘)が繰り広げられている中、別室では長髪のチャラ男ことGOがくつろいでいた。雑誌を読んだり、菓子を食ったりとのんびりして



いた様子のGOだったが、やがて何かを思い出したかのように床に座りなおすと彼は老婆に電話を持ってこさせた。

受話器を取り、古めかしいデザインの電話のダイヤルを回す。

「あ、もしもし？産屋敷さんですか？どうもこんにちはーつす。お疲れ様です。：ええ、でえ、あの例の若い鬼殺隊士の、鬼を連れた隊士とその仲間に会ったんですよ。あの無惨にも会ったみたいでえ。ああ、へーキへーキ、へーキだから。大丈夫ですよ、あの少年も鬼も、その仲間も。ついでに言うならあれは見込みあると思うんですよ。まあ、とりあえずあのまま見守って、他の柱や隊士達にも根回しパパパつとやって、終わりっ！まあ、とりあえず産屋敷さん、よろしくお願いします。：あつ実はこないだいいビール見つけたんすよ。今度調子良い時一緒に、飲みに行きましょうよ。ええ、また何かあれば。ハイ、よろしくう！ハイ！」

一通り話を終えたGOは受話器を置くと、頭をポリポリと書いた。

「またタメ口使っちゃったよ：不死川や伊黒あたりにまたどやされるなあ：まいっか。」

そういうとGOは何事もなかったかのようにまたくつろぎだすのであった。

：事態は知らないところで少しずつ動き出してた：

## 第20話 那田蜘蛛山

彌豆子の一件でひと悶着ありながらも皇都一神教の屋敷で休息の時を過ごした野獣と炭治郎たち。

その翌朝、彼らはGOと老婆に見送られながら屋敷を去ろうとしていた。

「治療もしてくれて、その上美味しい食事も風呂もいただいて…本当に、ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

深々と頭を下げて礼を言う炭治郎たちにGOは笑いながら言う。

「いいって、いいって。これが俺達の仕事だからさ。少しでも役に立てたなら嬉しいよ」

「どのような時でも誇り高く生きてくださいませ。ご武運を…」

そういつて老婆も深々と頭を下げた後、火打石を取り出してそれを打ち出した。切り火といわれるおまじないらしい。

それでは今度こそ、と一行が屋敷を離れようとした直前、GOが何かを思い出したように口を開いた。

「あ、そうそう…田所君に炭治郎君だったね？もし会ったらいいから俺からちよつと伝言があるんだけどさ…珠世さんと平野店長によろしくって伝えといて」

「…え？」

G Oの言葉に野獣と炭治郎は顔を見合わせた。

珠世、そして平野。それは今いる人物の中では二人しか知らない存在のはずだ。

その二人の名がなぜG Oの口から出てきたのか。

「あの…」

「ああ、そんなに気にしないで。出来たらの話だからさ。え、何、鬼とのドンパチが不安なの？大丈夫だって、安心しろよ。今の君たちなら鬼なんかパパパツと殺つて終わりっ！大事なものは心の持ちようだけ？」

疑問を口にしようとしたところでG Oの軽快な口調の言葉に阻まれてしまい、結局そのまま一行は屋敷を離れ次の任務の待つ那田蜘蛛山へと向かうのだった。

「ハハハハ」

「はえ〜すつ〜いおつきい…」

一行が那田蜘蛛山に到着した時、時刻はすっかり夜の時間帯に突入しており、あたり

は暗闇に包まれていた。月明りもなく夜空には星だけが微かに瞬いている。眼前には巨大な山の姿が闇の中で不気味に佇んでいる。あたりには蟬兄貴や鳥兄貴の迫真の鳴き声がクツソ五月蠅く響きそれが、不気味さに拍車をかけていた。

「ちよ、ちよつと待つてくれ」

一行が中に入ろうとしたところで善逸が野獣たちに声をかける。

見れば善逸は地面に座り込んで全身をぶるぶる震わせている。

案の定、善逸の怖がりが発動したのだ。

「ちよつと待つてくれないか！怖いんだ！！目的地が近づいてきてとても怖い！！」

肝心なところでクソザコナメクジぶりを発動した善逸に当然一行は呆れ、容赦なく罵倒の言葉を浴びせる。

「また君かあ、（任務が）壊れるなあ…」

「なんだお前、根性なしだなあ（棒読み）。この程度で怖がるのか、そんなんじや（鬼殺隊として）甘いよ（棒読み）」

「いや、でも…」

「だからこんなんじや任務になんないんだよ（棒読み）。こつちの事情も考えてよ（棒読み）」

「嫌です…」

「やめちやうの？ だったら…しゃぶれよ（迫真）」

「すいません、許してください、何でもしますから、入りますから！」

野獣の迫真の脅しの言葉に一瞬、善逸は貞操の危険を感じ態度を変えた。

と、不意に炭治郎が鼻をひくつかせ、顔をしかめる。彼の嗅覚のことを知っている野獣はすぐに炭治郎が何かを感じたのだと悟った。それもよくないものを。

「どうした、炭治郎？」

「…恐怖の匂いだ」

匂いを感じた方角に目を向けると、那田蜘蛛山の麓、山中に入る獣道の入り口付近に誰かが倒れていた。

「たす…助けて…」

倒れていた誰かはこちらに気付いたのか顔を挙げうめき声と共にこちらに助けを求めた。

よく見れば全身血まみれで、手には日輪刀を携え黒い隊服を着ている。

「隊服を着ている！ 鬼殺隊員だ、何かあったんだ！」

炭治郎たちはすぐに彼が鬼殺隊の人間であること、そして山中で何か恐ろしい尋常ならざること——鬼に關係する何か——が起こっていることを瞬時に悟った。

「何かあったんだ!?! 大丈夫か!?!」

反射的に彼のもとに駆け寄ろうとした一同だったが。

「…!?!」

「う、うわああ!!繋がっていた、お、俺にも!!助けて!ライダー助けて!!」

彼の体に触れるその直前、凄まじい勢いで彼の体が浮き上がり、後ろ向き姿勢のまま猛スピードで山中へと飛んで行きそのまま戻らなかつた。まるで体が糸か何かで山と繋がっていて。山が、あるいは山にいる何かが魚を釣るように彼を山中へと吊り上げ引き戻したかのような感じだった。

「な、一体何なんだゾ…」

「これは山中に何か潜んでますね…間違いない」

「やべえよ…やべえよ…」

突然の恐ろしい光景に一同は立ちすくむ。が、そんな中炭治郎が冷や汗を浮かべながらも静かに口を開いた。

「俺は…行く」

その口調は恐怖が感じられるものの、それを押し殺す勇気と確かな強い意志も感じさせるものだった。そんな様子の炭治郎に心配そうな目を木村が向ける。

「…行くんですか炭治郎君」

「行かなきゃいけないに決まってるだろ」

答えたのは野獣だった。その口調と目には炭治郎と同様覚悟と決意を湛えており、さながら獲物を狙い定め狩りに臨む野獣のようである。

「明らかに山中で何かが起きている。鬼に絡む何かが起きているんだ。それに助けを求められた以上行かないわけにはいかないって、はつきり分かんかね」

「そうだよ（肯定）。それにこれは任務だゾ。こういう時のための俺達鬼殺隊なんだゾ、行くのは当たり前だよなあ？」

「…そうですね。行く行かないじゃなくて、行かないやいけない、ですね」

覚悟を決めた様子の空手部三馬鹿の様子を見て伊之助がドンと胸を叩く。

「よし、じゃあ決まりだな！俺が先に行く!!お前らはガクガク震えながら後ろをついて来な!!腹が減るぜ!!」

「あ、おい待てい、腹が鳴るだゾ（池沼）」

「三浦さん…腕が鳴るですよ…」

「ポツチャマ…」

とにもかくも覚悟を決めた一行は麓の獣道から山中へと入っていく。ちなみに善逸と木村の二人だが、彼らは今麓に残っている。善逸がやつぱり行かねえと再びクソザコナメクジぶりを見せ、木村が彼を説得（意味深）しようとしているためだ。

山中に入るなり野獣たちは違和感を感じた。

蜘蛛の巣が山のあちらこちらに存在しているのだ。

もちろん自然あふれる山の中、虫や小動物が大量に生息している以上蜘蛛の巣が存在していること自体はおかしいことではない。

が、量がおかしいのだ。まるで行く手をは阻むように、獲物をからめとるようにゆく先々、四方八方に蜘蛛の巣が張り巡らされている。

伊之助などはイライラした様子でそれらを振り払っている。

「チツ、蜘蛛の巣だらけじゃねーか！邪魔くせえ！」

「いくら何でも蜘蛛の巣の数多すぎイ！まるで蜘蛛の巣にかかった虫見たいですね  
…」

「そんな言い方はやめてくれゾ…胸騒ぎがするんだゾ…」

「あ、そうだ（唐突）…なあ伊之助」

胸騒ぎと不安を抱えながら進む中、炭治郎が不意に伊之助に話しかける。

「何の用だ！」

がぼつと身構える伊之助に対し、炭治郎の口から出てきた言葉は意外なものだった。

「ありがとう。…伊之助も一緒に来ると言ってくれて、心強かった。それから浩二さんと三浦さんも一緒に来てくれて、本当に心強かったです」

不意に出てきた感謝の言葉。



「山の中からきた振れたような：禍々しい匂いに俺は少し体が竦んだんだ。そんな中、浩二さんやみんなが一緒に行くって言ってくれて：本当に、ありがとう」

そんな炭治郎のように不意に一行の空気がわずかに和やかなものになる。

「おいおい、水臭いぞ炭治郎。俺達釜の飯を一緒に食った仲間じゃねえか。仲間なら助け合うのは当然ってそれ一番言われてるから」

「当たり前だよなあ？」

伊之助も不意に言われた炭治郎の感謝の言葉に、何か温かいものを感じていた。山で一人暮らしていた時には感じなかった、そして三浦と出会って一緒に過ごしてから時折感じるようになった温かい何か。不意に屋敷で休息とついていた時の老婆の心遣いを思い出す。

暖かくてほわほわしていて：

「…！浩二さん、あれを」

「！」

不意に炭治郎が何かを見つけ、向こうを指さした。

見れば少し離れた茂みの中で、黒い服を着た誰かがへたり込んでいる。その様子からすぐに鬼殺隊員だと分かった。

「あ…」

「!?」

背後から近づき声をかけると刀に手を掛けながらその隊員がこちらを振り向いた。その顔には疲れと、恐怖が浮かんでいる。よほど恐ろしいことにいくわしていたのだろうか。

相手が炭治郎たち、鬼殺隊員だと分かりその顔から恐怖が薄れる。

「応援に来ました、階級・癸竈門炭治郎です」

が、彼らの名乗りを聞いて再びその顔に恐怖と絶望を浮かべた。

「み、癸…!? ふざけんじゃねえよオイ! なんて “柱” じゃないんだ…!! 癸なんて何人来ても同じだ! 意味がない! みんな皆殺しに…」

そこまで言いかけて隊士の男は三浦と伊之助の存在に気づきその顔を驚愕に染めた。三浦もあつという表情を見せる。

「あ、お、お前らは…」

「知ってるんですか?」

炭治郎の問いかけに答えたのは伊之助だった。

「知ってるも何も、俺と兄弟が最初に出会った隊士だ、こいつらから鬼殺隊のこととか鬼のこととか聞きだしたんだよ。ついでに日輪刀を奪ったのもこいつらからだ。だよな兄弟?」

三浦が頷く。

「そうだよ（肯定）。俺がこの時代にタイムスリップして伊之助と出会ってしばらくしてから、山の中で二人組の鬼殺隊の隊員に出会ったんだゾ。その一人がこの男で…確か村田とか言う名前だったんだゾ。ちなみにもう一人はなんかさいころステーキにされそうな咬ませ犬みたいな奴だったゾ…おい村田ア!!お前あの時俺たちのことチラチラ見てただろ（因縁）」

因縁をつけるかのような様子で話しかける三浦に対し、鬼殺隊の男こと村田は恐怖を浮かべた様子で首を振る。明らかに三浦と伊之助に恐怖か何か因縁を感じている。

「や、やめてくれあの時のことを思い出させるのは…」

伊之助がそんな様子の村田の髪の毛をひつつかんで凄んだ様子で話しかける。

「てめえ、さつきは意味がねえとかなんとか抜かしてくれたな…意味のあるなしで言ったらお前の存在自体意味がねえんだよ。さつきと状況を説明しやがれ弱味憎が!!それともあの時みたいに指導（大嘘）してやろうか?とりあえず…しゃぶれよ」

「おし、じゃあぶち込んでやるぜ!!」

「や、やめてくれよ…（絶望）、あの時みたいに指導（意味深）するのはやめてくれ…は、話すから!!」

必死に懇願する村田。

どうやらこの村田という男、三浦と伊之助に対し相当恐ろしいことをされた記憶があるようだ。

髪をひつつかまれたまま村田はこれまでのことを説明する。

「かつ、鴉から…!!指令が入って十人の隊員がここに来たんだ。山に入ってしばらくしたら、隊員が…隊員同士で…」

「隊員同士で何があつたんです」

「斬り合いになつて…!!」

隊員同士で斬り合い。

村田のその言葉に野獣と炭治郎は顔を見合わせる。

隊員の同士討ち？

鬼ではなく？

一体この山で何が起きているというのか？

次々と疑問が沸き起こる中、村田があつ、という顔をする。

その視線の先にはもう一人の隊員が佇んでいた。

が、何か様子がおかしい。

片手に日輪刀を携え、しかしその体の動きはふらふらしていて芯が無く、まるで何か  
に操られているようで。

そしてその隊員の、生気のない目と目が合った瞬間。その隊員は突然刀を構えてこちらに突進してきて――

ほぼ同時刻。

とある場所の巨大な屋敷。

その地下室に、二人の女性がいた。

いや、正確には一人の女性と一人の女鬼だ。

女の鬼は下着姿で、顔は奇妙な形をしたマスクで塞がれ、鋼鉄製の小さな立方体の牢屋の中に閉じ込められている。首は首輪と鎖で繋がれている。

女鬼と対峙している、もう一人の女はそれだけで食べていけそうなくらい端正な顔立ちをしているが、なぜかサングラスをしている。その上で何故か女の鬼と同じく下着姿だ。

両者はどちらも汗にまみれている。いったい両者の間で何があったのだろうか。

女鬼の目は焦点が合っておらず、一方の女はサングラスで目こそ見えないものの恍惚とした表情を浮かべている。

女が口を開く。

「どうでしたか、零余子さん……二人でやる運動は？ 疲れたでしょうし食事の時間にし  
ましよう！ じゃ、この一番不味い薬から……」

女が瓶を取り出したところで、どこからか鴉が現れ、女の前に止まる。

「シノブ？ 今屋敷ニ御屋形様ノ使イガ来テ出撃ノ命令ガ入ツテイマス。スグ来レマス  
カ？」

「あ、あん、はっ、はい、40分後には、いつ、行けまっす！」

「モット早く来レマスカ？」

「あ、ああ、はい、なるべくはっ、はっ、早く行きまっす」

鬼殺隊の仕事はいつも突然だ。

しのぶと呼ばれた女は名残惜しそうな目で女鬼を見たがすぐに、荒い呼吸を整え  
と、部下らしき人を呼ぶと後処理をするよう言い渡し、水浴びもせずすぐに着替えて傍  
にあった日輪刀を収めて地下室を後にする。

行先は那田蜘蛛山。

新たな敵、新たな仲間、新たな勢力。

それらが交差する先に何が待っているのか、どのような物語が繰り広げられるのかそ  
れを知る者はいない……



## 第21話 山中での戦い

那田蜘蛛山山中。

そこでは激しい死闘が繰り広げられていた。

しかし鬼と鬼殺隊士同士の戦いではない。

「アハハハハハ！馬鹿だぜこいつら、隊士同士でやりあうのがご法度だつてこと知らないんだ！」

伊之助が両手の日輪刀を振り回しながら山中を駆け時には跳躍する。その日輪刀の切先にあるのは鬼ではなく黒い隊服を着た同じ鬼殺隊士達だ。

彼らは皆一様に様子がおかしかった。あるものはその目に生気や正気がなく、あるものは傷だらけで中には一目で死んでいると分かるものもいる。

それらがどういふ訳か日輪刀を振りかざし味方であるはずの野獣や炭治郎達に襲い掛かってくるのだ。その動きも怪我や生気のない様子からは考えられないほど俊敏でしかし、どこか不自然で例えるならば――

「いや、違うぞ伊之助！この人たちは皆…皆、何かに操られているんだ！操り人形みたいに！」



同士討ちを嗤う伊之助に対し炭治郎が叫んだ。

彼らの言う通り、襲い掛かってきた鬼殺隊士はまるで操り人形のように何かに操られたかのようなだった。そうでなければこのおかしな状況は説明できないだろう。

生気のない隊士の一人が刀を振り上げながら野獣に迫る。

野獣は素早く跳躍し背後に回るとその隊士の背中……の後ろの空間を茶色の日輪刀で切り裂いた。瞬間、糸の切れた操り人形のように隊士は力なく地面に前のめりに突っ伏した。同時に一瞬、月明りに照らされて極細の糸のようなものが野獣の目に見えた。

（操り人形みたいな不自然な動きだったから試した見たけど……これは明らかに糸で操られているってはっきり分かんだね）

野獣は叫んだ。

「炭治郎、糸だ！こいつら糸で操られているからそれさえ切れれば……」

「いや、駄目です！切ってもまた蜘蛛がやってきて操り糸で繋がられるんです！ほら、浩二さんの腕にも！」

「フアツ?!なんだこの蜘蛛?!」

見れば野獣の腕にカサカサと気味の悪い蜘蛛が2、3匹くっ付いていた。その尻からはうつつすらと糸が引いているのが見えた。

瞬間、野獣は凄まじい力で糸の伸びている方向に引っ張られているのを感じた。すぐ

に糸を切り蜘蛛を掃う。

が、わずかな刺激臭と共に新たな蜘蛛がもう片手にくつつく。

蜘蛛を掃いながら傍らを見れば、さつき操り糸を切つて動かなくなつたはずの隊士達  
が再び操り人形のように不自然に立ち上がるのが見えた。その背中や腕、脚からは白い  
糸がうつつすらと見える。

思わず野獣がイラつき叫ぶ。

「ふざけんな！(半ギレ)切つても切つてもきりがねえじゃねえか！蜘蛛もちよこまか  
動く上に臭いしよお！」

「臭いのは野獣も同じゾ」

「は？(憤怒) 普段池沼ツラしてるMUR先輩には言われたくないですよー」

「浩二さん、喧嘩してる場合じゃ…!？」

不意に月明りに影が差し頭上に気配を感じた。

見上げるとそこには木々を結びように宙に張られた数本の糸と、その上に軽業師のよ  
うに立つ白い着物姿に白い髪の幼い少年がいた。生気のない白い肌、明らかに常人のも  
のではない瞳、その佇まい。間違いない、鬼だ。その目はうんこを見るような目で野獣  
や炭治郎達を見下ろしている。

身構える炭治郎達。

「僕たち家族の静かな暮らしを邪魔するな」

鬼の少年が口を開く。口調こそ静かだがそこには明確な殺意を感じた。

「お前らなんてすぐに母さんが殺すから」

そのまま鬼の少年は空中に張られた糸の上を歩いてどこかへ立ち去ろうとする。

「待ちやがれえ！」

伊之助が鬨志と殺意を漲らせ日輪刀を振り回しながら鬼の少年めがけて跳躍したが、思いのほか糸の高度が高く、あと僅かの差でその日輪刀の切先が届くことはなかった。

「畜生、何のために出てきやがったんだ！勝負しろ勝負！こんちきしょう！」

着地したとたん暴れだす伊之助。

そうしている間にも糸に操られた隊士達が襲い掛かる。

操り糸を切つては再び立ち上がり、その糸を切つては…の繰り返しだ。きりが無い。

三浦が叫ぶ。

「多分さっきの鬼は操り糸の鬼じゃないぞ！操ってる鬼は別にいるはずぞ！伊之助、獣の呼吸を使って周囲を探って欲しいぞ！」

「あい分かった、兄貴！」

伊之助は叫ぶと二刀の日輪刀を地面に突き刺し、その場に座り込む。

そのまま精神統一し、集中。

獣の呼吸、漆ノ型、空間識覚——

炭治郎が嗅覚、善逸が聴力に優れる一方、荒山育ちの伊之助は優れた触覚の持ち主だった。我流の呼吸法により研ぎ澄まされた触覚は集中することにより空気の微かな揺らぎすらも感知し。遠くの直接触れていないものでも察知しとらえることが出来る。

伊之助がかつと叫ぶ。

「いたぜえ、北、あつちの方向だ！」

「でかしたゾ、伊之助！」

「はええくすつごい触覚！」

鬼がいるであろう方向に向けて駆け出す野獣と炭治郎。

が、それを阻むように彼らの目前に糸で操られた隊士たちが群がる。

「浩二さん、まず彼らを何とかしないと……！」

「ここは俺に任せて先に行け！」

そこへ先ほど山中で出会い、助けた鬼殺隊士・村田が駆け寄る。

伊之助が叫んだ。

「モロ感のガバ穴が何言ってるんだ！」

「誰がモロ感のガバ穴だこのクソホモ猪!!誰のせいでガバ穴になったと思ってんだ、

黙つとけ！…情けないところを見せたが俺も鬼殺隊の剣士だ！ここは俺が何とかする！操り糸を切れればいいというのが分かったし、ここで操られている者たちの動きも単純だ！蜘蛛にも気をつける！鬼の近くはもつと強力に操られている者がいるはずだ、四人で行つてくれ！」

「分かりました！」

「援護ありがとナス！」

「俺たちの活躍を見せてやるよ（震え声）」

「その前にまずテメエを一発殴つてからな！誰がクソホモ猪だ！戻つてきたら絶対殴るからな！」

「うるせえ！襲つてきたのはお前らの方だろ！」

野獣と炭治郎は足止めに回った村田に感謝を述べ、ぶち切れる伊之助を抱え、引きずりながら操り鬼がいるであろう場所へと急行した。

…だが、野獣と炭治郎たちがその糸を操る鬼と対峙することはなかったのである。

「!!」

しばらく走っていると、目の前に人影が見えた。

鬼ではない。見えたのは黒い隊服——鬼殺隊士だ。ポニーテールの髪形をした女の隊士の姿が野獣たちの目に入った。

すぐさま駆け寄ろうとして、その鬼殺隊士が叫んだ。

「駄目……こつちに来ないで！階級が上の人を連れてきて!!でない……そうしないと、みんな殺してしまおう！お願い、お願い!!」

見れば女の隊士の体のあちこちからは白い糸が伸びており。そして右手に握られた日輪刀の切先はすでにこと切れた別の隊士の首に突き刺さっており。左手は引きずるように別の隊士の死体の髪を掴んでいた。

野獣たちは何があったのかを察した。

同士討ちだ。

無論、この女が狂ったわけではないことはその様子やこれまでの経緯から明白だった。操り糸で操られ、意図しない同士討ちをさせられたのだ。

「逃げてえ！」

女隊士が叫ぶと同時に、その日輪刀が握られた腕が野獣隊めがけて振り回された。

(速い！)

その斬撃のスピードは先ほど対峙した操られた隊士達のそれをはるかに上回っていた。

鬼に近づくほど強力に操られた隊士がいるはず——村田の言葉を思い出す。

「操られているから動きが全然違うのよ！ 私たちこんなに強くなかった！」

泣きながら叫ぶ女隊士。

次の瞬間、女隊士の両腕が背中の中の後ろに回り、明らかに向いてはいけけない、不自然な方向に曲げられ、あるいは捻られる。さらに涙に目を滲ませ、悲鳴を上げる。ミシミシと体が、骨が悲鳴を上げる音が野獣たちの耳にも響いた。

「鬼が糸で無理やり体を動かしているから骨が折れてもお構いなしなんだ！ 鬼の屑がこの野郎……！」

炭治郎が静かなる怒りに満ちた口調で言う。

さらにおぞましい光景は広がる。

血の匂いを感じ、向こうに目を見やると、木々の中から糸で吊るされ操られた血塗れの隊士達が現れた。あるものは瀕死の重傷を負い、あるものはすでにこと切れ生気の無い虚ろな瞳が宙を眺めている。

「い、殺してくれ……！」

血塗れの瀕死の隊士が息も絶え絶えに口を開く。

「手足も……骨、骨が……内臓に刺さって……るんだ。動かされると激痛で、耐えられない……どの道もう死ぬ……早く、助けて、楽にしてくれ……と、止めを刺してくれ……！」

「……！狂いそう……！（静かなる怒り）」

「この畜生めが！」

野獸と三浦が怒りのあまり叫ぶ。もちろん鬼に対してだ。

人を好き勝手に操り、肉体の限界もお構いなしに操って体を損傷させ、望まぬ同士討ちをさせ、死を望むほどの苦痛を与え——どこまで非道で屑なのだ、鬼というのは。

「よし、わかつたあ！」

野獸たちが怒りに震える一方で、伊之助は我先に駆け出し瀕死の隊士を介錯しようとする。

「さて伊之助！相手は怪我人だ、まだ助かるかもしれないし、死体も下手に傷つけるわけには——」

「うるせえ！こいつらさっきのより動きが速えからもたもたしてるところがちがやられるぞ——」

「介錯は待ってくれ、今あの人たち助ける方法を考えるから！」

「じゃあ早く考えるんだよ、あくしろよ！」

駆け出す炭治郎達。

技は使いたくない。だが糸を切ってもすぐにまたつながる。ならば——

炭治郎は別方向に駆け出した。



操られている女隊士も後を追うように駆ける。予想通りだ。

炭治郎はそのまま駆ける。気の周りやあたりをグルグルと回るように。

「おい、炭治郎、さつきから何グルグル回ってんだ！」

炭治郎の突然の行動に思わず怒ったように叫ぶ伊之助。

だが野獣と三浦は何かを悟ったようだ。

「先輩、これって……」

「ああ、俺たちも便乗するゾ！」

野獣と三浦も炭治郎の行動に便乗し、あたりや木の周りをグルグルと駆け回る。

そして。

「フアッ!？」

不意に炭治郎は体躯を後ろに回し、女隊士の体に素早く、がっしりとしがみつく。そのまま全身に力を込めて跳躍。驚きの声を上げる隊士。炭治郎と女隊士の体は木の枝を超えて飛び——そこで炭治郎は枝を飛び越えるように女隊士の体を投げる。炭治郎はそのまま着地し、一步投げ飛ばされた彼女の体は地面に激突することはない。木の幹や枝に糸が絡み、そのまま宙にぶら下がった。

——よし（確信）、うまく絡まった——

思わず笑う炭治郎。

糸が絡まっているからこれ以上変に操られることはない。

見れな野獣と三浦も操られている隊士の糸を絡ませることに成功した様子だった。一連の動きを見て伊之助が声を上げる。

「なんじゃあ、それええ！俺もやりてえ！」

そのまま先ほど炭治郎がしたように動く。

「ウハハハハ！ハハハハ！イヤーツ、ハアー！」

炭治郎よりも素早く駆け鮮やかに跳躍し、隊士を投げ飛ばし糸を絡ませる伊之助。

「どうだ、見たか炭治郎！お前に出来ることは俺にもできるんだぜ！！」

「いや、見て）ないです。状況が状況だから…」

「は？（威圧）じゃあ俺がもう一回やるから見てろ！！」

騒ぎ出す伊之助達。だが何にせよ、隊士達の安全を確保することには成功したのだ。た。

炭治郎達が操り糸を絡ませて奮闘していたころ。少し離れた森の中では白い着物を着た、白髪に激エロボディの女が木の幹に座っていた。その顔の模様や瞳の様子から鬼だと分かる。その手の指からは無数の蜘蛛の糸があちこちに伸びている。

そう、この激エロボディの鬼こそが隊士達を操っていた鬼——母蜘蛛だった。

糸が絡められ、操れなくなったことを悟った母蜘蛛は今、怒りと恐怖、焦りに震えていた。

「ううう…あの人形を、出すしかないわね…」

この母蜘蛛は己の意志だけで動いているのではない。先ほど炭治郎達の前に現れた少年の鬼——彼女にとっては恐るべき支配者に命令され、こうして隊士を操り戦っていた。

母蜘蛛、と名乗っているがそれはあの少年の鬼——累に母親役を強いられているからだ。そのうえ、まともに役目を果たさないと彼による死よりも恐ろしい拷問が待っていた。

つい先ほども、早く相手を始末しなければ痛めつけると脅されたばかりだ。

にもかかわらず、この状況。早く彼らを始末しなければ恐ろしい運命が待っている。

「もう必要ないわ、脆い人間の形は!! 役立たず!! 役立たず!!」

格下であるはずの人間に翻弄されている怒りと苛立ち、累への恐怖から、そして次の一手を繰り出すため、操っていた隊士の首をへし折って処分しようとして指を動かそうとした時だった。

「わあ、それがあなたの血鬼術ですかあ。そんなにたくさん糸を操れるなんて思わな

かったあ」

「!?」

不意に頭上から声がしたと思ったら、次の瞬間、指から張り巡らされていた糸が切断され、首筋にチクリとした痛みが走ると同時に、母蜘蛛の眼前に一人の少女が降り立った。

…その女は一言でいえばおかしな格好をしていた。

それだけで食べていけそうなほど端麗な顔には変わった形のサングラスが掛けられている。来ている服装も普通の着物でも洋装でもなく、月明りに黒く鈍く光る、SM嬢が着るようなレザーのボンテージ。体にびっちり張り付くボンテージは艶やかな肌を見せ、その豊満な激エロボディをさらに強調している。

「あ、あんたは…」

「あ、申し遅れましたね、すみません挨拶が先なのに…」

突然の不審者に震える声を出す母蜘蛛に少女は薄く笑いながら答える。

「皆さん、ご無沙汰しております。（初見）鬼殺隊蟲柱兼悶絶女鬼専属調教師の胡蝶しのぶと申します」

母蜘蛛は震えていた。

明らかにおかしい恰好、冷静な振る舞い、さつきまで気付かれずに接近されたこと。

そして、彼女から感じる息の詰まるような圧迫。

しかしそれは彼女が普段から感じていた累からのものや、死の気配とはまた違う、おぞましく、そして淫靡さをまもっていた。

しのぶは薄く笑いが口を開く。

「あら、どうしたんですか？ そんなに怖がらなくてもいいのに…私はあなたを助けに来たんですよ。仲良くしましょう、協力してください」

「助けに…？」

「ええ。でもあなたは鬼。これまでに数えきれない人間を殺し食べてきました…ですから仲良くするには正しく罰を受けて生まれ変わらないと…」

「ば、罰？」

「はい、たとえば人間便器マスクを着けて小便を飲んだり、糞を食ったり、ドジョウを直腸に突っ込んでアナル開発をして、アナル地獄賞を競ったり…あ、大丈夫はじめは比較的オーソドックスなSMPプレイから始めますから！」

しのぶの口から放たれる、少女のものとは思えないおぞましい単語の数々。

間違いない。こいつは——変態だ。

青ざめる母蜘蛛をよそにしのぶは続ける

「まあ、要するにあなたを芸術品に仕立てや…仕立てあげてやんですよ。あなたを芸

術し…品にしたんですよ（過去形）。あなたを芸術品にしてあげるんですよ（妥協）」

「ふざけんな！（迫真）なんだってあなたのおもちやにされなきゃいけないのよ!?!死ね!?!?!」

母蜘蛛は技を繰り出そうとしてそのまま力なく倒れ伏した。

体が力が入らない。体が熱い。皮膚がどこかに触れるたびに敏感に反応する。動悸が早い。技も繰り出せない。意識が朦朧とする。まるで、毒か薬でも盛られたかのように——そこで彼女はさつき首筋に刺されるような痛みを感じたことを思い出した。

「あ、さつきちよつと薬をキメさせてもらいました。私のように毒を使う剣士もいるんですよ」

忍は笑顔のまま母蜘蛛に近づく。

「や、やめ…やめて…」

「蟲柱兼鬼殺隊専属調教師胡蝶しのぶ。私は他の柱と比較して筋力が貧弱すぎる、唯一鬼の首が切れない剣士ですが——鬼を殺せる毒と、女の鬼限定ですが鬼を調教する技術を作ったちよつと凄いい人ですよ。それじゃあ、おとなしく私のおもちやになってくださいね」

しのぶはそのまま倒れ伏す母蜘蛛の首に腕を回し一気に締め上げる。

「落ちろ…落ちたな（確信）」

すでに薬で衰弱していた母蜘蛛は大した抵抗もできず、そのまま意識を失い。そして、しのぶの戦利品、奴隷女鬼として飼われることになってしまったのであった…